日向市所在

しお み じょう あと **塩 見 城 跡**

東九州自動車道(門川~日向間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4

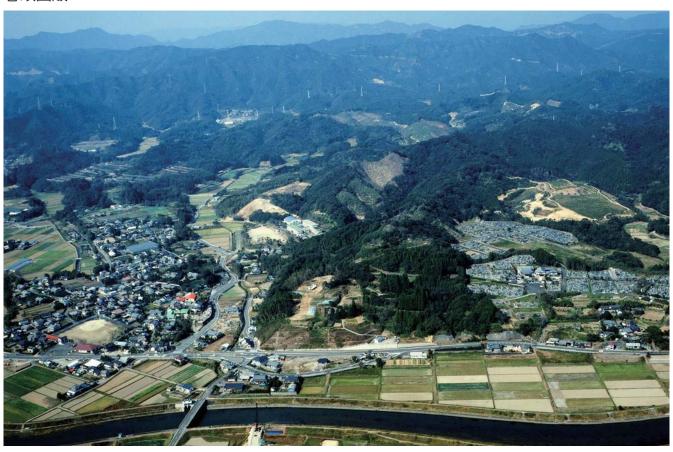
2012

宮崎県埋蔵文化財センター



塩見城跡から日向灘を臨む

塩見城跡は、日向灘に向けて扇形に開く沖積平野の起点に位置する (写真左隅)。塩見川は、塩見城と対岸の比良山との間を貫流している。この塩見川の河畔 (弧状に残る道路部分) まで南側曲輪群は迫っていた。



塩見城跡とその周辺(塩見川から臨む) 写真中央の山塊部分が塩見城跡。三方を沖積地と河川に囲まれ、険しい山地を後背とする。



南側曲輪群から西側曲輪群を臨む 写真中央付近の伐採箇所が西側曲輪群。写真右側の東屋の位置する箇所が主郭部である。(写真奥は戸高山)



曲輪 A 群と比良山 (曲輪 B 群から臨む)

塩見城跡の特徴の一つは、主郭部から延びる痩せ尾根上を階段状に開削して幾重にも曲輪を配置させる構造である。西側曲輪群の一角を占める曲輪 A 群は、四万十層群の固い岩盤を削って造成されるが、その土木作業の困難さは想像し難い。最も広い平坦面 (曲輪 A3) は市道面よりビル 5 階建ての高さ (15m) の位置にある。(写真奥は南側曲輪群と比良山)



城の守り (堀切 A3)

塩見城跡の発掘調査では堀切や横堀、竪堀など様々な形態の堀が認められた。この一つの堀切 A3 は、曲輪面の一角を大きく切断して防御性を高めた薬研堀である。堀の深さは 2.5m を越え、よじ登ることもできない。写真奥に見える逆三角形のシルエットは、堀切の精美なつくりを映し出している。



井戸と曲輪 (井戸跡と石積遺構)

曲輪 A・B 群の間にある谷地形部分 (水の手曲輪)では、石積遺構や土塁・堀で区切られた空間内に井戸跡や掘立柱建物跡が展開していた。写真右奥隅に位置するのは 1 号井戸跡、写真手前が 1 号石積遺構である。中世山城において「水」の確保は必要不可欠であり、この「水」を守るために石積遺構の堅牢性が求められたのであろう。

巻頭図版 6



道路状遺構 (SG1) と掘立柱建物群 (比良山を望む)



道路状遺構 (SG2) と曲輪群 (曲輪 D 群を望む)



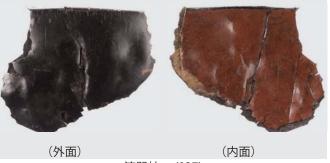
龍首水注 (342)



漆器椀 (936)



土製聖人像 (808)



漆器椀 (937)

塩見城跡出土遺物

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道(門川~日向間)建設予定地に係る埋蔵 文化財の発掘調査を平成17年度から実施してまいりました。本書には平成17年度 から21年度に実施した塩見城跡の発掘調査成果を記載しております。

塩見城跡は日向市街地に程近い、塩見川の北岸に広がる丘陵に位置する 14 ~ 17 世紀にかけて営まれた中世の山城です。「曲輪」や「堀切」、谷をふさぐ「石積遺構」などを効果的に配置して防御性を高めて主郭部分を守る構造がわかりました。

さらに、広い面積をもつ曲輪群と中央を貫く道路状遺構も確認できました。この 曲輪群には、おびただしい数の柱穴があり、多くの掘立柱建物跡が存在しました。 日常生活に使う陶磁器や土器類も数多く出土しています。

このように、塩見城跡は、塩見川を介した海と山を結ぶ情報や流通の交差点であり、 当時の日向・延岡地域の支配権をめぐる前線基地でもあったということから、戦い のための城や周辺地域の拠点という性格だけでなく、有力者層の居住地にもなって いたと考えられます。

上記のように、今回の調査で得られた多くの成果は、今後、当地域の歴史を解明 する上で有益な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・ 御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成 24 年 3 月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 森 隆茂

例 言・凡 例

- 1 本書は、東九州自動車道(門川〜日向間)建設に伴う日向市に所在する塩見(しおみ)城跡・中山遺跡の埋蔵文化財発掘 調査報告書である。
- 2 発掘調査は、西日本高速道路株式会社九州支社の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが平成17~21年度に実施した。
- 3 本遺跡は、『東九州自動車道関連遺跡詳細分布調査報告書』 2 (宮崎県教育委員会編 1995 年) に基づき、「中山遺跡」と「塩見城跡」と別個に調査を進めた。しかし、両遺跡の調査の結果から中山遺跡は本来的に塩見城域内として包含されると判断されたので、「中山遺跡」調査分を「塩見城跡」の調査報告の一部とした。この中山遺跡の調査成果は、本書の第IV章に掲載している。なお、両遺跡に関わる文書・記録類等は、全て調査時のままとなっている。
- 4 中山遺跡・塩見城跡については、既に以下の文献で一部報告されているが、記載内容については本書が優先する。
 - ・宮崎県埋蔵文化財センター 2006『東九州自動車道(門川〜日向間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書 I 』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 132 集
 - ·南九州城郭談話会 2009『見学会·研究会資料集』
- 5 現地調査のうち、以下のものについては業務委託した。
 - ・基準点・グリッド杭等の設営

中山遺跡…(株)新産測量設計コンサルタント

塩見城跡・・(株)ケイディエム

• 空中写真撮影

中山遺跡・塩見城跡… (株) 九州航空

塩見城跡・・(有)スカイサーベイ九州

遺構実測

中山遺跡・・土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム「人骨出土状況」 塩見城跡・・(株)朝日航洋「1号石積遺構」

- 6 現地での遺構図作成・写真撮影については、調査担当者がそれぞれ行なった。なお、遺構面検出時の地形は新測地系の国 土座標に基づく電子平板とトータルステーションによる測量である。遺構平面図も同様な記録方法を採った。
- 7 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。
- 8 遺物の実測作業、遺構と遺物のデジタル製図作業は田中敏雄、渕ノ上隆介、田中達也、小船井順、児玉幹、川俣唱子が行い、整理作業員の補助を得た。出土土器、特に陶磁器類の分類については県文化財課堀田孝博氏の協力を得た。遺物写真撮影は田中(敏)により行い、今塩屋毅行がこれを補助した。
- 9 自然科学分析は以下のとおり業務委託した。
 - ・鍛冶関連遺物における金属分析

中山遺跡…九州テクノリサーチ・TAC センター

・人骨の取り上げと鑑定

中山遺跡・土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

· 放射性炭素年代測定

中山遺跡・・(株)パレオ・ラボ 塩見城跡・・(株)古環境研究所

・木製品の樹種同定・漆膜構造分析

塩見城跡… (株) 吉田生物研究所

なお、上記の成果報告については、田中(敏)と松田博幸が編集の上、本書の第Ⅷ章に掲載している。

- 10 木製品の保存処理は(株)吉田生物研究所に業務委託した。
- 11 金属製品の保存処理は、おもに嶋田史子および児玉が行った。中山遺跡出土の金銅製品については(株)吉田生物研究所に業務委託した。
- 12 本文の執筆は分担して行い、第Ⅶ章以外は、その文責名を各文末に示した。なお、複数の場合は五十音順に示した。
- 13 本書の第111章第2節「塩見城の歴史的位置」については、県文化財課文化財係副主幹若山浩章氏(当時)に御寄稿いただいた。
- 14 本書の作成は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書の編集は主に田中(敏)が行った。なお、遺構一覧表及び遺構出土 遺物一覧表は川俣が作成した。
- 15 出土遺物および記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。
- 16 本書で使用した周辺遺跡位置図等は国土地理院発行の 1/50,000 図をもとに、周辺地形図等は西日本高速道路株式会社九州支社延岡高速道路事務所から提供された 1/2,500 図等をもとに作成した。
- 17 本書に使用した主な略記号は次の通りである。

SA=竪穴建物跡 SB=掘立柱建物跡 SC=土坑 SD=土坑墓 SE=溝状遺構

SF=井戸跡 SG=道路状遺構 SI=集石遺構 SR=柵列 SS=石積遺構 SX=不明遺構

- 18 本書で使用した標高は海抜高である。方位は座標北 (G.N.) を用い、図中では「N」で示した。
- 19 本書で使用する土層および土器の色調については、農林水産省技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に拠り記述した。
- 20 本書に記載する層の略称は「東九州自動車道(都農~西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書VI」(宮崎県埋蔵文化財センター 2006)第 I 章第 3 節の記載に準じる。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	第Ⅴ章	近世の遺構	169
第1節	調査に至る経緯・・・・・・・・・ 1	1	曲輪Gの近世墓	
1	調査に至る経緯	2	曲輪 K の近世墓	
2	塩見城跡・中山遺跡における既往の調査歴	3	曲輪Mの遺構	
第2節	調査の組織・・・・・・・・・・・ 1	4	近世墓の時期について	
第3節	地理的環境 •••••• 2	第VI章	遺物	
1	遺跡周辺の地形と地質	第1節	陶磁器 • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	173
第4節	歴史的環境 • • • • • 4	1	中世貿易陶磁	
1	塩見城築城以前(原始・古代)	2	中世国産陶磁	
2	塩見城築城以後(中世・近世)	3	中•近世陶磁器	
3	塩見城跡周辺の寺社と石塔群	第2節	土器類 • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	204
第Ⅱ章	発掘調査・整理作業の方法と経過	1	中世土器	
第1節	発掘調査の方法と経過・・・・・・・ 7	2	古代以前の土器	
1	調査の方法と経過	第3節	瓦(中近世)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	210
2	遺構等の記録について	1	中世瓦	210
第2節	整理作業の方法と経過・・・・・・・・・8	2	近世瓦	
1	調査報告にあたって	第4節	土製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	211
2	遺構の認識と名称について	1	土錘	211
3	遺構実測図の掲載について	2	海製硯 1	
4	遺物の図化・掲載について	3	土製聖人像	
5	遺物の整理	第5節	金属製品 (中近世)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	222
6	報告書原稿の作成		金属製品	222
第3節	教育普及活動	1	並周表明 鉄製品	
		2 等 c 第	鍛冶関連遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	227
第Ⅲ章	西側曲輪群の調査 調査の概要・・・・・・・ 10	第6節		221
第1節	調査の概要・・・・・・・ 10 曲輪 A 群・・・・・ 12	1	羽口・炉壁	
第2節	曲輪 B 群 · · · · · · · · 29	2	鍛冶滓 木製品 •••••••	227
第3節		第7節		227
第4節	曲輪 C 群 · · · · · · · · · 40 堀群 · · · · · · 43	1	生活用品	
第5節		2	建築部材	225
第6節	水の手曲輪・・・・・・・・・・・・・・・・・・47 西側谷部・・・・・・・・・・・87	第8節	石器・石製品・石塔・・・・・・・・・・	235
第7節		1	石器	
第IV章	南側曲輪群 (中山遺跡) の調査	2	石製品	
第1節	調査の概要・・・・・・・ 95	3	石塔	
第2節	曲輪 D 群 · · · · · · 96	第Ⅵ章	自然科学分析の結果	
第3節	曲輪E群 · · · · · · 103	第1節		
第4節	曲輪 F 群 · · · · · · · 109	第2節	放射性炭素年代測定 • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	271
第5節	曲輪G ····· 122	第3節	樹種同定 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	275
第6節	曲輪H群 · · · · · · · 125	第4節	漆製品の塗膜構造・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	278
第7節	曲輪 I · J · K群 · · · · · · 134	第5節	金属分析 ••••••	280
1	曲輪I	第Ⅷ章	総括	
2	曲輪」群	第1節	塩見城の縄張り・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	297
3	曲輪K	第2節	塩見城の歴史的位置・・・(若山浩章)	301
第8節	曲輪L·M·······145	第3節	遺物と遺構の検討・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	308
1	曲輪L	第4節	結び・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	321
2	曲輪M	附編		
第9節	道路状遺構 (SG) · · · · · · 149		遺跡の調査とその成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	323
1	南側曲輪群を縦横断する遺構群	補記		
2	概要		縮減に伴う未調査部分について・・・・・・	325
3	道路状遺構 1 (SG1)	(塩見	上城跡・板平遺跡)	
4	道路状遺構 2(SG2)			
5	道路状遺構 3 (SG3)			

挿図目次

第 1図	遺跡分布図	3	第 66 図	曲輪 D 群 十層断面図 (1)	100
労 2 図	遺跡分布図 塩見城跡周辺の城館分布図	6	第 67 回	冊幹 D 莊 十宮帳空図 (2)	101
第 4 凶	塩兄姚邺问及97城路万尔凶 佐县 1355 图 37 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5 5	0	第 07 区	世	101
第 3 図	塩見城跡周辺地形と高速道路用地の位置	10	第 68 図	田輪 D-SCI 堀切 DI 実測図	102
第 4 図	塩見城跡内調査区と曲輪の関係	11	第 69 図	曲輪 E 群 遺構配置図	105
第 5 図	塩見城跡全体遺構配置図	13	第 70 図	曲輪 E 群 十層断面図 (1)	106
第 6 図	而 们	15	第 71 図	中野 比 计 一 工	107
先 7 四		1.0	为 11 囚		107
第 7 図	田輪 A 群遺構配直凶	18	第 72 図	掘立柱建物跡美測凶(1)	108
第 8 図	曲輪 A1・A2 遺構配置図	19	第 73 図	曲輪 F 群 遺構配置図	111
第 9 図	曲輪 A1・A2 十層断面図	19	第 74 図	曲輪 F3 実測図	112
第 10 図	中野 V3	22	第 75 図	山輪 F 作石造構宝測図	113
先10日	山州 A3 医特比巨色	22	第 70 図	四洲 1 米口及伊大阴囚	113
弗口凶	⊞ H A 3 工 上 目 断 且 区 (1)	22	弗 /6 凶	加工性建物跡美測図 (Z)	114
第 12 図	曲輪 A3 土層断面図 (2)	23	第 77 凶	掘立枉建物跡実測凶 (3)	115
第 13 図	帯曲輪 A3b 遺構配置図	23	第 78 図	掘立柱建物跡実測図 (4)	116
第 14 図	帯曲輪 A3h 土層断面図	23	第 79 図	掘立柱建物跡宝測図 (5)	117
労 1 E 図	冊較 A 4 湯接町墨図	24	労 10 回	最立於建物數字測図 (6)	110
第13 图	世州 A4 - 退悔癿自囚	24	第 00 区	加工住建物助关例图 (0)	110
弗 I6 図	田輪 A4 土	24	第 81 図	掘立柱建物跡美測凶 (7)	119
第 17 図	団塊 (ノジュール) 曲輪別出土個数比	25	第 82 図	掘立柱建物跡実測図 (8)	120
第 18 図	団塊重量比	25	第 83 図	掘立柱建物跡実測図 (9)	121
第 10 図	掘立柱建物跡宝測図 (1)	26	第 84 図	曲輪 C 遺構配置図 • 土層版面図	122
第10回	加工工产的购大的区(1)	27	第 0年回	世帯 C 2 四川 国内 工作所 国内	100
弗 20 凶	畑立仕建物跡美側図 (Z)	21	弗 85 凶	田輔 G 地路 不退 相 美 別 凶	123
第 21 図	掘立枉建物跡実測図 (3)	28	第 86 凶	掘立枉建物跡実測図 (10)	124
第 22 図	曲輪 B 群 遺構配置図	31	第 87 図	曲輪 H 遺構配置図	126
第 23 図	曲輪 R 群 十層斯面図	33	第 88 図	曲輪 H 西側斜面部潰構配置図	127
第 2.4 図	曲輪 D1 - D2 /鲁冉司罕网	25	労 00 四	中野 II 、	120
第 24 凶	世輪 DI ~ DO 退傳配直凶	33	第 09 区	世 T 地	129
第 25 図	田輪 B3 - 遺構配直凶	36	第 90 図	田輻 H SCI 美測図	129
第 26 図	曲輪 B4 遺構配置図	36	第 91 図	掘立柱建物跡実測図 (11)	130
第 27 図	掘立柱建物跡実測図 (4)	37	第 92 図	掘立柱建物跡実測図 (12)	131
第 28 図	堀立柱建物跡宝測図 (5)	38	第 03 図	堀立柱建物跡宝測図 (13)	132
第 20 四	加工工厂的财大的区(0)	20	第 04 図	1/41/11/11/11/11/11/11/11/11/11/11/11/11	102
弗 29 凶	拙立性建物跡美測図 (b)	39	弗 94 凶	畑立仕建物砂美側図 (14)	133
第 30 図	曲輪C群 遺構分布図	41	第 95 図	曲輪 I・J・K 群 遺構配置図	136
第 31 図	曲輪 C 群 土層断面図 (1)	41	第 96 図	掘立柱建物跡実測図 (15)	137
第 32 図	曲輪 C 群 十層新面図 (2)	42	第 97 図	掘立柱建物跡実測図 (16)	138
労 02 回	品報 ◇左図	1.4	労 00 図	最立於建物就生測図 (17)	120
分の区	畑州 月刊園	44	第 90 区	加工住建物助天侧区(17)	139
弗 34 凶	畑群 工層断則図 (1)	45	弗 99 凶	畑立仕建物跡美側図 (18)	140
第 35 図	堀群 土層断面図 (2)	46	第 100 図	掘立柱建物跡実測図 (19)	141
第 36 図	各遺構面の層位的関係	47	第 101 図	曲輪J群 遺構実測図	141
第 37 図	水の手曲輪 第 I ~IV期面の遺構配置図	49	第 102 図	曲輪 I 群 通路 2·3 SC1 実測図	142
労 20 図	小の手曲輪 20 m m m m m m m m m m m m m m m m m m	50	労 102 回 笠 102 回	冊幹 № 海樺町器図 十 屋帳	1//
好 30 囚	塩見城跡周辺地形と高速道路用地の位置塩見城跡内調査区と曲輪の関係塩見城跡全体遺構配置図西側輪群遺構配置図曲輪A1・A2 遺構配置図曲輪A1・A2 遺構配置図曲輪A3 遺構配置図曲輪A3 遺構配置図曲輪A3 土層断面図(1)曲輪A3 土層断面図(2)帯曲輪A3b 土層断面図 団塊(ノジュール)曲輪別出土個数比団塊重量比据立柱建物跡実測図(2)掘立柱建物跡実測図(3)曲輪B群 遺構配置図曲輪B4 遺構配置図曲輪B1~B3 遺構配置図曲輪B4 遺構配置図曲輪B4 遺構配置図曲輪C 型塊重性建物跡実測図(3)曲輪B群 遺構配置図曲輪B4 遺構配置図曲輪C 型 遺構配置図曲輪B4 遺構配置図曲輪B1~B3 遺構配置図曲輪B4 遺構配置図曲輪B1~B3 遺構配置図曲輪B4 遺構配置図細輪B4 遺構配置図細輪B4 遺構配置図細輪B4 遺構配置図細輪B4 遺構配置図細輪B5 遺構配置図細輪B4 遺構配置図細輪B5 遺構配置図細輪B4 遺構配置図細輪B5 遺構配置図細輪B5 遺構配置図細粒柱建物跡実測図(5)掘立柱建物跡実測図(5)掘立柱建物跡実測図(5)掘立柱建物跡実測図(5)掘立柱建物跡実測図(5)掘立柱建物跡実測図(5)掘立柱建物跡実測図(5)掘立柱建物跡実測図(5)掘立柱建物跡実測図(5)掘立柱建物跡実測図(5)掘立柱建物跡実測図(5)堀立柱建物跡実測図(5)堀立柱建物跡実測図(5)堀立柱建物跡実測図(5)堀立柱建物跡実測図(5)堀立柱建物跡実測図(5)堀立柱建物跡実測図(5)堀立柱建物跡実測図(5)堀立柱建物跡実測図(5)堀立柱建物跡実測図(5)堀立柱建物跡実測図(5)堀立柱建物跡実測図(5)堀立柱建物跡実測図(5)堀立柱建物跡実測図(5)堀立柱建物跡実測図(5)堀立柱建物跡実測図(5)堀立柱建物跡実測図(5)堀立柱理物跡実測図(5)堀立柱理が設備型図(5)堀立は、5円に、5円に、5円に、5円に、5円に、5円に、5円に、5円に、5円に、5円に	50	第103 区	曲輪 D 群 土層断面図 (2) 曲輪 D 形 土層断面図 (2) 曲輪 D 形 土層断面図 (2) 曲輪 D · SC1 堀切 D I 実測図 曲輪 E 群 遺構配置図 曲輪 E 群 土層断面図 (2) 掘立柱建物跡実測図 (1) 曲輪 F	144
第 39 図	水の手囲輪を達地状遺構工層断面図	51	第 104 図	田輪 K SCI SD3 実測図	144
第 40 図	水の手曲輪 SS2 実測図	52	第 105 図	曲輪 L・M 遺構配置図	146
第 41 図	水の手曲輪 SF1(a期)-SE3、SF1(b期)-SE2実測図	57	第 106 図	曲輪 M SA1·2 SC1 実測図	147
第 42 図	水の手曲輪 遺構配置図 (第V期面) 水の手曲輪 土層断面図 (1) 水の手曲輪 土層断面図 (2)	61	第 107 図	曲輪 M SC1 宝測図	147
数 42 函	ルの手曲幹 上屋販売図(1)	62	第 107 四	据子技净解除中别图 (20)	1/0
分 43 区	小の子田粣 上層附回囚(1)	02	第 100 区	加工住建物购买例图 (20)	140
弗 44 凶	水の手囲輪 工層断面図(2)	63	弗 109 凶	退路状退愽Ⅰ(SGI) 退愽配直凶	150
第 45 図	水の手曲輪 SF1(c期)実測図(1)	65	第 110 図	道路状遺構 1 (SG1-1 区) 土層断面図 (1)	151
第 46 図	水の手曲輪 SF1(c 期) 実測図 (2)	67	第 111 図	道路状遺構 1 (SG1-2 区) 実測図	153
第 47 図	水の手曲輪 SS1(i期)実測図(1)	70	第112図	溜枡状遺構 2•3 実測図	155
第 48 図	水の手曲輪 SS1(i期)実測図(2)	71	第113 図	道路状遺構 1 (SG1) 石積遺構と SB1	156
第 49 図	水の手曲輪 SS1 内部の構造	72	第 114 図	道路状遺構 1 (SG1) 石敷遺構 実測図	157
第 50 図	水の手曲輪 SS1 内部の石積み壁体実測図	73	第 115 図	道路状遺構 2(SG2) 平面図・断面図	159
第 51 図	水の手曲輪 SS1(ii期)実測図	75	第 116 図	道路状遺構 3 (SG3) 平面図・土層断面図	161
第 52 図	水の手曲輪 SS1 断面見通し図・土層断面図 (1)	77	第117図	近世墓の配置図(曲輪 G・曲輪 K)	170
	* * *				
第 53 図	水の手曲輪 SS1 断面見通し図・土層断面図 (2)	79	第 118 図	曲輪 G 近世墓 (SD1~3) 実測図	170
第 54 図	水の手曲輪 SF1(c期)・SE1 実測図	80	第 119 図	曲輪 K 近世墓(SD5)実測図	171
第 55 図	水の手曲輪 SE1 C 区 (暗渠部)及び D 区 A-B		第 120 図	白磁実測図 (1)	178
	立・断面実測図	81	第 121 図	白磁実測図 (2)	179
第 56 図	水の手曲輪 SE1 D 区 (開渠部) 実測図	82	第 122 図	白磁実測図 (3)・青磁実測図 (1)	180
第 57 図	水の手曲輪 SE1 D 区断面図	83	第 123 図	青磁実測図 (2)	181
第 58 図	掘立柱建物跡実測図 (1)	85	第 124 図	青磁実測図 (3)	182
第 59 図	掘立柱建物跡実測図 (2)	86	第 125 図	青磁実測図 (4)	183
第60図	水の手曲輪 切岸土層断面図	86	第 126 図	青磁実測図 (5)	184
第61図	西側谷部 遺構配置図	88	第 127 図	青磁実測図 (6)・青花実測図 (1)	185
第62図	西側谷部 土層断面図	89	第 128 図	青花実測図 (2)	186
第 63 図	南側曲輪群 調査区区割り模式図	95	第 129 図	青花実測図 (3)	187
第64図	南側曲輪群 遺構配置図	97	第 130 図	青花実測図 (4)	188
第65図	曲輪 D 群 遺構配置図	99	第 131 図	青花実測図 (5)	189
				=	

表目次

	褐釉陶器実測図 (1)	190			7
第 133 図	褐釉陶器実測図 (2)	191	第 2表 中	型元級励基本工層区 中山遺跡における調査区の対照表 西側曲輪群 曲輪 (平坦面)面積 ~2 西側曲輪群掘立柱建物跡一覧表 西側曲輪群柵列一覧表 炉跡計測表	9
第 134 図	梅和陶品美側図 (2) 褐釉陶器実測図 (3)・その他貿易陶磁	192	第 3 表 进	所側曲輪群 曲輪 (平坦面) 面積	90
第 10 E 図	借益棒虫测图 (1)	106	労 4 主 1	2 再侧曲轮联棍步护建物蛛一整主	90
第 133 凶		190		~2 四侧曲轴钎加丛性建物哟——見衣	90
第 136 図	偏前焼実測図 (2)	197	第 5 表 世		91
第 137 図	備前燒実測図 (3)	198	第 6表 炉	炉跡計測表	91
第 138 図	備前燒実測図 (4)	199	第 7表-1~	~6 西側曲輪群遺構出土遺物一覧表	92
第 130 図	借前特宝测図 (5)	200	第 Q 丰 非	調査区対照表	95
第140回		200	为 O X 即	地里区71次次 专加出校界 出校 (亚和亚) 五律	100
弗 140 凶	順則規夫側凶 (b)	201	弗 9衣 F	判別世無辞 世無(半旦山) 山傾	162
第 141 図	瀬戸・美濃焼実測凶・常滑焼実測凶	202	第 10 表 -1~	~2 南側曲輪群掘立柱建物跡一覧表	162
第 142 図	近世陶磁器実測図 (1)	205	第11表 南	南側曲輪群柵列一覧表	164
第 143 図	近世陶磁器実測図 (2)	206	第12表 十	十坑計測表	164
第 1 / / 図	近世海際記事制図 (3)	207	第12 主 臣	致分 建物 蛛計測主	164
分 1 4 F 図	九世中四域的大约四(J)	207	知10 亿 立	立 / (天) 70 0 1 1 (内) 4 X 年 テ (中) 井 (土) 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	104
弗 145 凶	中世上岙夫側凶(1)	213	弗14衣 界	果仁退悔計側衣 1.1.1世 1.2011年	164
第 146 図	中世土器実測図 (2)	214	第 15 表 士	土坑墓計測表	164
第 147 図	中世土器実測図 (3)	215	第 16 表 -1~	調査区対照表 南側曲輪群 曲輪(平坦面)面積 ~2 南側曲輪群掘立柱建物跡一覧表 南側曲輪群柵列一覧表 土坑計測表 竪穴建物跡計測表 集石遺構計測表 土坑墓計測表 土坑墓計測表 ~8 南側曲輪群遺構出土遺物一覧表 近世墓一覧表 近世墓時期と出土銭貨の組合せ	165
第 148 図	中世十器実測図 (4)	216	第17表 步	近世墓一覧表	171
第 1/10 図	由卅十晃宝測図(5)	217	第18 表 证	近世墓時期と出土銭貨の組合せ	171
第 150 図	大品存制图 (2)	217	第10 亿 足	出版を対象に田上以真の祖口で	250
第 130 凶	上	210	第19衣世	出粣石刈思衣 /x3/478克式	230
第 151 図	瓦実測図 (2)	219	第 20 表 日	日磁観祭表	251
第 152 図	瓦実測図 (3)	220	第21表-1~	~2 青磁観察表	252
第 153 図	十錘・土製品実測図	221	第22表-1~	~2 青花観察表	253
第 154 図	古銭宝測図	223	第 23 表 裁	場 新·無新陶哭鉬爽表	255
第 1 E E 网	组、钟制日中间网(1)	224	第24主 2	スの体の日内が明知宛主	255
第 150 凶	到·	224	第 24 衣 で	てり他員勿隣城谷既宗衣	233
第 156 図	銅・鉄製品実測図 (2)・鉄滓実測図 (1)	225	第 25 表 -1∼	~2 国産陶器 (偏則) 観祭表	256
第 157 図	鉄滓実測図 (2)	226	第 26 表 国	国産陶器 (瀬戸・美濃) 観察表	257
第 158 図	木製品実測図 (1)	229	第27表 国	国産陶器 (常滑)観察表	258
第 159 図	木製品宝測図 (2)	230	第 28 表 证	近世磁哭観察表	258
第 160 図	大制口中测图 (2)	221	第 20 表 多	2 近州陶盟紹宛主	258
第 100 凶	小表明夫側囟(3)	231		~4	236
第 161 図	不製品美測図 (4)	232	第 30 表 -1∼	~2 土帥器観祭表	259
第 162 図	木製品実測図 (5)	233	第31表-1~	~2 土師質・瓦質・土器観察表	260
第 163 図	木製品実測図 (6)	234	第32表 維	縄文・弥生土器 / 須恵器観察表	261
第 164 図	石哭宝測図	238	第 3 3 表 T	万 組 察表	261
第 165 図	工制日中測例 (1)	220	第 9 / 主 ゴ	上 上 延 田 宛 主	262
第 100 図	口表明天例区 (1)	239	労 34 衣 」	上唑钒宗衣	202
弗 Ibb 凶	行製品美測図 (Z)	240	弗 35 表 · 例	児観祭表	262
第 167 図	石製品実測図 (3)	241	第 36 表 🖠	土製聖人像観察表	262
第 168 図	石製品実測図 (4)	242	第37表-1~	~2 古銭観察表	262
第 169 図	石製品実測図 (5)	243	第38表 翁	洞製品観察表	263
第 170 図	福和陶器実測図 (3)・その他貿易陶磁備前前院規則図 (1)備前前院実測図 (2)備前前院実測図 (3)備前前院実測測図 (4)備前前院実実測図 (5)備前前院実実測図 (5)備前前院実測測図 (5)近世時間、 1)近世世間、 2)近世世出土器別図 (1)近世世間、 2)近世世土土器別図 (3)中世土土器器別図 (3)中世土土器器別図 (3)中世土土器器別図 (4)中世土土器器別図 (3)中世土土器器別図 (3)中世土土器器別図 (3)本土土土器別図 (3)本土土土土器別図 (2)下、 2) (3) (4) (4) (4) (5) (5) (6) (6) (6) (7) (7) (7) (7) (7) (7) (7) (7) (7) (7	244	第 20 主 1	近世墓時期と出土銭貨の組合せ 曲輪名対照表 台磁観察表 ~2 青花観察表 ~2 青花観察表表 ~2 青花観察表表 楊和・無和陶器観察表 ~2 国産陶器(備前)観察表 国産陶器(備前)観察表 国産陶器(満戸・観察表 国産陶器(常滑)観察表 近世磁器観察表 ~2 上師器観察表 ~2 上師器観察表 ~2 土師質・五器観察表 ~2 土師質・玉器/須恵器観察表 ~2 土師質・玉器(察表 世越祭表表 ~2 土師質・五器観察表 是祖文・弥生土器/須恵器観察表 出越終表表 出越終表表 出越終表表 出越終表表 出越終表表 出数音表表 出数音表表 出数音表表 出数音表表 出数音表表 出数音表表 出数音表表 出数音表表 出数音表表表 出数音表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表表	263
为 170 囚	日衣印大側回 (0) * 日有大側回 (1)	244	カ J J 衣 - 1~	~~~ 奶衣阳散示仪	203
弗 1 / 1 凶	口冶夫側凶(2)	245	另 4U 衣 剪	取信	264
第 172 図	石塔実測図 (3)	246	第 41 表 -1~	~2 鍛冶関連遺物観察表 (未掲載分)	
第 173 図	石塔実測図 (4)	247	第42表 档	樹種分類表	265
第 174 図	石塔実測図(5)	248	第 43 表 オ	木製品 (生活用品) 観察表	265
第 175 図	石塔宇測図 (6)	2/10	第11ま オ	木製品(木杭・柱材等)観察表	266
第 17 C 図	工机出於野展左款工姓用	272	第 4 F 丰 1	2 十七知宛主(土相非八)	
第170回	四侧曲轴伸眉牛蚁止和木	213	第 43 公 -1~	~2 木杭観察表 (未掲載分)	266
第 177 図	南側曲輪群曆年較正結果	274	第 46 表 石		267
第 178 図	樹種同定試料の断面写真 (1)	276	第 47 表 -1~	~2 石製品観察表	268
第 179 図	樹種同定試料の断面写真 (2)	277	第48表 第	宝篋印塔計測表	269
第 180 図	樹種同定試料の断面写真 (3)	278		空風輪計測表	269
第 181 図	水の手曲輪出土漆製品の塗膜構造調査結果		第50表 少		269
第 182 図	鉄塊系遺物の断面金属組織観察結果	288	第51表 才		269
第 183 図	金属分析試料の顕微鏡組織写真 (1)	289		~2 地輪計測表	269
第 184 図	金属分析試料の顕微鏡組織写真 (2)	290	第53表 机	版碑計測表	270
第 185 図	金属分析試料の顕微鏡組織写真(3)	291		土壙墓計測表	270
第 186 図	金属分析試料のマクロ組織写真 (1)	291		火輪計測表 (未掲載分)	270
			第33衣 グ	八州司(州)(大)(大)(河)(八)	
第 187 図	金属分析試料のマクロ組織写真 (2)	292		地輪計測表 (未掲載分)	270
第 188 図	金属分析試料の EPMA 調査写真 (1)	292	第 57 表 机	坂碑計測表 (未掲載分)	270
第 189 図	金属分析試料の EPMA 調査写真 (2)	293	第 58 表 西	西側曲輪群における放射性炭素年代測定結果	272
第 190 図	塩見城跡縄張り断面図	298		南側曲輪群における放射性炭素年代測定結果	
第190 図	塩見城跡縄張り全体図 (2011 年現在)	299		木製品樹種同定表	275
第 192 図	観世音寺出土の土製品	310		漆製品塗膜断面観察結果	280
第 193 図	西側曲輪群における遺構の変遷		第62表 南	南側曲輪群出土鍛冶関連遺物の計測値と 調査項目	288
	(曲輪 A3・曲輪 B 群・水の手曲輪)	315	第63表 部	試料の化学組成	288
第 194 図	南側曲輪群における遺構の変遷	317		分析の結果一覧表	288
第 195 図	池ノ下遺跡を全体図	324		出土人骨一覧	296
第 196 図	調査区 A 平面図	324		人骨分析における年齢区分	296
第 197 図	角錐状石器 実測図	324		埋葬姿勢の様式	296
第 198 図	塩見城跡 未調査箇所	325		陶磁器類からみた曲輪の消長	314
第 199 図	板平遺跡 未調査箇所	326		遺構の変遷と画期	314
21 1 1 0 0 12		520	/1 00 1X 1	ら lm ->	017

図版目次

	凶贼日人				
【巻頭】			写真図版 34	南側曲輪群の調査 (7)	360
巻頭図版 1	塩見城跡から日向灘を臨む		写真図版 35	南側曲輪群の調査 (8)	361
巻頭図版 2	塩見城跡とその周辺		写真図版 36	南側曲輪群の調査 (9)	362
	南側曲輪群から西側曲輪群を臨る	t e	写真図版 37	南側曲輪群の調査 (10)	363
巻頭図版3	曲輪A群と比良山		写真図版 38	南側曲輪群の調査 (11)	364
巻頭図版 4	城の守り		写真図版 39	白磁 (1)	365
巻頭図版 5	井戸と曲輪		写真図版 40	白磁 (2)	366
巻頭図版 6	道路状遺構 (SG1) と掘立柱建物郡	洋	写真図版 41	白磁 (3)	367
	道路状遺構 (SG2) と曲輪群		写真図版 42	青磁 (1)	368
	塩見城出土遺物		写真図版 43	青磁 (2)	369
【巻末】			写真図版 44	青磁 (3)	370
写真図版 1	西側曲輪群の調査 (1)	327	写真図版 45	青磁 (4)	371
写真図版 2	西側曲輪群の調査 (2)	328	写真図版 46	青磁 (5)	372
写真図版 3	西側曲輪群の調査 (3)	329	写真図版 47	青磁 (6)・褐釉陶器 (1)	373
写真図版 4	西側曲輪群の調査 (4)	330	写真図版 48	褐釉陶器 (2)・その他	374
写真図版 5	西側曲輪群の調査 (5)	331	写真図版 49	備前焼 擂鉢 (1)	375
写真図版 6	西側曲輪群の調査 (6)	332	写真図版 50	備前焼 擂鉢 (2)	376
写真図版 7	西側曲輪群の調査 (7) 西側曲輪群の調査 (8)	333 334	写真図版 51 写真図版 52	備前 甕・壺 (1) 備前 甕・壺 (2)	377 378
写真図版 8 写真図版 9	西側曲輪群の調査 (9)	335	写真図版 52 写真図版 53	瀬戸・美濃焼 常滑焼 (1)	379
写真図版 10	西側曲輪群の調査 (10)	336	写真図版 54	近世陶磁器	380
写真図版 11	西側曲輪群の調査 (11)	337	写真図版 55	中世 土師器 坏・皿類	381
写真図版 12	西側曲輪群の調査 (12)	338	写真図版 56	瓦質土器 (1)	382
写真図版 13	西側曲輪群の調査 (13)	339	写真図版 57	瓦質土器 (2)	383
写真図版 14	西側曲輪群の調査 (14)	340	写真図版 58	土器・瓦 (1)	384
写真図版 15	西側曲輪群の調査 (15)	341	写真図版 59	瓦 (2)	385
写真図版 16	西側曲輪群の調査 (16)	342	写真図版 60	土錘	386
写真図版 17	西側曲輪群の調査 (17)	343	写真図版 61	土製品・古銭	387
写真図版 18	西側曲輪群の調査 (18)	344	写真図版 62	銅製品・鉄製品 (1)	388
写真図版 19	西側曲輪群の調査 (19)	345	写真図版 63	銅製品・鉄製品 (2) 木製品 (1)	389
写真図版 20	西側曲輪群の調査 (20)	346	写真図版 64	木製品 (2)	390
写真図版 21	西側曲輪群の調査 (21)	347	写真図版 65	木製品 (3) 石器・石製品 (1)	391
写真図版 22 写真図版 23	西側曲輪群の調査 (22) 西側曲輪群の調査 (23)	348 349	写真図版 66 写真図版 67	石器・石製品 (2)・貝製品	392 393
写真図版 24	西側曲輪群の調査 (24)	350	写真図版 68	五輪塔 (形態と加工痕跡)・動植物遺体	
写真図版 25	西側曲輪群の調査 (25)	351	7 × 10/10 00	五十十二 (7)公 (7)公 (7)	. 001
写真図版 26	西側曲輪群の調査 (26)	352			
写真図版 27	西側曲輪群の調査 (27)	353	/ " ()	r. ~ ~ ~ /	
写真図版 28	南側曲輪群の調査 (1)	354	// -) \	\$ 500 miles	
写真図版 29	南側曲輪群の調査 (2)	355	4 }		
写真図版 30	南側曲輪群の調査 (3)	356	# 50	in the second se	
写真図版 31	南側曲輪群の調査 (4)	357	, ((+ 151 30 .06.	
写真図版 32	南側曲輪群の調査 (5)	358		131	
写真図版 33	南側曲輪群の調査 (6)	359	5 m		
			4.		
			} /		
			s) ci		
			@ J ·)	32°28′14″ SIOMIJO	
		•		SIUMIJU	
		مسسم	کے در گیسہ	E S S S S S S S S S S	
			· Pan N. W		
			Park to the second		
	1.50	2. ~ ·	~	A STATE OF THE STA	
		MINATARI			
	· 285	MIYAZAKI PREFECTURE			
	<i>;</i>				
	· .			A Ti	
	. 0			G G	
	. 🕉			Cros	
	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·			•	
	۵۰ ن	0_	500km	<u>0</u> 50km	
	Stay : "	_	1:2,500,000	1:250,000	

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

1 調査に至る経緯

東九州自動車道は、福岡県北九州市を起点とする 総延長約 436 k mの高速自動車国道で、九州島の 東岸部4県(福岡・大分・宮崎・鹿児島)を南北に 縦断する。宮崎県においては、平成元年に延岡~清 武間が基本計画区間に決定された。

このうち、西都~清武間内に所在する遺跡の記録 保存措置は平成13年度に、県境~北川間及び都農 ~西都間については同21年度に全て完了している。

中山遺跡・塩見城跡の所在する門川~日向間(約 14 km) については、日本道路公団(現 西日本高速 道路株式会社)の遺跡分布調査依頼を受けて、宮崎 県教育委員会は平成 16 年に 7 遺跡 174,000㎡の埋 蔵文化財包含地の所在を回答した。

これを受けて、同年11月には門川~日向間を担 当する同公団延岡工事事務所との工事計画や用地取 得、埋蔵文化財調査等の調整会議も開催されている。

さらに、平成17年に「埋蔵文化財発掘調査にお けるコスト縮減及び限定協議に伴う除外面積につい て」の協議が同公団と県文化財課との間でなされた。

この結果、発掘調査の対象面積が当初の174,000 mから 91,400mに縮減された。中山遺跡は 14,800 ㎡、塩見城跡は 12,500㎡が調査対象となる。

しかし、更なるコスト縮減が図られた道路建設の 詳細設計に基づく協議(平成19年5月)により、 中山遺跡においては、遺跡主要部分の850㎡が当面 の調査対象から外れることになり、調査対象面積は 13,950㎡に変更となった。

塩見城跡でも詳細設計による協議等や高速道路 に付随する工事用道路建設に伴う記録保存措置を新 たに要請される等により調査対象面積の増減を繰り 返したが、最終的には 11,300㎡となった。

上記の経緯をへて、平成17年度にトレンチを主 体とした調査が両遺跡で開始され、中山遺跡では平 成18年度に、塩見城跡は平成19年度より面的な 調査を実施するに至った。この中山遺跡については、 その遺跡の立地や性格から、塩見城内の曲輪群の一 部と認識されるに至った。

(菅付)

2 塩見城跡・中山遺跡における既往の調査歴 今回の発掘調査以前の調査概要について述べる。

塩見城跡の主郭部分については平成13年度に、主

郭部の公園整備に伴い日向市教育委員会によってトレン チ調査が実施された。素掘り・礫群・礎石の掘立柱建 物跡と16世紀後半の火災を受けた痕跡が検出された。

出土遺物は13世紀から16世紀代の陶磁器を主 体とする青花、青磁、白磁等の貿易陶磁、備前焼等 の国産陶器などである。

また、塩見城跡の南側に位置する中山遺跡につい ては、宮崎県教育委員会によって平成14年に国道 327 号線の高速道路道路関連緊急整備事業に伴い発 掘調査が実施された。調査区内の平坦面より近世墓 が28基検出された。錫杖を副葬品とする墓穴も認 められている。

さらに、国道327号線の改良工事に連動した市 道付替え工事に伴う発掘調査が中山遺跡西側におい て、日向市教育委員会により実施された。この調査 では五輪塔や板碑等が出土し、これら石塔群(18基) は塩見城跡主郭部の城山公園内に移設されている。

(今塩屋)

第2節 調査の組織

中山遺跡・塩見城跡の調査・整理報告の調査組織 は、以下の通りである。

【調査主体】 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長 宮園 淳一 (平成17年度) 清野 勉 (平成 18:19 年度) 福永 展幸 (平成 20•21 年度) 隆茂 (平成 22・23 年度) 副所長 加藤 悟郎(平成18~20年度) 北郷 泰道 (平成 22-23 年度) 副所長兼総務課長 長友 英詞 (平成 20:21 年度) 副所長兼調査第二課長 岩永 哲夫 (平成 17:18 年度) 総務課長 宮越 尊 (平成17~19年度) 矢野 雅紀 (平成 22 年度) 坂上 恒俊 (平成 23 年度) 主幹兼総務係長 石川 恵史 (平成17年度) 主幹兼総務担当リーダー 髙山 正信(平成18~21年度) 副主幹兼総務担当リーダー 長友由美子(平成22.23年度) 調査第一課長 髙山 富雄 (平成 17・18 年度)

主幹兼調査第二係長・担当リーダー 菅付 和樹(平成17~23年度)

長津 宗重(平成19~23年度)

現地調査

中山遺跡 (平成 17~19 年度)

主 查 田中 敏雄 (平成 18・19 年度)

主 査 島木 良浩・白地 浩(平成19年度)

主任主事 嶋田 史子 (平成19年度)

主 事 岡田 諭 (平成17年度)

主 事 渕ノ上隆介 (平成 17・18 年度)

主 事 小船井 順・児玉 幹・日高 優子

(平成19年度)

調 査 員 石津 晴菜 (平成18年度) 塩見城跡(平成17·19~21年度)

主 査 島木 良浩 (平成19年度)

主任主事 今塩屋毅行 (平成20年度)

主 事 渕ノ上隆介 (平成17・19~21年度)

主 事 小船井 順・田中 達也・堀口 悟史

(平成 19•20 年度)

整理作業・報告書作成

主

中山遺跡(南側曲輪群)

主 査 田中 敏雄 (平成19~23年度)

主 査 明石 宏一 (平成23年度)

主任主事 嶋田 史子 (平成19・20年度)

柳田 晴子•今塩屋毅行(平成23年度)

主 事 児玉 幹・渕ノ上隆介

事 児玉 幹

(平成 19~21 年度)

(平成 19~21 年度)

主 事 川俣 唱子 (平成23年度)

塩見城跡(西側曲輪群)

主 査 田中 敏雄 (平成 22・23 年度)

主 査 松田 博幸 (平成22年度)

主任主事 今塩屋毅行・原口耕一郎

(平成 23 年度)

主 事 児玉 幹・渕ノ上降介

(平成 19~21 年度)

事 小船井 順・川俣 唱子・田中 達也山本 光俊 (平成23年度)

特別調査員(所属は調査当時・五十音順)

千田嘉博(奈良大学文学部)・宮武正登(佐賀県教育庁)・ 森村健一(東洋陶磁学会、関西近世考古学研究会)

調査指導・協力等(五十音順)

大分県教育委員会·小田原市教育委員会·九州国立博物館·霧島市教育委員会·国立歷史民俗博物館·長崎純心大学·二十六聖人記念館·都城市教育委員会·日向市教育委員会·山口県教育委員会·山口市教育委員会

第3節 地理的環境

1 遺跡周辺の地形と地質

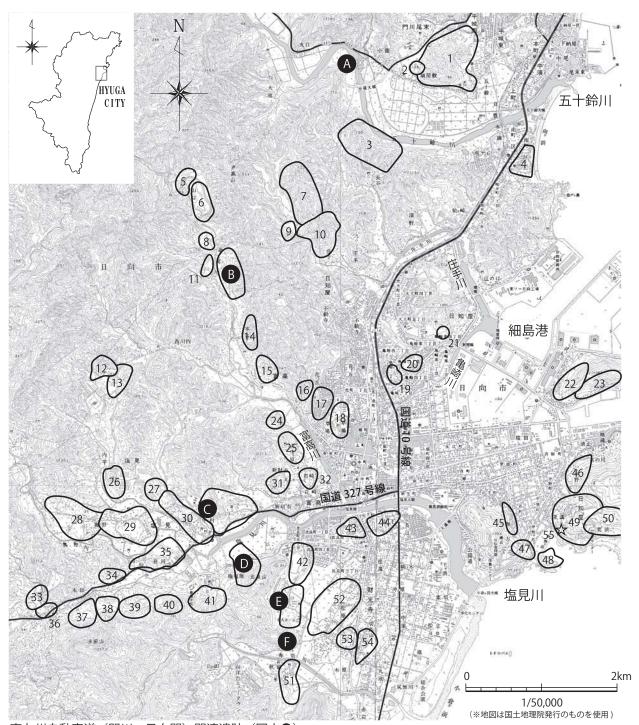
日向市の位置と地勢 中山遺跡・塩見城跡が所在する日向市は、九州島の東海岸に位置し、西に九州山地を控え、東は日向灘に面する地勢をなす。現在の中心市街地は、塩見川下流域の沖積低地に広がる。遺跡周辺の地形 中山遺跡・塩見城跡は、宮崎県日向市大字塩見にある。この塩見地区は、東側は開けた地形となるが、三方を山に囲まれており、その南面を塩見川が東流している。両遺跡は塩見川中流域の左岸に広がる丘陵(標高約30~70m)部の南端に立地し、日向市街地から西へ約2kmの地点にある(第11図)。また、中山遺跡南端に広がる丘陵部は、かつて塩見川まで迫っていたという。その対岸は字名が「瀬ノ口」であり、これより上流は浅瀬であったと考えられる。

塩見川が形成する平野 塩見川の両岸には河岸段丘が形成され、富高川と合流後は沈水性の小平野を発達させている。海岸沿いには、牧島山、米ノ山、櫛ノ山といった標高 100~190mの低山塊が点在している。これらは、かつて島々であったが塩見川の埋積作用によって陸続きとなったものである。なお、耳川は市内で最も流域面積の広い河川で、九州山地の三方山を水源とし、山陰の冠岳の麓で大きく南に流路を変え、日向市南部の美々津で日向灘に注いでいる。

複雑な海岸線 日向市の地勢を特徴づけるものの一つでもある。耳川河口より南側は、宮崎平野部から続く直線的な砂洲海岸であるが、それより北はリアス式海岸による岩礁帯が卓越する。塩見川河口付近のみ小倉ヶ浜に代表される砂州海岸となる。この塩見川河口一帯は、ハマグリの名産地で『日向地誌』に「蛤七千二百殻」の記事が読み取れる。

さらに河口の北側に位置する細島地区には、県内 屈指の細島港が所在する。天然の良港であり、日本 各地と東南アジアをつなぐ航路の経由地としての重 要な港湾として期待されている。

日向市の地質 塩見川を境として北と南で大きく異なる特徴を有する。塩見川に接する永田―中村―新財市―岩崎―花ヶ丘―亀崎―梶木地区を結ぶ線から北側は、西南日本外帯に属する四万十層群の砂岩または頁岩で、それより南は尾鈴山火砕流堆積物である。耳川中流域では阿蘇4火砕流堆積物もある。



東九州自動車道(門川~日向間)関連遺跡(図中●)

A. 分蔵遺跡 B. 板平遺跡 C. 塩見城跡・中山遺跡 D. 権現原遺跡 E. 池ノ下遺跡 F. 大谷尻遺跡 1. 城山遺跡 2. 門川城跡 3. 新城跡 4. 門川南町遺跡 5. 山口遺跡 6. 黒原遺跡 7. 古屋敷遺跡 8. 北川内遺跡 9. 髪屋敷遺跡 10. 小庄手遺跡 11. 谷川遺跡 12. 黒象遺跡 13. 池田原遺跡 14. 和田遺跡 15. 宮ノ尾遺跡 16. 谷口遺跡 17. 西草場遺跡 18. 富高古墳群 19. 越シ遺跡 20. 後陣遺跡 21. 寺ノ上遺跡 22. 畑浦遺跡 23. 西ノ原遺跡 24. 横道遺跡 25. 古市ヶ原遺跡 26. 黒岩遺跡 27. 高平城跡 28. 奥野 A 遺跡 29. 奥野 B 遺跡 30. 中村遺跡 31. 鳥の巣遺跡 32. 岩崎遺跡 33. 平原遺跡 34. 片白遺跡 35. 笹河遺跡 36. 仙洞庵遺跡 37. 上永田遺跡 38. 下永田遺跡 39. 甲附遺跡 40. 出兼遺跡 41. 清水遺跡 42. 比良遺跡 43. 山下遺跡 44. 長江遺跡 45. 竹ノ上遺跡 46. 平野遺跡 47. 野首遺跡 48. 日知屋城跡 49. 深溝遺跡 50. 荒浜遺跡 51. 秋留遺跡 52. 松原遺跡 53. 木原遺跡 54. 六反田遺跡 55. 伊勢ヶ浜古墳群

第1図 遺跡分布図

第4節 歴史的環境

1 塩見城築城以前(原始・古代)

塩見城築城以前の状況について塩見川流域(支流の富高川、奥野川流域を含む)を中心とした遺跡と遺物の概要を簡単にふれる(第1図)。

旧石器時代 塩見川左岸の河岸段丘上の奥野 A 遺跡 (28) で姶良 Tn 火山灰 (AT) 直下の層から流紋岩製の 剥片が出土した。富高川左岸の河岸段丘上に立地する板平遺跡 (B) で AT 直下の層より流紋岩やホルンフェルス、珪質頁岩の剥片や石核が出土している。

寺ノ上遺跡 (21) では、AT 火山灰直上の暗褐色層中より、5基の石器ブロックと4基の礫群が確認されている。瀬戸内技法に類する横長剥片を用いたナイフ形石器や剥片尖頭器、スクレイパー等の製品とともに、剥片、石核、敲石等石器製作に関連する遺物が出土している。

縄文時代 後陣遺跡 (20) では、縄文時代早期の集石遺構が 62 基が、近接する越シ遺跡 (19) も集石遺構 19 基が検出されている。板平遺跡では集石遺構 36 基と炉穴 55 基が検出されている。

縄文時代前期から中期については今のところ表 採資料のみが知られており、断片的である。

縄文時代後期の遺跡は、板平遺跡例が挙げられる。太郎迫式や三万田式系統の土器が出土しており、 石組遺構や土坑群も認められる。

弥生時代 弥生時代前期末~中期前半に位置付けられる下城式や亀ノ甲タイプの甕が板平遺跡で出土している。日向市南部、石並川に面した落鹿遺跡2号建物跡からは鋤先口縁の須玖式系壺が出土しており中期に位置付けられる。また、越シ遺跡では弥生中期とされる祭祀遺構(土坑)が確認されている。

後期の遺構は、板平遺跡で後期後半段階の免田式 土器壺に類似した土器が伴う竪穴建物跡がある。終末 期では越シ遺跡の内部突出壁を有する竪穴建物跡2軒 や後陣遺跡の竪穴建物跡が挙げられる。なお、終末期 の周溝状遺構は、日向市南部の百町原遺跡例がある。

古墳時代 富高古墳群 (18) と伊勢ヶ浜古墳群 (55) と集落遺跡の調査例が知られている。

富高古墳群は富高川の左岸丘陵上に立地する。富 高2号墳は全長83mを測る前方後円墳で、仿製四 神四獣鏡や鉄製武具等が副葬された中期前半の古墳 である。鈴鏡塚古墳は八鈴鏡や鉄製武器や工具等が 副葬される後期前半に属する古墳である。 塩見川河口付近の伊勢ヶ浜の北岸には、古墳時代 終末期に営まれた伊勢ヶ浜古墳群がある。円礫等を 積み上げた横穴式石室を内部主体とする。同7号墳 からは鉄銛が出土している。

集落遺跡の調査としては、板平遺跡が挙げられる。 古墳時代前期〜後期にかけての竪穴建物跡が 26 軒 検出されている。特に、谷部包含層から出土した緑 色凝灰岩製の車輪石の出土は出色な存在である。

古代 越シ遺跡では、平安時代前半の土師器坏を伴う集石とピットが多数検出されている。坏は合口状で5組と単独で1個が配置されており、何らかの祭祀による痕跡と考えられている。

なお、日向市美々津地区は『延喜式』記載の「美 禰駅」に比定されるという。 (今塩屋)

2 塩見城築城以後(中世・近世)

塩見城跡それ自体の歴史的意義は、本書の第四章 第2節にて詳述されている。ここでは塩見城を巡る 時間的経過と当該期の遺跡調査例の概要を記す。

a) 塩見城をめぐる支配権

塩見城の築城(土持氏時代)「塩見」は鎌倉時代よりみえる地名で、塩見郷や塩見荘とも称されていた。 その拠点たる塩見城跡は、南北朝期に土持氏により 築城されたと伝えられるが、詳細は不明である。

この土持氏には、土持「七頭」と呼ばれる縣・財部・ 槐島・大塚・垂水・清水・時任の七党があり、日向 市域はその中でも高鍋城を居城とする「財部土持」 氏の支配下にあったとされる。財部土持氏は、長禄 元年(1457)の小浪川の戦いにおいて伊東氏に敗北 を喫し、以後没落して塩見城を含めた日向市域の城 館は、伊東氏が領有するところとなった。

一方、土持氏宗家にあたる「縣土持」氏は現在の延岡市域を中心として天正6年(1578)に大友氏によって滅ぼされるまで権勢を誇り、中世末期まで伊東氏と対立関係にあったとされる。

「三城」の成立(伊東氏時代) 小浪川の戦いの後、 日向市域は伊東氏の領有下となり、縣土持氏との境 界域ともなる。この地域は天然の良港として知られ る細島港を抱える等、軍事・経済の拠点として重要 性を増していく。塩見城をはじめとして、日向市日 知屋字伊勢道の日知屋城(48)、門川町門川尾末字 城屋敷の門川城(2)、東郷町山陰の山陰城(第2図 25)等は、「伊東氏四十八城」に数えられ、特に塩 見城、日知屋城、門川城は「三城」と呼称され、伊東氏領国の北の要として重要視された。伊東氏の支配は約120年間にも及び、塩見城には右松氏、日知屋城には福永氏、門川城や山陰城には米良氏等の有力家臣が居城して地域の掌握に努めていた。

しかし、伊東氏は元亀3年(1572)の木崎原合戦や天正4年(1576)の高原城をめぐる攻防戦で島津軍に大敗を喫し、以後衰退の一途をたどる。島津氏の勢力は、はやくも天正5年(1577)には宮崎平野部に及び、伊東氏は本拠地の都於郡城を捨てて大友氏を頼って落ち延びるに至った。

豊後計略の拠点(島津氏時代) 伊東氏の豊後落ち 以後、塩見城を含めた日向地域の諸城も島津氏の支 配下となった。「三城」の地頭として吉利忠澄が補 任されるが、塩見城に在番しつづけている。門川城 や日知屋城には改めて地頭が任じられた。また、宮 崎地頭である上井覚兼も塩見にたびたび訪れて地域 支配の足固めを進め、さらに天正 14 年(1586) には、 島津義久が塩見城に滞在し、越年したとされる。

島津氏においても「三城」は地域支配の要であり、 さらには豊後進出の重要拠点でもあった。なかでも 塩見城の重要性は強く認識されていたようである。

九州仕置と領主の交代 島津氏は天正 14 年 (1586) に関白に就任した豊臣秀吉と対決姿勢を強め、軍事 衝突に発展する。豊臣秀吉の九州進出は島津氏側に 軍事的緊張を強いたようである。

例えば、細島地区の妙国寺に隣接する「細島番城」は『上井覚軒日記』の天正 14 年 8 月 29 日条にみる細島警備強化と関連付けられる城館とされる。

しかし、島津氏は天正 15 年 5 月、豊臣秀吉の軍門に下ることになった。同氏による日向地域の支配は、わずか 10 年間で終焉を迎えることとなった。

豊臣秀吉による九州仕置ののちは、高橋元種領となり、三城はその支配下に置かれることとなる。なお、高橋氏統治下における在城城主等は詳細な文献がなく、明らかではない。約20年後の元和元年(1615)に塩見城を含めた諸城は、一国一城令によって廃城となったと考えられる。

その後、延岡藩主は高橋氏から有馬氏へと交代するが、その有馬氏も元禄5年(1692)に越後へと転封されると、日向地域の大半が天領となった。代官所は富高に置かれた。塩見城一帯の地域は塩見村と呼ばれ、近代を迎えることとなる。

b) 城館関連遺跡

現在、日向市と門川町域には城館の存在が31箇所確認されている(第2図)。このうち、塩見城の周辺には、発掘調査された城館関連遺跡として日知屋城跡(13)と高平城跡(18)が位置している。

日知屋城跡は、塩見川河口に面した櫛ノ山が日向 灘に突き出す端部に築城される「海城」である。溝 状遺構やそれに伴う列石、石敷遺構が確認され、掘 立柱建物跡、柵列跡等が検出され、青花や青磁、白 磁等の貿易陶磁器とともに、備前焼、土師器皿、硯、 土錘等豊富な遺物が出土している。遺構や遺物は中 世後半の年代と考えられている。

高平城跡は、塩見城跡西方の中村・奥野地区にある。標高約31mの丘陵状地形の西端部に立地する「平城」で、平坦な丘陵端部を堀で分割し、曲輪を設ける構造である。主郭相当の曲輪からは掘立柱建物跡7棟を含む柱穴群と溝状遺構、土坑が検出された。特に土師器皿が多く出土している。

なお、日向市東郷町所在の山陰城に隣接する西城跡 (26) や、日向市と門川町境にある新城跡 (9) は 広大な縄張りを有するが、文献等で歴史的経過の追跡が困難な城館跡群である。 (渕ノ上)

c) 集落跡

中世 板平遺跡では掘立柱建物跡 14 棟が検出され、 貿易陶磁器も出土した。日向市北部の庄手地区遺跡 においても輸入陶磁器の出土が認められる。

近世 板平遺跡では大型建物跡 1 棟と作業小屋と目される掘立柱建物跡 10 棟が検出されている。また、日向市東郷町の鶴野内中水流遺跡では、18 ~ 19世紀代の掘立柱建物跡 11 棟が検出され、竃小屋や石積土坑の上屋と目される建物も含まれる。

さらに、日向市南部の美々津町に所在する別府遺跡では石敷道路が検出されている。所属年代は不明確だが、近世に遡る可能性が指摘されている。

3 塩見城跡周辺の寺社と石塔群

寺社 曹洞宗の水月寺や浄土真宗の正法寺のほか、 栗尾神社や比留巻神社等の寺社がある。

正法寺と栗尾神社は、塩見城南西の低位丘陵上にある。前者が元禄元年(1688)、後者が天正元年(1573)に建立されたという。比留巻神社の建立は、天正元年に塩見城主右松四郎左衛門が城の鬼門除けに勧請した説と天正年間に那須運平が創建したとする説が

ある。この栗尾神社と比留巻神社は塩見城主郭の南 西に位置し塩見城の裏鬼門の方角である。

水月寺は塩見城跡の東側に所在する。この場所は、かつて光厳寺が存在していた。光厳寺の開基は長禄元年(1457)とされ、明治34年(1901)に無住の寺となったという。水月寺は、寛文5年(1665)に開山されたのが始まりとされる。二度の焼失の惨禍等を経て現在の位置に至る。

その他、日向市内には定善寺、本善寺や妙国寺といった日蓮宗系の寺院が多い。これらの寺は僧侶日 睿の登場以降、日蓮宗富士門流宗徒の活発な活動と 関連付けられる。

日向市細島地区に位置する妙国寺の庭園は、県内 唯一の国指定名勝で、江戸時代中期の作庭とされる。 石塔群 『日向市史』資料編には、水月寺墓地内(光 厳寺跡)に 47 基(板碑 28、五輪塔 18、宝筐印塔 4、 無縫塔2)、水月寺山門前に 2 基(六地蔵幢)、市営城 山墓園内に 18 基(中村地区の観音堂周辺・財光寺地 区の比良石塔群からの移転)が現存するという。城山 公園内には国道 327 号線の改良工事による移設(観 音堂周辺)された 18 基がある。

水月寺墓地内(光厳寺跡)の石塔には元亀元年、 天文2・8・17年、天正10~12・15年銘があり、 1530~1590年代の時間幅に収まる。また、水月 寺山門前の六地蔵幢は市内に残る数少ない例で、そ の1基には元亀3年(1572)と「喜屋妙歓大姉」の 銘が読み取れる。右松氏ないし伊東氏家中の有力者 や関係者と考えられる。

その他にも本山定善寺、本善寺、西川内観音堂や 日知屋城跡等にも石塔群がある。題目板碑や五輪塔 には在地産の阿蘇溶結凝灰岩が使用されている。

(今塩屋)

【引用参考文献】

宮崎県日向市教育委員会 1985「日向市遺跡詳細分布調査報告書」 日向市教育委員会 1986「別府遺跡発掘調査報告書」

日向市教育委員会 1986「後陣遺跡・越シ遺跡」

日向市教育委員会 1991「富高古墳 2 号墳」範囲等確認調査報告書 日向市教育委員会 1993「日知屋城跡」

宮崎県日向市教育委員会 1994「百町原地区遺跡」

宮崎県日向市教育委員会 1995『寺ノ上遺跡」

日向市史編さん委員会 2009「日向市史 資料編』 日向市

宮崎県日向市教育委員会 1999「国指定 名勝 妙国寺庭園」

宮崎県日向市教育委員会 2000「庄手地区遺跡」

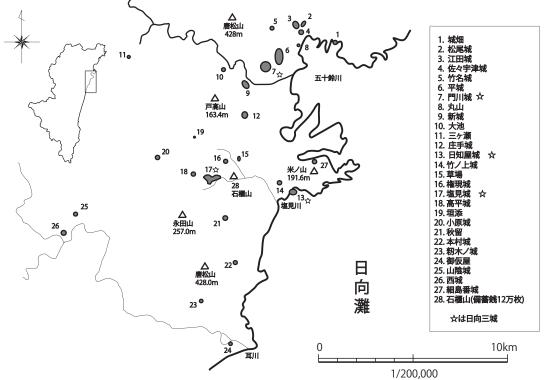
宮崎県教育委員会 1999『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書 I』地名表・分布地図編

宮崎県教育委員会 1999『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書 Ⅱ』詳説編

宮崎県埋蔵文化財センター 1999「鶴野内中水流遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第16集

宮崎県埋蔵文化財センター 2008「板平遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第 176 集

宮崎県埋蔵文化財センター 2011「板平遺跡 (第3・4次調査)」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第199集



第2図 塩見城跡周辺の城館分布図

第Ⅱ章 発掘調査・整理作業の方法と経過

第1節 発掘調査の方法と経過

- 1 調査の方法と経過
- a)中山遺跡(第4図 南側曲輪群)

調査区の設定と経過 調査は調査対象地の買収状況や建設工程に基づいて3カ年度に分割して実施した。平成17年度(平成17年12月1日~12月22日)は一部買収が終了した箇所についてトレンチ主体の調査を行った。その結果、当初、耕作のための造成面と考えられていた平坦面に柱穴群と遺物が確認され、面的に広げる必要性が高まった。

この調査結果を受けて平成 18 年度 (平成18年9月25日~19年3月30日) は調査区内で検出された平坦面を「段」と呼んで、各段を1~7段に区分して面的な調査を進めた。しかし工事の関係上、調査区内を工事用道路が貫く形となり、さらに用地買収済箇所が部分的であったため調査区が細分され、逐次的に調査せざるをえない状況となり、調査区全体の地形や遺構の全貌を一度に面的に把握するのは困難であった。

平成19年度 (平成19年4月5日~12月20日) 実施分については、用地買収とその立木伐採が全て終了したので現地形の把握が可能となった。そこで改めてA~V区までの22調査区に区分した。

なお、用地買収の関係で調査できなかった箇所については追加調査(平成20年6月30日~7月11日)を実施した。

現地調査は、道路建設の詳細設計に基づく協議 (平成 19年5月) で当面の調査対象から外れる遺跡主要部分の 850㎡を残して終了した (本書「補記」参照)。

調査の方法 平成 18 年度調査では、堆積が約 0.2m 程度と比較的薄く、遺構面が岩盤面であることや、重機の搬入路が限定されていたので、一部を除いて人力による掘り下げを行った。平成 19 年度は、重機の搬入が可能となったので、表土・耕作土及び自然堆積層の上位層を重機にて掘削した。

基本層序と遺構検出面 概ね8層に区分される (第1表)。基本的に小調査区(平坦面)では耕作 土層(Ⅱ層)直下が褐色土層(Ⅵ層:地山)となる 状況で、鬼界アカホヤ火山灰層以下の自然堆積層は 斜面地や平坦地でも局所的に認められる程度であっ た。遺構検出はこの褐色土層面で行っている。

遺構(柱穴)の埋土 中山遺跡で検出された遺構は、 そのほとんどが柱穴であった。その柱痕跡(黒褐色系) は、地山の土色との判別が比較的平易であった。この柱 穴掘り方埋土は、地山由来の褐色土主体で岩盤破砕礫 が多く混入する性状であった。そのため地山面との差異 が容易には判別しづらく、かなり硬質でもあった。炎天 下の中での乾燥した状態下では、柱穴輪郭の検出と精 査には困難が伴い、柱穴一基ずつ半截して埋土状況を 確かめながら完掘を目指した。柱穴底面には硬質な充 填土(褐色・黄褐色系)や根固め石も認められた。

遺物包含層の扱い 遺物は表土・耕作土中より出土したものが主体で、その時期も多岐にわたる。取り上げは、遺物の残存状況が良好なもの、もしくは柱穴等の遺構内出土の遺物を除いては調査区ごとに一括した。ただし、重機使用による表土剥ぎを実施した結果、調査年次ごとに取り上げた遺物に若干の多寡が生じたことは否めない。

b) 塩見城跡(第4図 西側曲輪群)

調査区の設定と経過 塩見城跡は中世山城として 認知される周知の遺跡で、縄張り図からも遺構の存 在が確実視されていた。そこで平成17年度(平成17 年11月14日~18年1月24日)は、縄張り図の作成とトレン チ主体の調査を実施した。地表面観察では確認出来 ない曲輪の存在や多数の柱穴が認められた。

平成19年度(平成19年7月2日~3月31日)は、用地買収の進捗および建設工程を勘案して、調査対象区をを1~4の「調査区」に、各尾根に挟まれた「谷部」については谷1~4と設定して面的な調査を進めた。

以後、調査は平成 20 年度 (平成20年4月7日~10月31日) と平成 21 年度 (平成21年7月21日~9月30日) と合計 4 次に わたる。このうち平成 21 年度の調査は、市道付け 替えに伴うものである。

調査の方法 曲輪と想定された平坦面の主軸と直 交するトレンチを設定して調査を開始した。調査区 内では、曲輪の斜面部には比高差 20m を超える急 傾斜地も存在する。この箇所については安全面を考 慮し部分的トレンチ調査に留めざるを得なかった。

第1表 塩見城跡基本土層図

層No.	層名	属性	備考
Ⅰ層	表土	表土	
Ⅱ層	暗褐色土	耕作土	遺物包含層
Ⅲ層	アカホヤ火山灰	堆積土	
IV層	黒褐色土	堆積土	
Ⅴ層	褐色土	堆積土	
VI層	褐色土	地山	
VII層	黄褐色土	地山	
/III層	岩盤	地山	四万十層群

基本層序と遺構検出面 第Ⅲ章にて記載する「水の手」以外は概ね3層の堆積構造である(第1表)。 基本的に耕作土層(Ⅱ層)直下が岩盤(Ⅷ層:地山)である。Ⅱ層とⅧ層に後世の造成土が認められる場合もあった。おもに遺構検出は岩盤面で行った。

遺構(柱穴)の埋土 中山遺跡同様、検出された 遺構のほとんどが柱穴であった。柱穴掘り方の埋土 は、地山由来の岩盤破砕礫が主体の褐色土や岩盤風 化土(黄白色系の粘質、砂質土)が混入する土質で、 中山遺跡よりは精査しやすい硬さである。ただ、柱 痕跡は埋土が黒染む程度であるので判別しにくい。

遺物包含層の扱い 平坦面には概ね 10~20cm 程度の薄い遺物包含層が堆積していた。包含層中からは古墳時代から現代に至るまでの遺物が出土したが、原位置性は低いと考えられたため、中山遺跡同様、完形に近い状態で出土した一部の遺物を除き、区画や層位ごとの一括遺物として取上げを行った。

(今塩屋・田中敏)

2 遺構等の記録について

地形と遺構の記録 中山遺跡と塩見城跡の調査では、電子平板やトータルステーションによる三次元記録の手法を用いて地形測量や遺構平面図の作成を進めた。ただし、遺構図については使用機器の特性や使用者の技術的制約により、遺構図の一部や土層断面図については人力による実測方法を用いた。

地形測量における等高線については、電子平板を 用いて約 $1 \sim 2m$ 間隔での任意のメッシュデータを 記録し、ソフトウェア上で等高線を作成した。

電子平板使用に伴うデジタル機器の種類と台数は、下記のとおりである。

・遺構くん〔(株)CUBIC 社製〕	2台
・トレースくん〔(株) CUBIC 社製〕	1台
• TOUGHBOOK〔Panasonic 社製〕	2台
・BLUETOOTH 無線機	2組
	(渕ノ上)

掘立柱建物の調査 今回の「塩見城跡」・「中山遺跡」の調査では、194 棟を数える掘立柱建物跡が検出された。現地復元が46 棟で、残りは遺構分布図(1/20)を用いた図上復元で補完した。しかしながら、柱穴は超過密的な分布を示すので、現地復元は容易ではなかった。そのため、柱穴の土層断面図は、それぞれ任意の方向にて図化記録せざるを得なかった。

第2節 整理作業の方法と経過

整理作業は、平成19年1月より、当センター本館にて開始した。遺物の水洗からトレースまでと、遺物の写真撮影等、全ての整理や収蔵前整理の作業は平成22年3月に終了した。デジタル編集作業を含む報告書作成の作業は、翌23年9月に終了した。

1 調査報告にあたって

現地調査時点においては、日向市および宮崎県教育委員会による遺跡詳細分布地図に基づいて塩見城跡の主郭部南側を通る市道から北側を「塩見城跡」、市道から南側を「中山遺跡」と認識していた。

しかし、発掘調査や縄張り図作成(第 191 図)の結果から中山遺跡は広い平坦面を有する曲輪群や 道路状遺構も有することが判明した。本来的には塩 見城域内として捉えられると判断されるに至った。

したがって、本書では、「中山遺跡」・「塩見城跡」 を主郭部との方位的位置関係から、

「塩見城跡」⇒「塩見城跡西側曲輪群」(第Ⅲ章所収) 「中山遺跡」⇒「塩見城跡南側曲輪群」(第Ⅳ章所収) と読み替えた上で、その調査成果を報告する。

2 遺構の認識と名称について

遺構略号 本書で報告する遺構略号は以下のとおりとする。ただし、遺構略号は本文および遺構図中での煩雑さを防ぐために使用するもので、東九州自動車道関連の発掘調査で共通的なものに限る。そのため「曲輪」、「堀切」、「横堀」や「土塁」など山城特有の遺構名称は特に略号を付加していない。

S A = 竪穴建物跡 S B = 掘立柱建物跡 S C = 土坑 S D = 土坑墓 S E = 溝状遺構 S F = 井戸跡 S G = 道路状遺構 S I = 集石遺構

なお、「SR=柵列 SS=石積遺構 SX=不明遺構」は、本書のみで使用した略号である。また、掘立柱建物跡や柵列とした遺構には門や木戸が、溝 状遺構には連絡通路的な性格が想定される場合がある。遺構群の組み合わせから、掘り込みのない平坦 面に道路や通路的意味が想定される場合もある。これらについては本文中でその性格に言及する。

遺構番号 塩見城跡は山城跡という特性上、丘陵 尾根上に連続して展開する平坦面(曲輪)の集合体 が、堀切と自然の障害である谷地形によって大きく 区分される特徴を持つ。そこで、曲輪の集合体を一 つの曲輪群とみなした。各曲輪群の呼称においては、

(今塩屋)

古絵図や伝承、小字名等から名称を与えるべきであるが、現時点では曲輪名のある絵図は確認出来ず、現存する小字名ではある程度の地割を反映するに留まるため、改めて適宜、番号を振った。

したがって、曲輪の番号やそれに付随する遺構番号は以下の基準に則って与えることにした。

- ・主郭部に近い曲輪群から順に A ~ M 群とする。
- ・曲輪群内の各曲輪については曲輪 A-1、A-2 という順に主郭側から番号を振り分ける。
- ・各曲輪内の個別遺構の番号、例えば掘立柱建物 は曲輪 A1-SB1・の様に曲輪ごとに番号を付す。
- ・堀切や竪堀については、堀切 A1…の様に付随 する曲輪の番号を付す。
- ・曲輪群どうしを関連づける遺構(通路/道路状 遺構等)は独立させて遺構番号名を付す。

なお、調査区内の谷地形部については、曲輪B群と 曲輪A群間の部分は、地元住民への聞き取りや井戸跡 が検出されたことから「水の手曲輪」とした。また、 曲輪D群東西にある谷地形は、「谷部」と呼称した。

3 遺構実測図の掲載について

全ての遺構図について個別に掲載すると膨大な頁数となるため、必要最小限の掲載にとどめた。したがって、全ての遺構に関する詳細については、遺構配置図と遺構一覧表を参照されたい。

4 遺物の図化・掲載について

遺物は、遺構の時期と性格を示すものを基本とし、 遺跡の変遷や時期的な性格を考える上で必要と判断 されるものを選択して図化・掲載した。

しかし、掘立柱建物をはじめ数多くの遺構が検出されたが、遺構に伴う遺物は包含層出土分に比べて格段に少なかった。さらに出土遺物は多種類多岐に及ぶので、系統的な分類に基づく報告が必要である。そこで、遺物については第Ⅵ章において一括して掲載と報告を行った。なお、遺物の出土位置や状況は、第Ⅲ・Ⅳ章において必要な限りの言及に留めている。

5 遺物の整理

塩見城跡南側曲輪群(中山遺跡)の調査では、現 地調査時の調査区割に基づいて遺物注記を進めたの で、本報告における曲輪名称と遺物の注記が異なる。 この対応関係については第2表を参照されたい。

第2表 中山遺跡における調査区の対照表

山北の左曲	山10 左座	本報告分		
H18 年度	H19 年度	第4図	第 63 図	
1段目	A区	曲輪 D	A·B·C区	
2 段目	D2 区	曲輪 E	D1 · F1 区	
3段目	F2区	曲輪 F	D2 • F2 • E 区	
4 a 段目	G2 区	曲輪 G	G1 区	
4 b段目	I区	曲輪 H	G2•G3•I•J区	
5 a 段目	L区	曲輪I	Μ区	
5 b段目	N区	曲輪J	L·N区	
5 c 段目	K区	曲輪 K	K区	
6段目	P区	曲輪 L	Q区	
7段目	Q区	曲輪 M	P区	

なお、平成14年度に調査が行われた中山遺跡出土遺物との混同を避けるために、今回の調査出土分については「H中山」と別途注記名を冠している。

6 報告書原稿の作成

報告書は DTP による作成を基本とし、Adobe 社製の各種ソフト (Illustrator CS2・Photoshop CS2・In Design CS2) によるデジタル製図、レイアウト等の編集作業を行った。データはデジタルと紙出力の両方とも収蔵している。

(今塩屋・田中敏)

第3節 教育普及活動

発掘調査中、調査後に次のような教育普及活動を 実施した。

平成 18 年度

中山遺跡新聞の発行 発掘調査中に近隣の小中高校へ配布 (平成 18・19 年度実施:全5号)、現地説明会(中山遺跡) 平成 19 年度

報道発表(中山遺跡:龍首水注)、現地説明会(中山遺跡) 平成20年度

現地説明会(塩見城跡)、報道発表(中山遺跡:土製聖人像) 平成21年度

出前講座1(会場:塩見小学校、対象:小学5・6年生)、 出前講座2(会場:日向市中央公民館、対象:日向市高齢 者クラブ)、遺物展示1(会場:宮崎県総合博物館)、遺物 展示2(会場:日向市立図書館)

平成 23 年度

遺跡報告会(会場:日向市大王谷コミュニティセンター、対象:一般市民)

(田中敏)

第Ⅲ章 西側曲輪群の調査

第1節 調査の概要

曲輪群の位置 曲輪 A ~ C 群は、主郭部(城山公園)から西側に派生する尾根上に広がる。一方、曲輪 A・B 群に挟まれた谷地形に「水の手」曲輪、南側に「谷部」(西側谷部)が位置する(第3・4 図)。

これら曲輪群は、第IV章で報告する南側曲輪群と 比較して狭小な曲輪が鎖状に連続するあり方を示 す。また、曲輪 A・B 群は水の手曲輪を介して対称 的な位置関係にあり、その配置は平面 X 字状となる。 調査の概要 曲輪 A 群は 8 段の曲輪からなる。 このうち主郭部側寄りの 4 箇所の曲輪(A1 ~ A4) が調査された。調査の結果、帯曲輪 3 箇所・堀切 2 条・竪堀 1 条・土塁 1 箇所が検出され、掘立柱建 物跡 30 棟・柵列 15 条が復元された。曲輪 A3 では、 埋没した状態の薬研堀状の堀切が確認された。この 堀切は尾根を完全には切断せず、陸橋として削り残 す。堀切と掘立柱建物跡との重複関係も認められた。

曲輪 B 群は、現状では 6 段の曲輪からなる。主郭部側の 4 箇所の曲輪 (B1 ~ B4) が調査対象となる。調査の結果、帯曲輪 2 箇所・堀切 1 条・竪堀 1 条・土塁(岩盤削り出し)1 箇所等が検出され、掘立柱建物跡 26 棟・柵列 15 条が復元された。曲輪 B4 では岩盤破砕礫主体の盛土下に掘立柱建物跡が検出された。

曲輪 C 群は、現状で 4 段の曲輪をなす。主郭部側の 2 箇所の曲輪($C1 \sim C2$)が調査された。堀切 2 条・竪堀 4 条が検出された。

また、曲輪B・C群の堀切を結ぶ横堀が検出された。底面が階段状に整形される箇所も認められた。

水の手曲輪では都合4面の遺構面が検出され、少なくとも3回の造成が認められた。遺構は、石積遺構2基・溝状遺構3条・井戸跡1基・炉跡3基が検出され、掘立柱建物跡20棟・柵列16条が復元された。

石積遺構1は、石垣状の石積み部前面に堀と土塁 が二重に配されており、いわゆる虎口状構造をなす。 複数回の改修・改造の痕跡も認められた。

井戸は円形石組であり、壁体の一部は開いて溝 状遺構と接続する。井戸壁体自体は、曲輪面の造成 に伴って2回のかさ上げがなされ、溝状遺構も3 条にわたって作り変えられたことが判明した。

また、井戸と溝状遺構との接続部は台形や方形 の石敷となる。

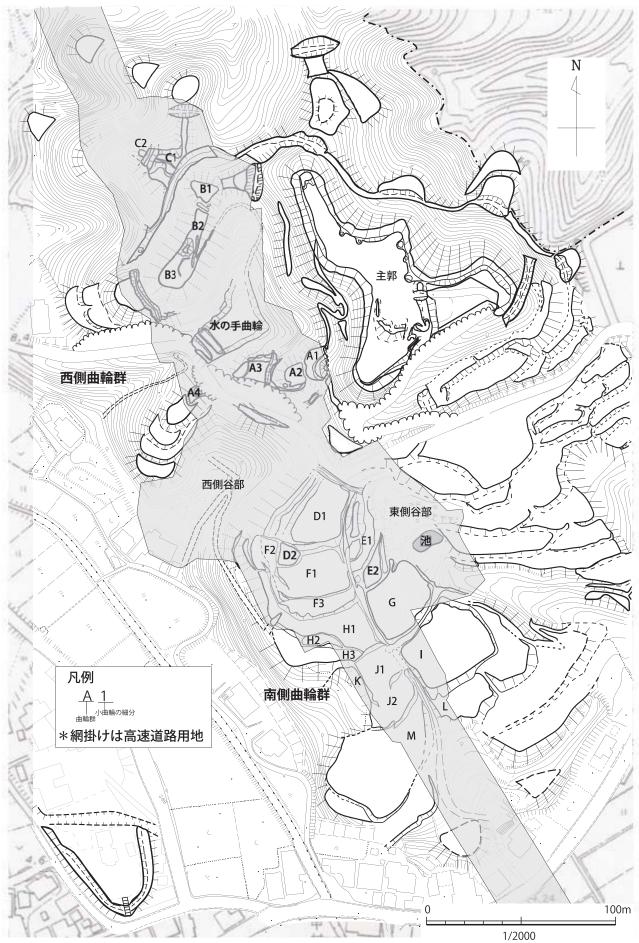
西側谷部の調査では、近代以降の造成に伴う岩 盤削り出しの平坦面や造成土が確認された。

なお、各曲輪の面積、遺構の一覧については、 第3~6表を参照されたい。

(今塩屋)



- 10 -



第4図 塩見城跡内調査区と曲輪の関係

第2節 曲輪A群

概要 曲輪A群は主郭南西端から西に延びる尾根上に展開する曲輪群である。調査区内で検出された平坦面4箇所を、標高の高い側から曲輪A1~A4とした(第4図)。曲輪A4は市道により他の曲輪と分断されていた。

曲輪A群では曲輪4箇所、帯曲輪3箇所、堀切2 条、竪堀1条、土塁1箇所、掘立柱建物跡30棟、 柵列15条が検出された。曲輪A1~A3を結ぶ通 路状の平坦面も認められた。

曲輪 A1 (第7~9図)

位置と構造 曲輪 A 群の最高所に位置し、標高は約54 m、主郭部との比高差は約19 mである。曲輪 D 群の堀切を眼下に臨む。曲輪 A1 南側の斜面では竪堀 (竪堀 A1)、曲輪東端の主郭側斜面裾には、堀切 (堀切 A1) が位置する。

曲輪 A1 は、土塁を幅の狭い平坦面が 2 段に囲む 構造である。平坦面の上段は長さ約 17 m、最大幅 約 3 m、下段は長さ約 27 m、最大幅約 4 mである。 この上段を曲輪 A1a、下段を曲輪 A1b とする。曲 輪に面した法面は急斜面である。

層序 岩盤を削り出して曲輪面とする。曲輪面上には第 $1\sim5$ 層が堆積しており、第2b層中の一部には大きめの礫を含む(第9図a-b、c-d)。

遺構 土塁と柱穴が66基検出された。このうち復元できたのは掘立柱建物跡4棟、柵列5条である。
土塁 曲輪A1の東端に位置する。岩盤を削り残した土塁で、長さ11 m、幅3.2 mを測る。

掘立柱建物跡 曲輪 A1a に 2 棟 (SB1、SB2)、曲輪 A1b に 1 棟 (SB4) ある。各棟とも曲輪面の中央に陣取る位置関係にある。SB1 と SB2 は切り合い関係にあり、SB1 がやや南にずれる。

SB3 は堀切 A1 南側の幅狭な平坦面上に位置し、 SR5 と平面的に重複する。

柵列 SR1 ~ 4 は曲輪 A1 平坦面の周縁を囲繞するように巡る。SR3 は SR4 と接続するかもしれない。 SR5 は堀切 A1 の南側に位置する。柱穴列は等高

線と直交して並び、南側曲輪群との連絡を阻む。

通路状遺構 堀切 A1 の南側および竪堀 A1 の東側には、幅狭な平坦面が南北に延びる。この平坦面の東側斜面にはバックホーのバケット痕が数箇所認められたので、調査着手時点では、後世の造成よるものと考えられた。

調査の結果、平坦面は堀切 A1 と曲輪 A1b へと続き、その分岐点に SB3 と SR5 が検出された。平坦面南側には帯曲輪群も存在した。従って、重機による造成以前にも平坦面、すなわち南側曲輪群と連絡する通路状遺構が存在したと考えられる。平坦面を封鎖する位置にある SB3 は門状遺構と捉えられる。

堀切 A1 は曲輪 A1a 南側の通路状遺構に面するので、堀切を介した主郭部方面への往来は可能である。 遺物 曲輪面および堆積土からは、福建広東窯白磁碗(6)、備前焼擂鉢(393)、土師皿(582)、銭貨(833・835・838)が出土した。14~15世紀の遺物が比較的多い。6は15世紀前半、393は16世紀中頃~17世紀初頭の年代に比定される。土塁周辺では、直径5~10cm大の団塊(ノジュール)が111個出土した。

竪堀 A1 (第7~9図)

位置と構造 曲輪 A1 南側の基部に位置し、北東側に堀切 A1 がある。現地形では南側の斜面に等高線と直交する溝が中腹まで認められたので、トレンチ主体の調査を行った。北側上部付近の岩盤面は60°の傾斜で下方に続く。北東隅は丸く90°に屈曲するので、竪堀の端部と考えられる。竪堀 A1 は堀切 A1 とは連続性のない、独立した位置関係となる。

層序 1 cm 程度の細かな破砕礫が互層上に厚く 堆積する自然堆積層である (第9図 e-f)。

遺物 竪堀 A1 より福建広東系白磁皿 (75)、青磁、 備前焼甕、土師器皿等が出土した。

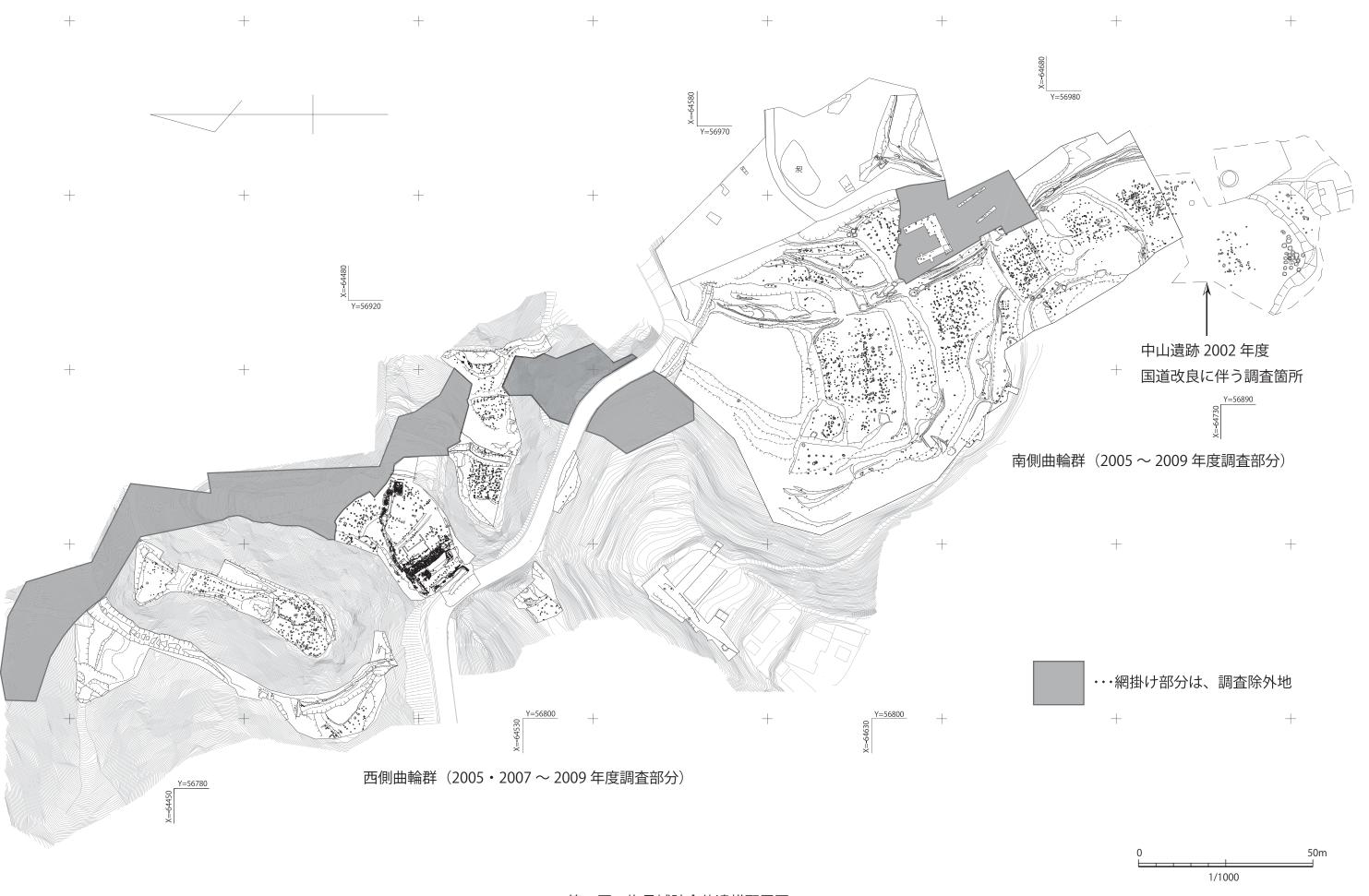
堀切 A1 (第7~8図)

位置と構造 曲輪 A1 の東側に位置する。西側に 岩盤を掘り残した土塁、東側は主郭部に続く斜面部 に面する。堀切は土塁の背面を切断して、斜面と曲 輪を分離している。

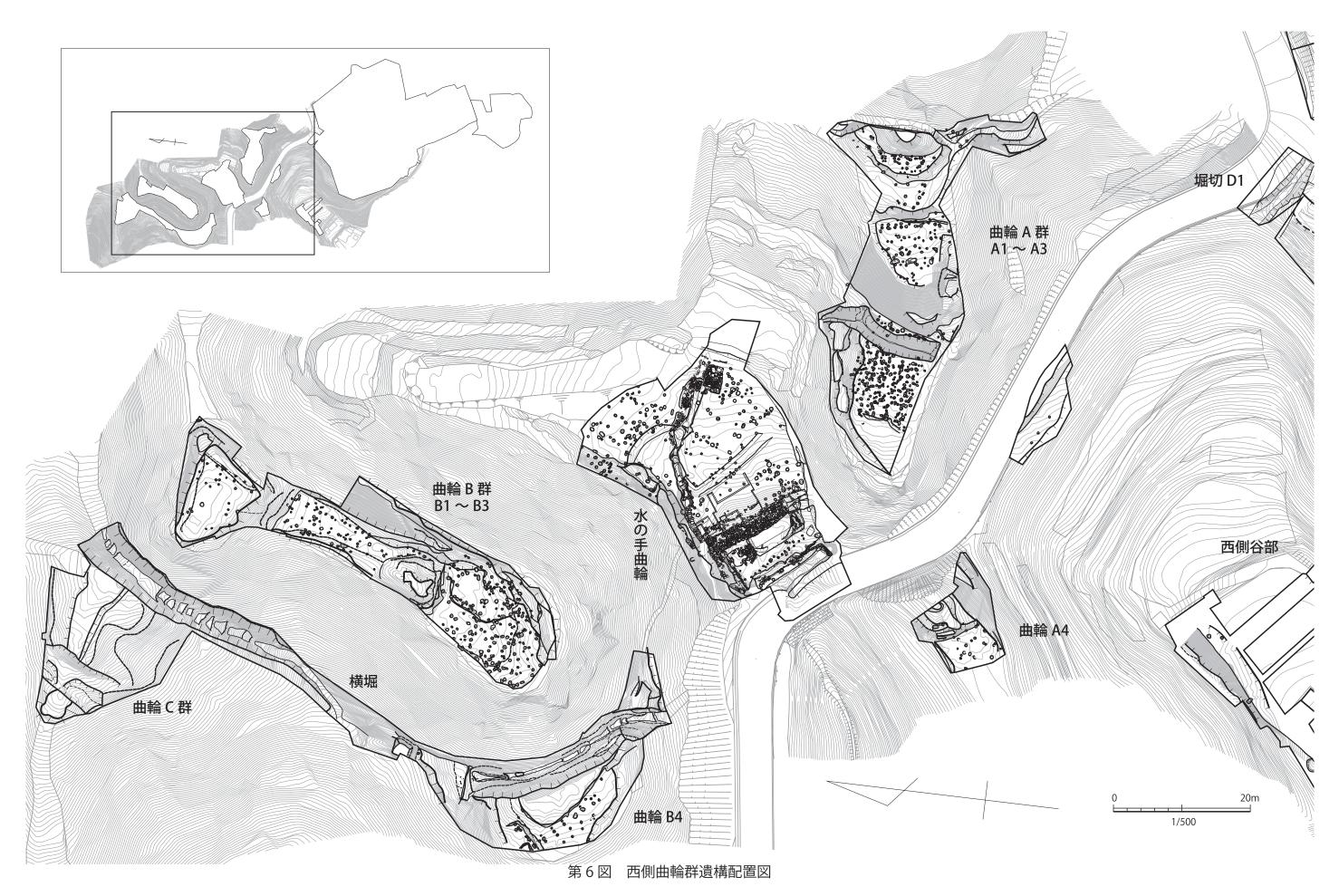
全長は16 m、上幅は推定で2 m (土塁頂部付近)、 曲輪A1 側の深さは1.5 m測る。断面形はV字で、 その堀底は60°の角度で開く、薬研堀の形態である。 この堀切の大部分は調査区外であり、堀切の南北 に開く開口部付近のみが調査対象範囲であった。

層序 岩盤破砕礫を主体とする自然堆積層が確認され、第6層を除いて全てが主郭側斜面からの流れ込みであった (第9図 g-h)。なお、第9層は炭化物を含む層である。

遺物 第2層より銭貨(永楽通宝)(817)が出土した。



第5図 塩見城跡全体遺構配置図



曲輪 A2 (第7~9·19図)

位置と構造 曲輪 A1 の下段に位置し、標高は 51 m、曲輪 A1 との比高差は 3 mである。

遺構面は奥行 9.6 m、幅 11 mで、曲輪 A3 側の 斜面は急斜面だが一部傾斜が緩くなる箇所がある。

層序 第1~4層が堆積しており、遺構面は岩盤面を平坦に削り出している (第9図 i-j)。

ただし、曲輪南東部の一部は遺構面よりもやや高くなっており、本来の遺構面の高さであったとすれば、 平坦面は拡張等の改変を受けている可能性がある。

遺構 通路状遺構や柱穴 81 基が検出された。復元できたのは、掘立柱建物跡 4 棟、柵列 7 条である。 掘立柱建物跡 SB1 ~ SB4 は曲輪東側にある。 SB1・SB2・SB4 はほぼ同軸方向に重複する。身舎面積は曲輪 A1 よりも大きく、SB1・2・4 は庇を有する。 柵列 SR1、SR2 は掘立柱建物跡と曲輪 A1 からの斜面の間に位置し、SR1 は南側斜面のスロープ状平坦面に接続する。SR3、SR5 は曲輪西側にあり、SB1 ~ SB3 に伴うものと推定される。

通路状遺構 曲輪 A2 の南側斜面では、岩盤面を削り出した 4 段のステップとスロープ状の平坦面が検出された。ステップとスロープは、曲輪 A3 と曲輪 A2 をつなぐ通路面の役割を果たしたと考えられるので、これらの遺構群を通路状遺構とした。全長15.8 m、最大幅 2.2 mを測る。

曲輪 A3 側から数えたステップの1段目では柵列 (A3-SR2) が位置する。ステップとの位置関係から SR2 は、城戸の性格が想定される。

ステップ 2 段目では路肩を一部補強した盛土層 (第3~10層) が確認された (第9図 k-l)。ステップ 3 段目は狭小な踊り場面である。ステップ 4 段目の 肩部は L 字形に掘り込まれ広い平坦面となる。

遺物 遺物は掘立柱建物跡の柱穴内から多く出土した。SB1 からは、景徳鎮窯青花碗 (210・214)、SB2 は青磁碗 (134)・備前焼擂鉢 (387)・瓦質土器 (661)・土錘 (749~753) が出土した。SB3 柱穴から土錘 (748)、SB4 柱穴からは邵武四都窯白磁皿 (25) も出土した。(210) は打ち欠きのある碗である。

遺構面や堆積層からも遺物は出土している。青磁碗 (88・106・110)・香炉 (196)、景徳鎮窯青花皿 (235)、備前焼鳶口壺 (457)、土錘 (754・755) 等である。 これらの遺物は、14~16世紀と幅広い年代観を示す。 (児玉、田中達)

曲輪 A3 (第7·10·11·19~21図)

位置と構造 曲輪 A2 の下段に位置し、標高は約44 m、曲輪 A2 との比高差は7 m、水の手曲輪とは11 mを測る。曲輪の南側は市道建設により大きく失われていた。栗尾神社方面の集落や塩見川本流に広がる水田地帯が望める好地でもある。

曲輪面は長さ22.6 m、現存幅11.2 mで、曲輪A群中最大規模である。岩盤を削り出す3段の平坦面から成り、東側から曲輪A3a(長さ15.1 m)、曲輪A3b(同6.1 m)、曲輪A3c(同1.4 m)とする。曲輪A3cの平坦面は幅狭な犬走り状である(第12 図)。

また、曲輪の北縁部に狭い平坦面(帯曲輪 A3)、 曲輪 A2 との境には完全に埋没した状態で検出され た堀切(堀切 A3)が位置する。この堀切の東側肩部 は削平され、その面に柱穴が並んでいた。

層序 曲輪 A3b 部分では 2 層の旧表土(第5・7層) が確認された (第12 図 b-c)。第7 層は岩盤を削り出 した面(地山)上に、第5 層より上層は、柱穴が掘 り込まれる第3・4 層が堆積する。また、第3 層の 上面は曲輪 A3a の遺構面の高さに揃う。

遺構 柱穴 260 基が検出され、掘立柱建物跡 19 棟、柵列 2 条が復元された。柱穴は曲輪 A3a 側に偏在し、曲輪 A3b は第 3 層面の数基に過ぎない。曲輪 A3b・c は遺構の空白部といえる。

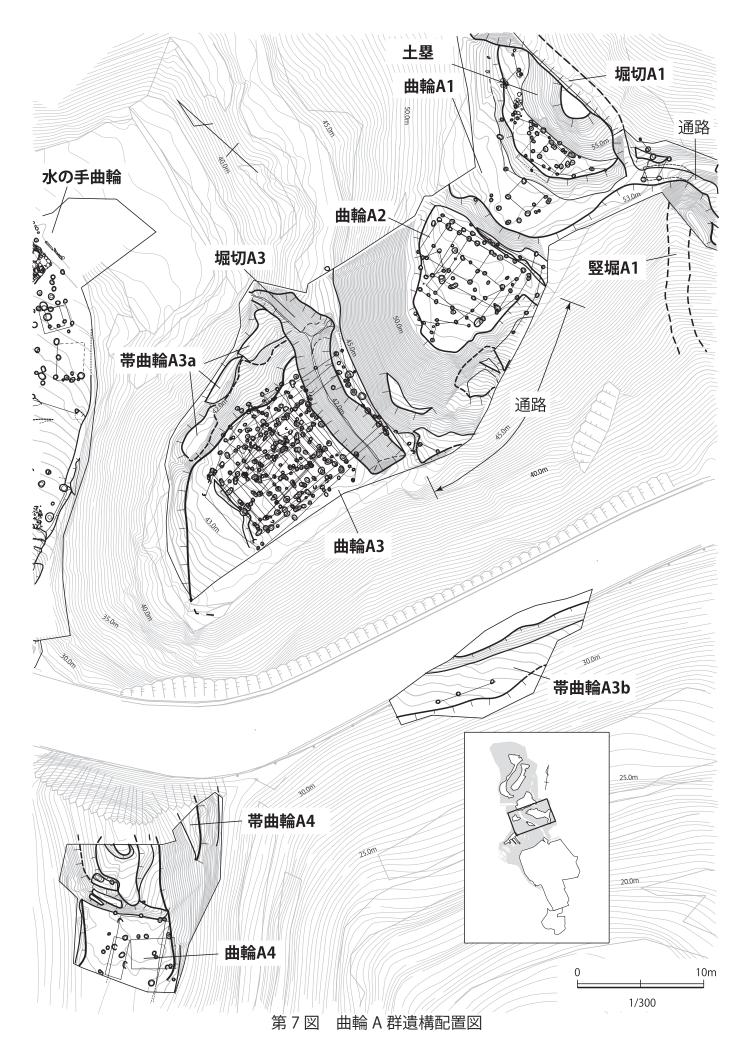
掘立柱建物跡 身舎面積は SB11 (41㎡) が最大で、SB12 (36㎡)、SB16 (30㎡)、SB2•13•15 (15 ~ 20㎡) と続く。残る 12 軒は 10㎡前後と小型の建物である。SB12 は 3 × 3 間の総柱建物で、側柱建物の SB11 とともに曲輪 A3 内で中心的な建物跡である。

掘立柱建物跡は主軸方向から6群に分類できた。 ①西方向に振る(SB3・4・8・10)、②東西方向に近い (SB13・18)、③東西方向(SB14・16・17・19)、④南北方 向(SB2・5・6・11・12・15)、⑤北から東に振る(SB1)、 ⑥東方向に振る(SB7・9)である。

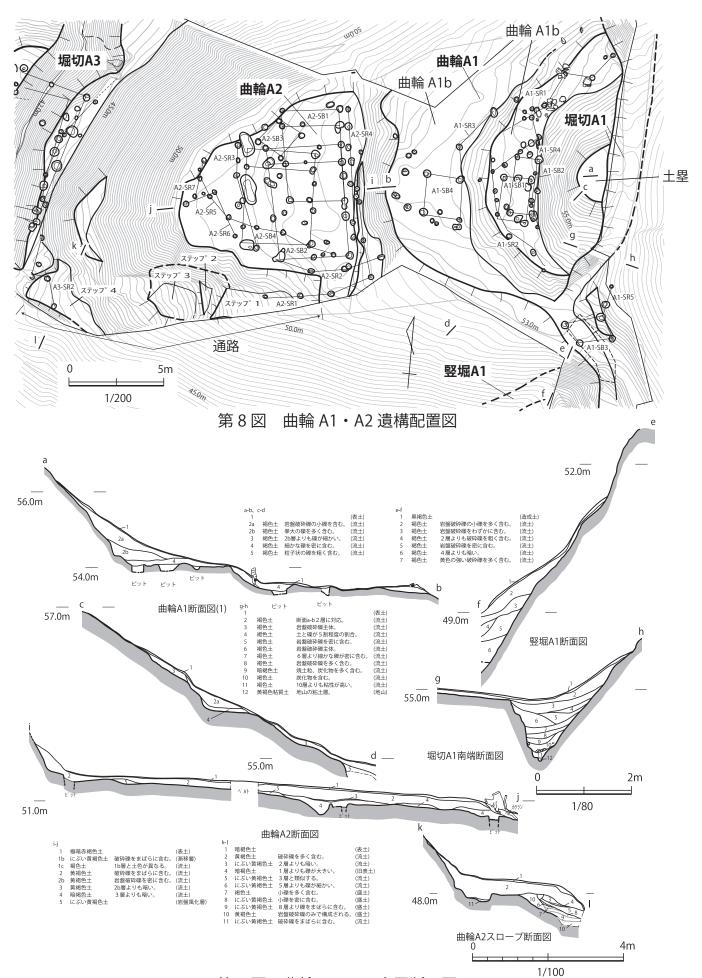
④群のSB11・15とSB2・6は、大小一対になると考えられる。なお、SB12はSB2との位置関係から④群に入れた。

なお、各群の変遷は、柱穴の切り合い関係から、 ①群→③群と④群→⑤群と、②群→④群の順と考え られる。⑥群は切り合い関係がなく不明である。

柱穴出土の遺物の時期は、①群 SB10 柱穴出土の青花皿 (243) は 15 世紀後半~16 世紀後半、③群 SB14の青磁碗 (123) は 14 世紀中頃~15 世紀初頭を示す。



- 18 -



第9図 曲輪 A1・A2 土層断面図

①群は他の群と建物主軸方向が大きく異なり、堀切 A3 に切られる関係にある。堀切 A3 の掘削時期は後述のように 15世紀前半ないしそれ以降なので、①群はそれより遡る時期(14世紀後半代前後)となろう。②・③・⑥群は堀切 A3 で隔てられ、建物主軸は堀切主軸と直交する。出土遺物の年代観も鑑みると堀切が機能した時期(15~16世紀代)の建物跡群となる。

さらに④群 SB2 は、堀切 A3 をまたぎ、その東側 桁行は、堀切肩部を削りとった平坦面上にある。④ 群 SB4・6・11 は堀切 A3 の肩部に接した位置に柱 穴を穿つ。この SB11 柱穴出土の備前焼擂鉢(405)は 16 世紀中頃~ 17 世紀初頭の年代を示す。

このことから、④群は16世紀中頃以降の堀切A3埋没後に曲輪A2裾や堀切肩部を切り開いた上で建てられた建物跡群である。

⑤群 SB1 は、堀切 A3 埋没後の建物跡で、後述のように堀切出土遺物の年代的下限は 16 世紀中頃となるから、SB1 はそれ以降の時期であろう。(川俣) 柵列 SR1 は曲輪全体を囲むように配置されていた。柱穴は第3層面(第12図 b-c)で検出された。

SR2 は通路状遺構のステップ一段目に位置し、堀切 A3 の東側肩部に沿って北方向に延伸する。

遺物 柱穴の出土遺物は、SB10の景徳鎮窯青花皿 (243)、SB11の景徳鎮白磁皿 (41)、備前焼擂鉢 (405)、SB12の景徳鎮窯青花皿 (236)、邵武四都窯白磁皿 (56)、SB13の砥石 (1199)、SB14の青磁碗 (123)、SB15の土錘 (766)等がある。

曲輪面出土の遺物は、福建広東系白磁碗 (12)・ 景徳鎮窯白磁皿 (43)、青磁皿 (148)、漳州窯青花皿 (291)、備前焼甕 (425)、瓦質土器の風炉 (658)、土錘 (761 ~ 765)、挽臼 (1152) などがある。

帯曲輪 A3a (第7·10·11図)

位置と構造 曲輪 A3 北側に位置し、3段の幅狭な平坦面で構成される。平坦面は岩盤を削り出す。各段は連結して、西から東へと階段状に下る。帯曲輪 A3a と曲輪 A3 の比高差は 2~3 mで、最大幅4.7 m、奥行 1.6 mである。

層序 平坦面上には第3・7層(旧表土)が堆積 する。その間の第4層は、曲輪A3の遺構面と天端 が揃うので、曲輪A3aの拡張に伴う盛土層と考え られる(第12図d-e)。 遺構 帯曲輪 A3a 西側では、炭化物と焼土の集中箇所が 1 基検出された。集中箇所は長径 0.5 m、短軸 0.4 mの略円形である (第10 図)。

遺物 漳州窯青花碗 (299)、景徳鎮窯青花碗 (208)、 土師器皿 (615)、土錘 (767·768)、鉄釘 (897) 等がある。 (田中達)

帯曲輪 A3b (第7·13·14図)

位置と構造 曲輪 A3 から西側谷部への南側斜面 中程に位置する。曲輪 A3 の帯曲輪とする。調査区 内では帯曲輪全体の構造は把握できなかった。標高 は約 28 m、曲輪 A3 との比高差は 16 mである。

市道下の客土を除去すると、自然堆積層が確認され、その下面で岩盤削りだしの平坦面が検出された。その最大幅は 3.2 mを測る。それより 0.6 mほど下段にも幅 0.3 mの平坦面が成形される(第 14 図)。

層序 上段の平坦面上には、マンガン沈着の砂質土が細かい単位で水平に堆積する(第2~13層)。 下段の第19・20・22層の上面は水平面を形成するので、帯曲輪面として機能した可能性がある。

なお、第 13 層は第 $15 \cdot 18$ 層を水平に削り取る 堆積なので、第 $15 \sim 18$ 層は下段の平坦面を埋め 立てた盛土とも考えられる。流入土の整地や盛土等 で帯曲輪の機能を維持したようだ (第 14 図 n-o)。

遺構 第5 (11) 層【第14図 l-m、n-o11 層面】の中央部分で焼土面1箇所、第2層面(第14図 l-m、n-o)で柵列(SR1)と焼土面が中央部分で1箇所、西端で2箇所重複して検出された。本節では第5層面の遺構を帯曲輪A3b-1期、第2層面の遺構を帯曲輪A3b-2期とする。焼土面に炭化物が多く含まれる。

なお、炭化物の AMS 年代測定結果は、 1 期の焼 土面は AD1510~1600 年・1610~1650 年、 2 期面 は AD1470~1640 年と出た。しかしながら、この 結果から焼土面の時期を絞り込むのは難しい。

帯曲輪の機能 帯曲輪 A3b は谷部に面し、柵列 も伴うので谷部方面を意識した防御的機構と位置付 けられる。また、炭化物や焼土の集中箇所は焚火や 狼煙痕跡の可能性が考えられる。同じく帯曲輪 A3a にも認められるので、曲輪 A3 の南北に火を用いた 施設が伴っていたことになる。

さらに、帯曲輪 A3b の東方向には曲輪 D群の堀切が、正反対の西方向には、帯曲輪 A4 が位置する。 各所ともに大きな高低差はなく、堀切や帯曲輪の位 置関係から、帯曲輪 A3b は曲輪 A4 と曲輪 D群を往来する際の通路として機能していたと推測される。

つまり、曲輪A群の南側斜面には各曲輪間の連絡 通路が設定され、さらに谷部方向に対する防御性も 付加されていたと考えられる。

遺物 白磁碗(2)、青磁、青花、備前焼、土師器 皿(592)、土錘(769・770)等が出土している。

堀切 A3 (第7·10·11図)

位置と構造 曲輪 A3 の東端に位置する。検出時 点では完全に埋没していた。全長 18.5 m、上幅の 最大幅は 3.7 m、深さは最大で 2.75 mを測る。

壁面の立ち上がりは 70°の角度で開き、断面 V字 形を呈するので薬研堀といえる。ただし、底面は鋭 角な掘り込みではなく、丸みを帯びている。

曲輪 A2 に沿って東側にやや湾曲する平面形であるが、南から 12.2 mの地点では約 40° 西側に屈曲する。また、底面のレベルは屈曲点までは一定で、それより北は緩く傾斜し、開口部付近は切り立つ。壁面は凹凸がない精美なつくりである。この屈曲点では、堀の角度は 95° と広角になる。堀底からは茶臼 (1151) が出土した。人為的に半分に打ち欠かれており、意図的に置かれた可能性が考えられる。

堀切肩部と曲輪 A2 との境付近は、狭い平坦面となり、SB1・2 の柱穴が並ぶ。この平坦面は、曲輪面の拡張で堀切肩部を削平したためと考えられる。

なお、堀切の埋没面で遺構検出を行ったが、柱穴 埋土との差が認識しづらくて数基の検出に留まっ た。本来は多くの柱穴が存在したと考えられる。

一方、堀切の南端部は尾根を断ち切らず土橋状に掘り残した構造となる。南側は市道による削平で不明であるが、恐らく上幅は2mを超えないであろう。 土橋状部分の側面は約70°の傾斜角で堀底に至る。

この土橋状部分は、曲輪 A2 からの通路状遺構と接続することから通路としての機能が考えられる。また、敢えて掘り残した点は、帯曲輪 A3 b方面から水の手曲輪への進入を阻むためとも考えられる。

このA層の上には2層(曲輪A3面直上の堆積層) と表土が堆積している(第11図a-b~h-i)。

A層は大きな礫や細かい単位の礫の堆積である。 B層は南端部から中央付近まで堆積し、多くの遺物が出土した。C層は細かい礫が均一に堆積する。東側方向からの堆積が主で、上面付近が水平方向に堆積する。C層はレンズ状堆積を呈するので自然堆積土と理解される。一方、A・B層については破砕礫の粒径が揃わずに混在した土が一気に堆積したような状況や土盛状の堆積層(第9~14層)の存在から人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物 遺物は B・ C層を中心に邵武四都窯白磁皿 (18·19·29)・小碗 (36·37) や景徳鎮窯白磁皿 (47)、福建広東系白磁碗 (7·10)、青磁碗 (83·85·121·122)・瓶 (201)・景徳鎮窯青花碗、褐釉陶器天目碗、備前焼擂鉢 (387)、土師器皿 (563·590·608·614)、金属製の笄 (859)、砥石、火打石や団塊 (ノジュール)等が出土した。底面出土の茶臼 (1151) もある。

白磁類は森田C・D・E類、青磁碗は上田B2類や 上田D類、青花碗は小野C・E類があり、14世紀後 半~16世紀後半の年代幅を示す。備前焼は15世 紀代の特徴を示している。茶臼は15世紀後半~ 16世紀代に盛行した形態である。

(児玉・田中達)

堀切 A3 の時期 堀切 C 層出土の炭化物は、AMS 年代で AD1400 ~ AD1440 年にあたる。このため、堀切は 15 世紀中葉頃には掘削されていたと推定される。堀切出土遺物の年代観と矛盾はしない。

堀切が埋め戻された時期は、出土遺物の年代的下限を示す 16 世紀中~後半以降と推定される。

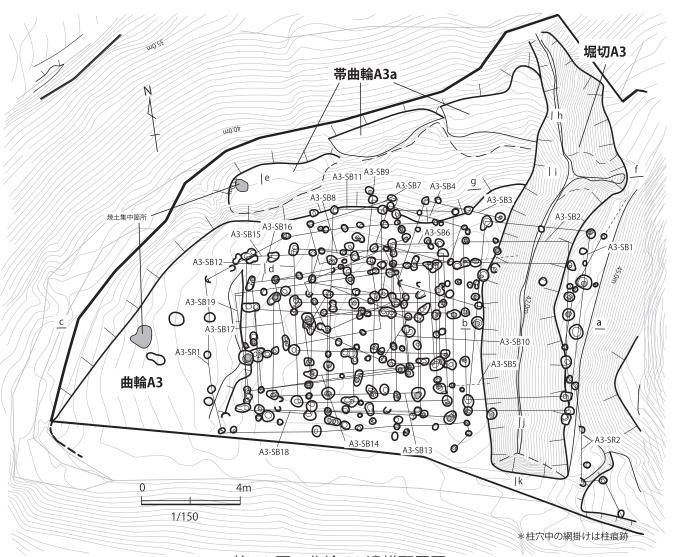
曲輪 A3 の変遷 曲輪面は、曲輪面の層位的関係 (第 12 図 b-c) から第 5・7 層を旧表土とすると、3 時期 (A~C期) の変遷が考えられる。

A期: 岩盤削り出しの曲輪面(第7層堆積以前)

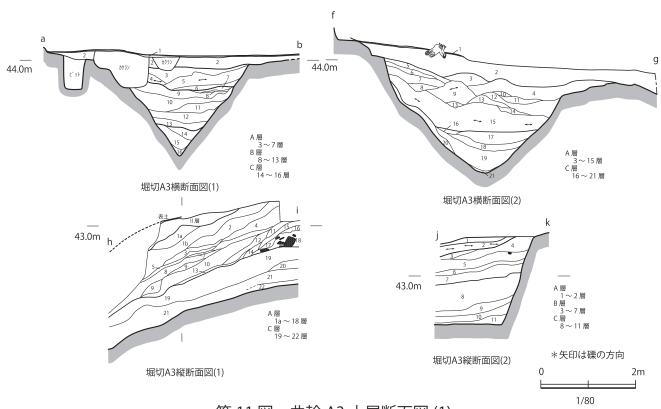
B期:曲輪 A3b の傾斜面を盛土 (第6層) して曲輪 面を拡張 (第5層堆積以前)

C期: 曲輪 A3b 面を再度盛土 (第3~4層) して曲輪 A3a 面と一体化 (曲輪 A3a の拡張)

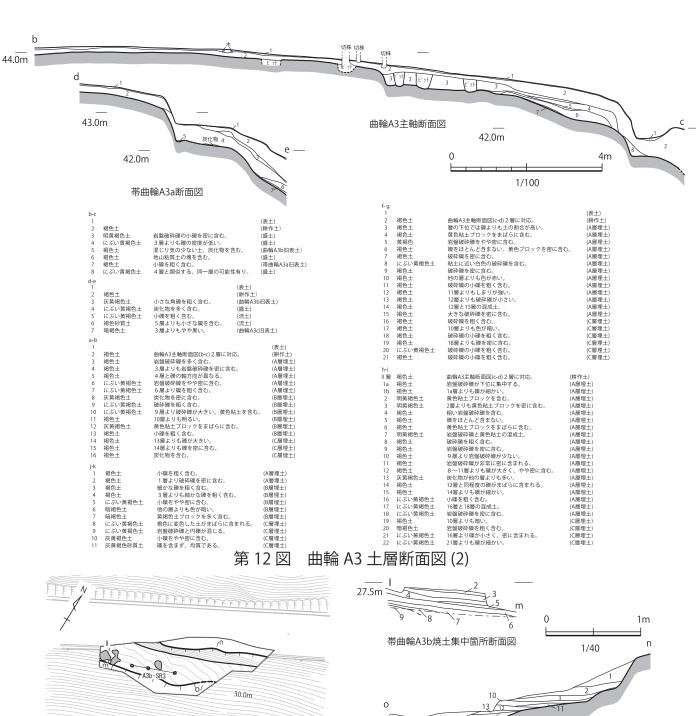
しかし、曲輪 A3 の各期と堀切 A3 や建物跡群との相互の時系列的関係は、詳らかにはできなかった。ただし、建物跡の①群に後出して堀切 A3 が掘削(15世紀中葉頃)されたこと、堀切の機能時には掘立柱建物跡の②・③群が存在していた可能性は指摘できる。

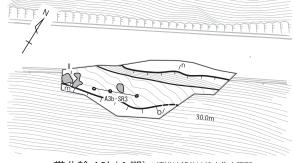


第10図 曲輪A3遺構配置図

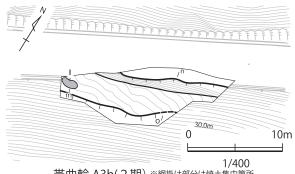


第 11 図 曲輪 A3 土層断面図 (1)



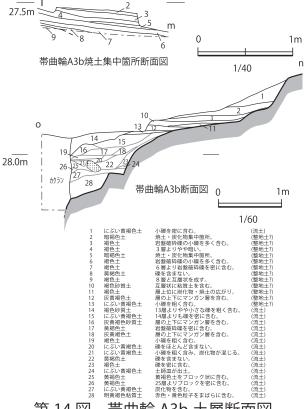


帯曲輪 A3b(1期)※網掛け部分は焼土集中箇所 (第14図 I-m 第5層及び、n-oの第11層上面)

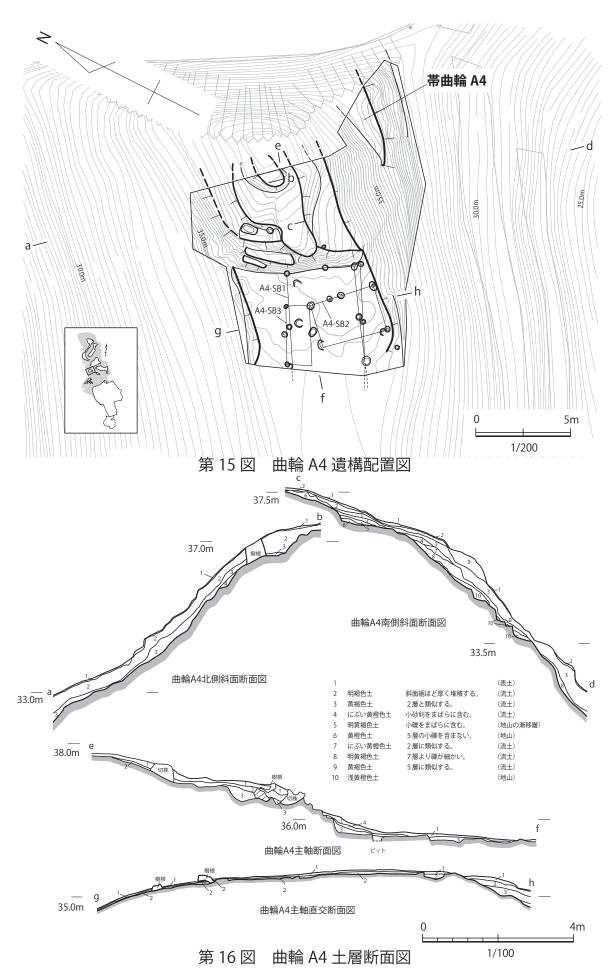


帯曲輪 A3b(2期) ※網掛け部分は焼土集中箇所 (第14図I-m、n-oの第2層中位)

帯曲輪 A3b 遺構配置図 第13図



带曲輪 A3b 土層断面図 第14図



少なくとも、堀切 A3 の調査結果から、人為的に埋め戻され(16世紀中~後半以降)、堀切の東側肩部(曲輪 A2 側の斜面裾)をもカットするほどの土木作業量を伴った曲輪面の拡張が行われ、さらに SB1・2 等の建物跡の④・⑤群や SR1・2 が造られた過程が読み取れる。この曲輪面の拡張は、恐らく B 期または C 期の頃と考えられる。

(今塩屋、田中達)

曲輪 A4 (第7·15·16図)

位置と構造 市道の南側に位置する。平坦面と土 塁から成り立つ。平坦面の標高は約35 mで、規模 は長さ5 m以上、幅7 mである。土塁部と平坦面の 比高差は3 mで、曲輪A3 とは9 mである。岩盤面 を削り出した土塁部の背面(東側)は、市道により 大きく改変されているが、周辺の地形から市道部分 は堀切ないし竪堀が存在した可能性が高い。

北側は、水の手曲輪から続く谷部斜面に面し、約40°の角度で谷底に向けて傾斜する。この谷底部分は、現況で幅1m弱の平坦面が部分的に認められた。かつては平坦面を伝って行き来していたという。

南側斜面では、西側に向かい収束する平坦面(帯曲輪 A4)が位置する。南側斜面の中腹では帯曲輪状の平坦面が2段確認されたが、これは植林等による後世の造成で形成されたものであった(第16図 c-d 3 層)。

層序 岩盤削り出しの平坦面と土塁上に薄く自然 堆積層がのる (第 16 図)。

遺構 柱穴が 26 基検出された。そのうち、掘立 柱建物跡 3 棟が復元された。

掘立柱建物跡 建物跡は曲輪中央部に位置する。 この3棟は雁行形に重複するので、建て替えの関係 と考えられる。

遺物 土塁より青磁碗 (99·101)、平坦面より青磁碗 (111·124·131)、褐釉陶器天目碗 (306)、備前焼甕、瀬戸・美濃焼大皿 (472)、肥前系陶器皿 (512)、瓦質土器双耳釜 (639·645)、土錘 (806) 等が出土した。

帯曲輪 A4 (第7·15·16図)

位置と構造 帯曲輪 A4 は市道による削平受けており、規模等は不明である。遺物の出土はない。

なお、曲輪 D 群の堀切 D1 と帯曲輪 A3b とは、直線的な位置関係で標高もそれほどの高低差はないので、この3 者は連続する可能性が高い。

層序 岩盤面削り出しの平坦面上に自然堆積層が 2層堆積するのみである (第 16 図 e-f)。

団塊(ノジュール)について (第17・18図)

今次の塩見城跡の発掘調査においては、手の平に 収まる大きさの団塊が計 167 点出土した。内訳は 西側曲輪群 149 点、南側曲輪群 18 点である。団塊 は調査地周辺の四万十層累群・日向層群に含まれる ので、当初は自然遺物の混入とあると考えられた。

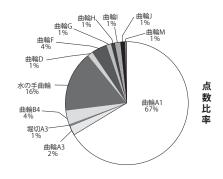
しかし、曲輪 A1 土塁周辺で団塊が集積している 状況が検出されたので、意図的に曲輪面持ち込まれ た可能性が高いと判断される。

各曲輪における出土個数比は第17回に、重量比は第18回に示した。出土個数比では曲輪A1と水の手曲輪に集中している。形態的には握り易い大きさと、適度な重量のものが多いことが特徴としてあげられる。

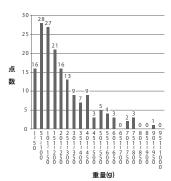
これらのことから、今回の調査で出土した団塊は、 低所の曲輪や箇所からの侵入者に対して高所の曲輪 を防御するために使用・準備された**つぶて石**と考え ておきたい。

なお、平成13年度に日向市教育委員会が実施した塩見城主郭部分の調査では、主郭東側土塁の周辺に拳大程度の川原石を一箇所に集めた状況が確認されたという(『日向市史』2010)。調査者はこれらの見解として、防衛の際に眼下の敵に向けて投げるつぶて石とされている。

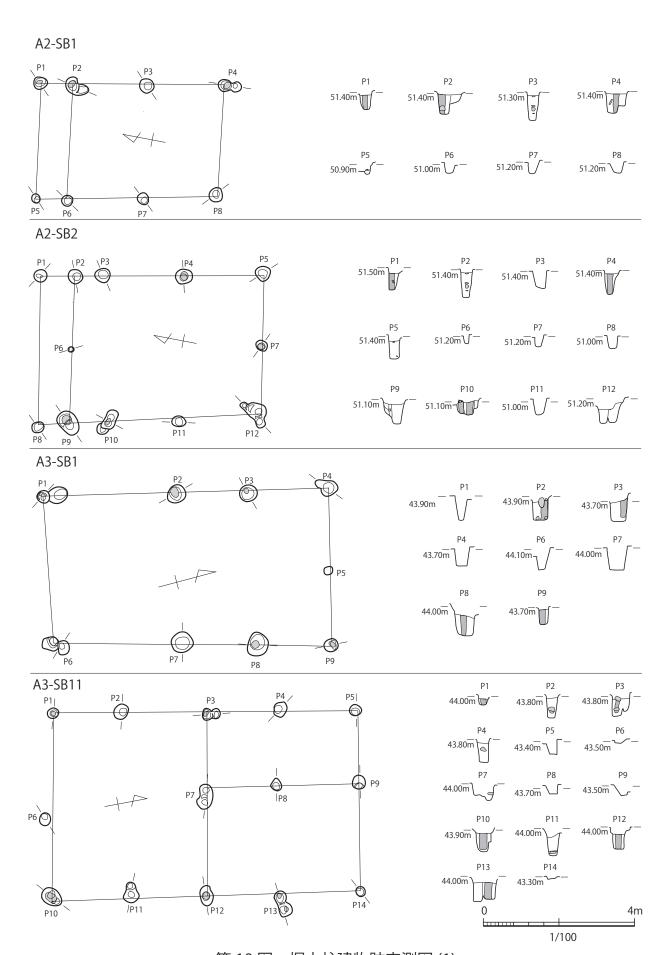
(田中達)



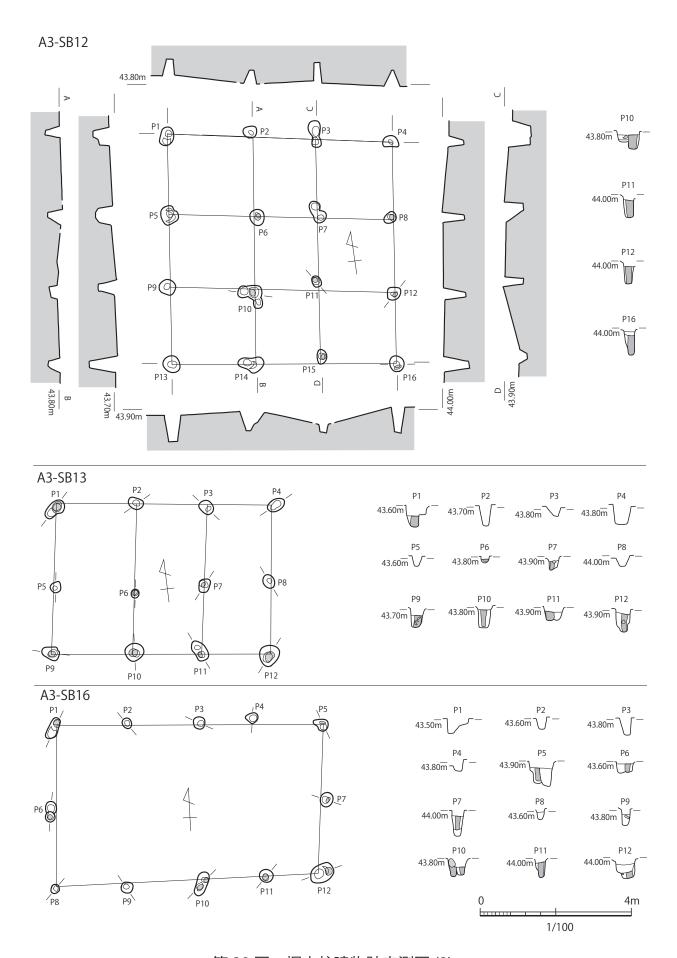
第 17 図 団塊 (ノジュール) 曲輪別出土個数比



第 18 図 団塊重量比

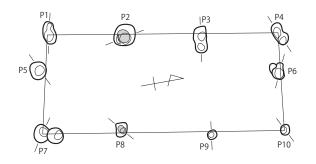


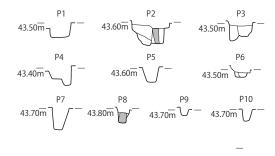
第19回 掘立柱建物跡実測図(1)



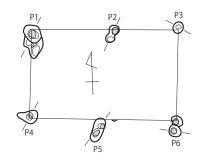
第20図 掘立柱建物跡実測図(2)

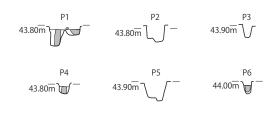
A3-SB15



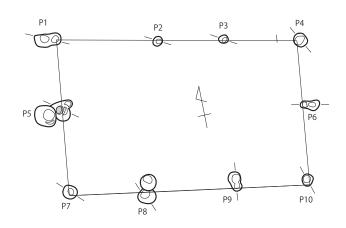


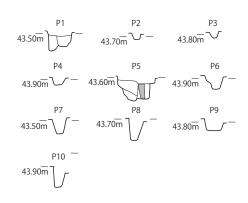
A3-SB14





A3-SB18







第21図 掘立柱建物跡実測図(3)

第3節 曲輪B群

概要 曲輪B群は主郭北西端の西側に南北に伸びる尾根上に位置する。主郭部とは東西に伸びる狭小な細尾根で接続するが、主郭部西側で堀切により切断されている。

調査区内では、平坦面が 4 箇所確認された。最高所から曲輪 $B1 \sim B4$ とする。曲輪 $B1 \sim B3$ は連続した平坦面だが、曲輪 B4 は曲輪 B3 との比高差が約 12 mあり、急斜面および堀切 B4 により隔てられている。この曲輪 B4 の西側には現況でも曲輪と考えられる平坦面が 2 段存在する。

曲輪B群においては、曲輪B1~B4の他、帯曲輪2 箇所、土塁1箇所、堀切1条、竪堀1条、横堀1条、掘立柱建物跡26棟、柵列15条が検出された(第22図)。

なお、堀切 B4、竪堀 B4、横堀については、第5 節において一括して報告を行う。

曲輪 B1 (第22~24図)

位置と構造 曲輪 B 群の最高所に位置し、標高は62 m、平坦面は東西に約15 m、南北に約12 mを測る隅丸三角形である。西側と北側は急峻な斜面で、北東隅のやや傾斜した平坦面から東側は調査区外の主郭部へと続く痩せ尾根線となる。

また、平坦面南側は曲輪 B2 の平坦面に向かって 勾配の急な傾斜面となる。西側斜面下には堀切 C1、 竪堀 C1a、C1b がある。

曲輪 B1 からは塩見小学校方面の東川流域の沖積 地や曲輪 C 群を見下ろせる。また背後の険しい山地 形や主郭部の背面を見上げる眺望がひろがる。

層位 平坦面及び斜面において表土直下に第2層・3層が堆積している(第23図 a-b、c-d)。

遺構 柱穴が 35 基検出された。そのうち掘立柱 建物跡 1 棟、柵列 3 条が復元された。

掘立柱建物跡 SB1 は曲輪北東隅に位置し、南西 角より板塀が続く。柱穴径は小さいので、櫓のよう な大型建物であった可能性は低いとみられる。

柵列 SR1 は曲輪南西側、SR2 は曲輪南東側に それぞれ位置している。SR2 は SB1 の南に位置し、 柵列東側は 1 段下がった平坦面となる。

遺物 出土は少量で、福建広東系白磁碗、青磁碗 (128)、備前焼擂鉢、土師器皿 (564·565)、土錘 (771·772) 等が出土した。

128 は 14 世紀中頃~ 15 世紀初頭の年代観が与 えられる。 曲輪 B2 (第22~24·27図)

位置と構造 曲輪 B1 の南に位置し、標高は 58 mで、曲輪 B1 との比高差は約 4 mである。

平坦面は全長約27 m、最大幅約6 mと南北に細長く、東西を急峻な斜面に挟まれた馬の背状である。 曲輪 B2 からの眺望は、前後を曲輪面や土塁で遮られて東西方向しか利かず、西側斜面下にある横堀やさらにその直下の谷地形を見下ろせる程度である。

層位 遺構面は岩盤を削りだした平坦面である。 その上面に自然堆積層がある(第23図a-b、e-f)。

遺構 土塁、通路状遺構と柱穴 77 基が検出された。掘立柱建物跡 4 棟、柵列 4条が復元された。

土塁 曲輪 B2 の南端部に位置する。岩盤面を削り残した円丘状の土塁で、曲輪 B3 との境にあたる。規模は長径 10 m、短径 7.1 m、高さ 0.8 mを測り、曲輪 B3 側から出入りする際の障壁となる。

掘立柱建物跡 平坦面北側に SB1・2 が、中央部付近に SB3・4 が位置する。それぞれ総柱建物と側柱建物が重複関係にあり、南北に 2 棟が並立する位置関係であった可能性が考えられる。

SB1・2 は曲輪 B1 の南斜面裾際の位置に柱穴が穿たれており、東西方向は平坦面の落ち際までを身舎部分とする建物跡である。SB3・4 も同様で四壁周囲の空間に余裕のない占地のあり方である。

柵列 SR1 は SB1、SB2 の西側を迂回するように 位置する。SR2 は SB1 の東側にあり、SB2 と切り 合い関係にあるため、SB1 に伴う柵列と考えられる。 SR2 柱穴から砥石 (1203) が出土している。

通路状遺構 曲輪 B 群では 2 本の幅狭な平坦面が検出された。平坦面の一つは、曲輪 B2 の東側斜面から曲輪 B3 方向に抜ける、勾配の大きい登山道のような上り坂、もう1つは曲輪 B3 の SB1 付近で分岐して、曲輪 B2 の土塁東側にある SR4 に沿って SB4 へと到る緩いスロープ状である。これら平坦面は水の手曲輪方面から曲輪 B 群へ、さらに曲輪 B2・B3 へと分岐するので通路状遺構とみなした。

曲輪 B2 東側斜面側の通路状遺構は、分岐点からの長さ 20 m、幅 $0.8 \sim 1.4$ mで調査区外へと延伸する。通路面上に堆積する第 5 層中からは多くの炭化物が検出された (第 23 図 g-h)。 AMS 年代測定では、AD1260 \sim 1300 という結果が得られている。

出土遺物は、漳州窯青花皿 (286)、褐釉陶器天目碗 (304)、土師器杯 (555)、銭貨 (809) 等 がある。

曲輪 B3 (第 22 ~ 25 • 27 ~ 29 図)

位置と構造 曲輪 B2 の南側に位置し、標高約57 mで南端部にかけて緩く傾斜している。南側の水の手曲輪との比高差は23 m、西側の曲輪 B4 との比高差は12 mで、急峻な斜面で囲まれている。

標高は曲輪A1とほぼ同程度である。奥行17.3 m、幅約13 mで曲輪B群最大の面積を誇る。曲輪B2とは明確な段差なく接続する。平坦面の中央付近から南側に僅かな段差があり1段低くなっている。

曲輪の南東隅には、南側に下る2段の平坦面(帯 曲輪B3a、B3b)がある。後述のように、この帯曲 輪群は曲輪面の拡張に伴い埋め立てられていた。

層位 表土直下に第2層が堆積しているが、斜面にかけて堆積が厚くなる(第23図 a-b、i-j)。

南東側の縁辺部では表土下より岩盤破砕礫を伴う 層が堆積しており、これを除去すると岩盤削り出し の平坦面が2箇所段状となる帯曲輪(帯曲輪B3a、 B3b)が検出された。なお、曲輪南東側斜面では平 坦面といった遺構は確認されなかった。

遺構 通路状遺構および柱穴が198 基検出された。そのうち掘立柱建物跡19棟、柵列8条が復元された。掘立柱建物跡の軒数は、曲輪B群において最多であり且つ集中している。 (田中達)

掘立柱建物跡 掘立柱建物跡は曲輪 B3 の平坦面 落ち際を囲繞する柵列の内部に密集・混在した状態 で建ち並ぶ。広大とはいえない平坦面に集中して建 てられるあり方は、曲輪 A3 と同様である。水の手 曲輪や西側谷部方向を意識したものと理解される。

身舎面積は、SB4 (28㎡)、SB14 (20㎡) が大き い部類である。以下、15㎡が 4 棟、 $10\sim13㎡$ は 7 棟と続き、10㎡以下の小型建物は5 棟を数える。

これらの掘立柱建物跡の建物主軸方向に着目する と、東西方向と南北方向の2者あるが、さらに座標 北に対する振れ方から5グループに分類された。

① 群 (SB5・15・19)、② 群 (SB3・4・13・17)、 ③ 群 (SB1・2・9・18)、④ 群 (SB6・7・8・10)、 ⑤群 (SB11・12・14・16) である。各群の前後関係は、 柱穴の切り合い関係に乏しいため不明である。建物の 配置は、建物主軸が平行もしくは互いに直交する建物 が2棟一対となって配置されていたと考えられる。

なお、帯曲輪B3a・bとの柱穴の切り合い関係から、 少なくともSB5~7は帯曲輪が埋め立てられた後 に建てられた掘立柱建物跡である。 (川俣) 柵列 柵列は曲輪 B2 の土塁を起・終点にして曲輪 B3 の縁辺をぐるりと廻るもの、曲輪 B3 東縁に沿う直線的なものに二分別される。帯曲輪 B3a・b にあたる柱穴は、調査中のミスにより見逃してしまった。本来は、柵列は帯曲輪を埋め立てたあと曲輪面を囲繞するように設けられたものと考えられる。

通路状遺構 曲輪 B3 の東縁、特に SB1 から SB5 付近にかけては幅1 m弱の平坦面が検出された。この平坦面は曲輪 B2 から続く通路状遺構とみなせる。

なお、SR8 は、通路状遺構を塞ぐように平坦面の 両端に柱穴が配置されるので、門跡の可能性もある。 遺物 SB4 の柱穴から青磁碗 (189)、SB7 は青花 碗や褐釉陶器四耳壺、SB9 で白磁碗と青花碗と鉄 製紡錘車 (902)、SB13 で福建広東系白磁皿 (69)、 SR1 の柱穴より青磁皿 (159)、青花碗、SR2 は福建 広東系白磁皿 (54) や青磁碗等が出土した。15 世紀 後半~16 世紀後半の年代幅に収まる遺物群である。

曲輪面での出土量は曲輪 B 群中最も多い。貿易陶磁器類や国産陶器類とともに、平瓦 (696)、土錘(773~782)、銭貨 (815・816・821・824~826・832)、 鉄製鍋 (906) や砥石 (1173) の出土が注目される。 年代は 14世紀後半~16世紀代と幅広いが、15世紀後半以降の遺物が中心である。

帯曲輪 B3 (第22~24図)

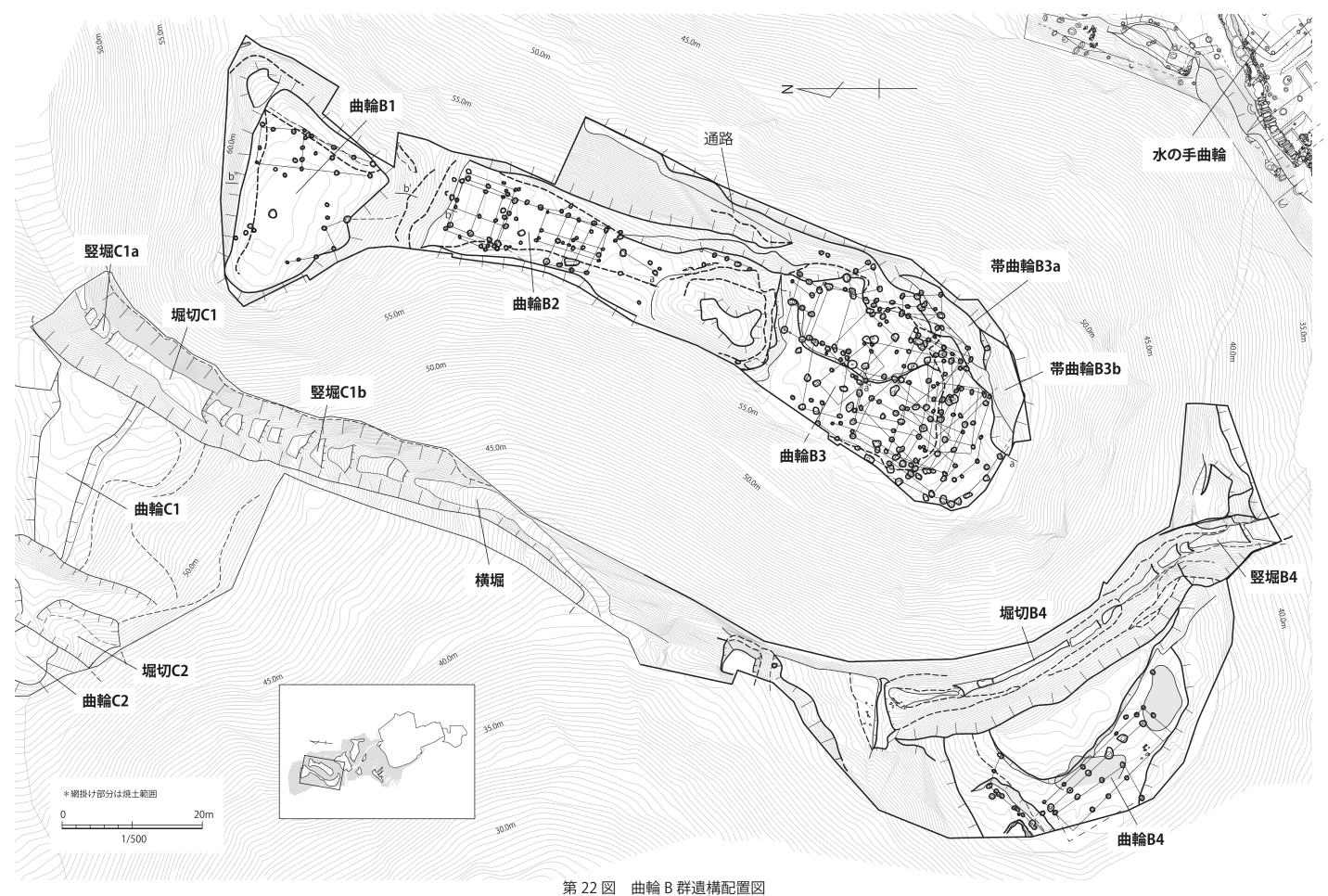
位置と構造 曲輪 B3 の南東隅に位置する帯曲輪 である。底面は2段で西側が一段低い。この帯曲輪 の東側を帯曲輪 B3a、西側を帯曲輪 B3b とする。

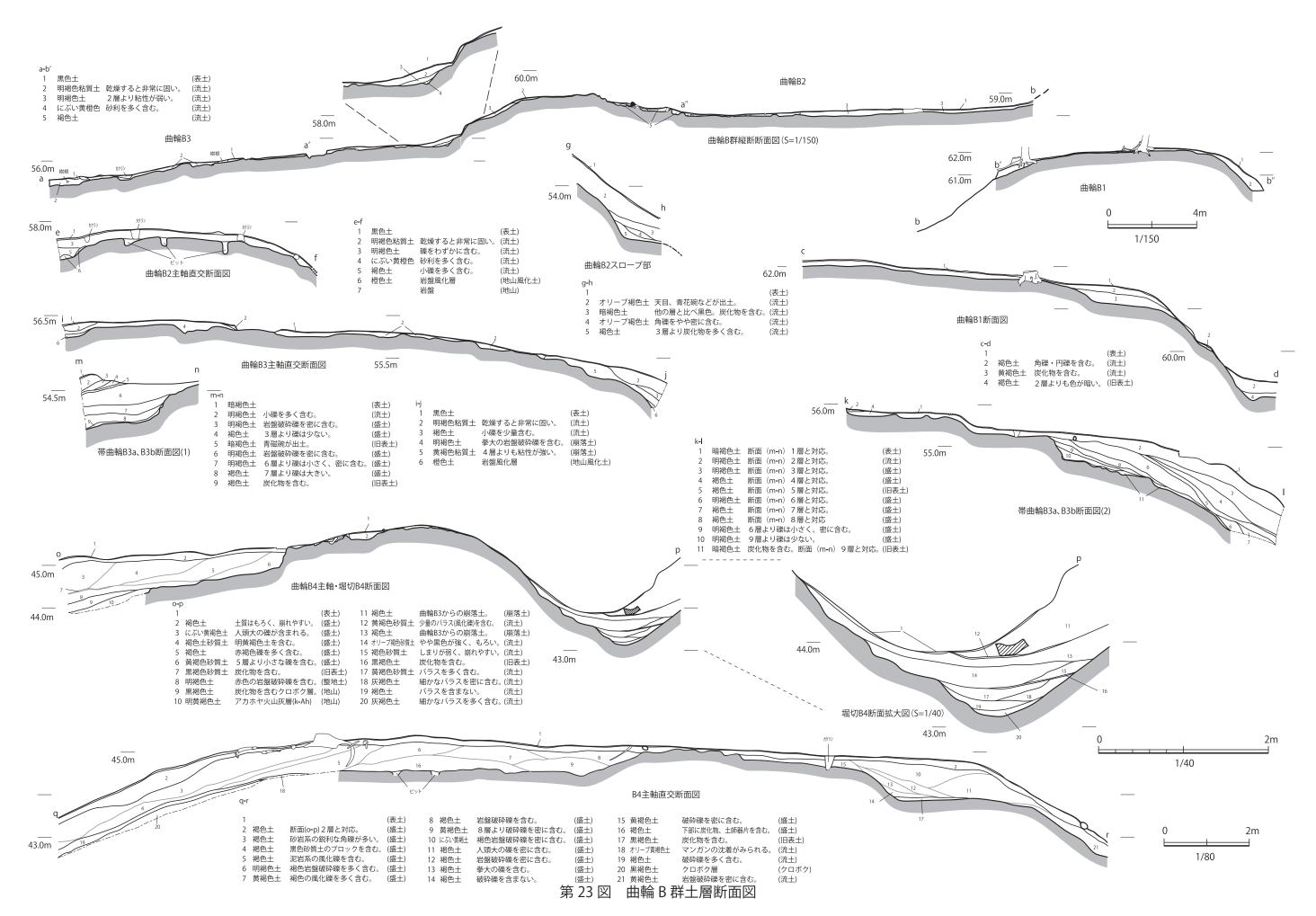
帯曲輪 B3a の規模は幅約9 m、奥行き約2 mである。曲輪 B3 との比高差は、1.3 mで南にやや傾斜する。帯曲輪 B3b は幅約8 m、奥行き約2 mを測り、帯曲輪 B3a との比高差は $0.6\sim0.7$ mである。

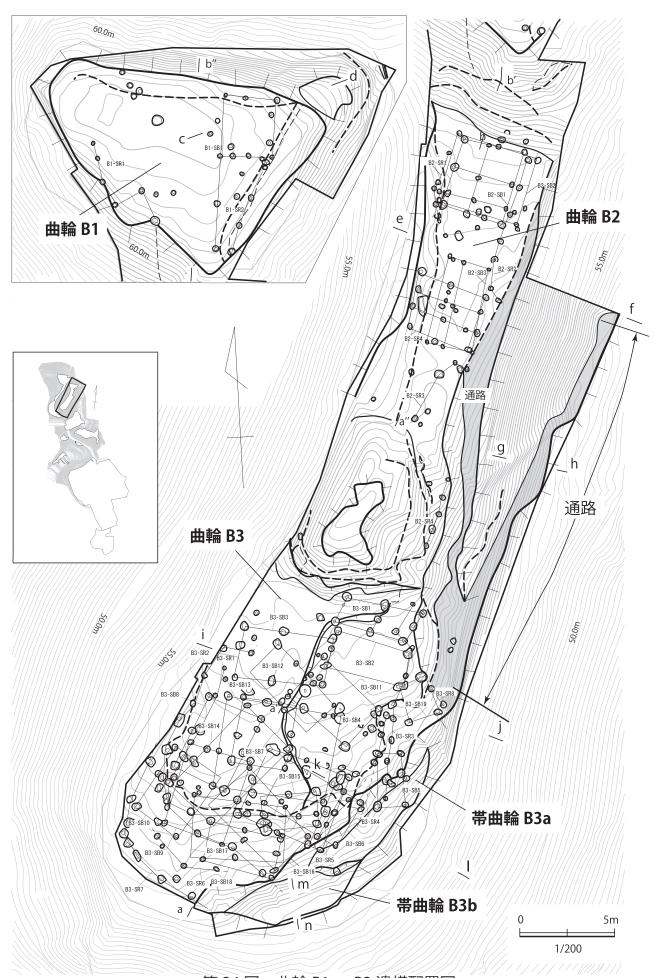
帯曲輪 B3a、B3b ともに、柵列や焼土面の広がりといった付属施設は確認されなかった。

層位 帯曲輪の底面直上と堆積層の中位付近に褐色土ないし暗褐色土の腐植土層が堆積する(第23図k-1第5・11層、m-n5・9層)。この腐食土層は旧表土と考えられ、その2層間は岩盤破砕礫主体の砂礫層が堆積する(第23図k-16~11層、m-n6~8層)。

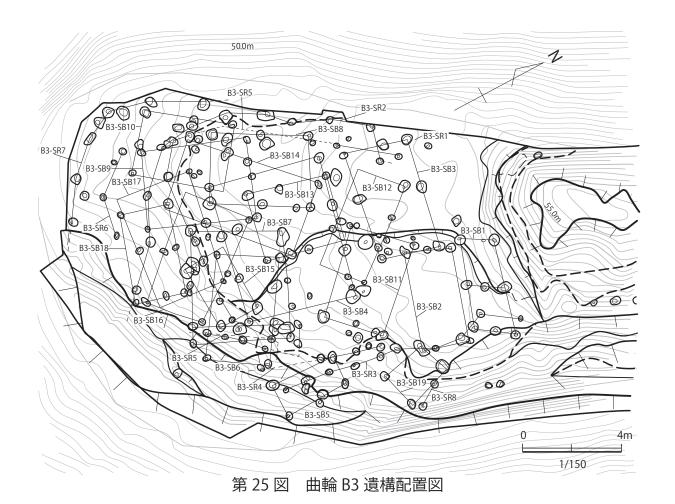
この砂礫層の上面は曲輪 B3 の遺構面に連なり、掘立柱建物跡 (B3-SB5 \sim 7 など) の柱穴も検出された。砂礫層は曲輪 B3 の拡張によって埋戻された盛土であったと判断される。

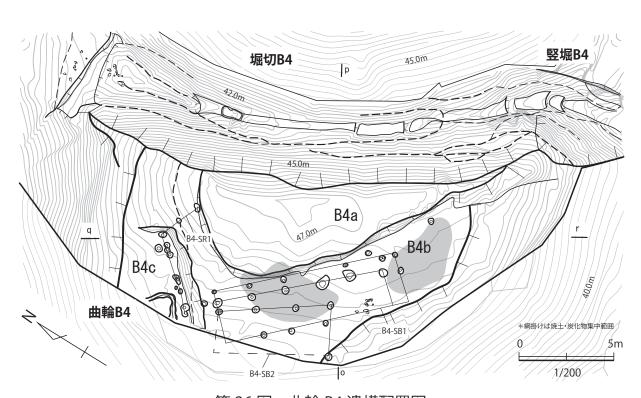




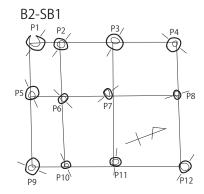


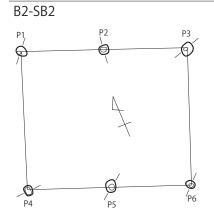
第 24 図 曲輪 B1 ~ B3 遺構配置図

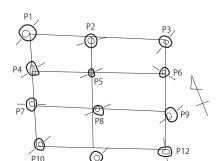


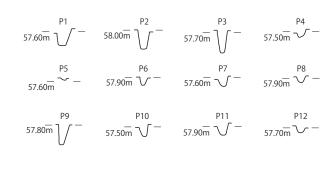


第 26 図 曲輪 B4 遺構配置図



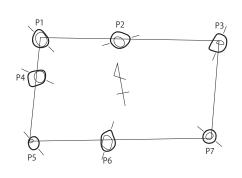


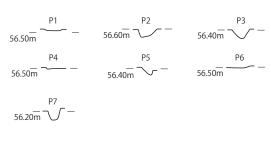




B3 - SB3

B2 - SB4

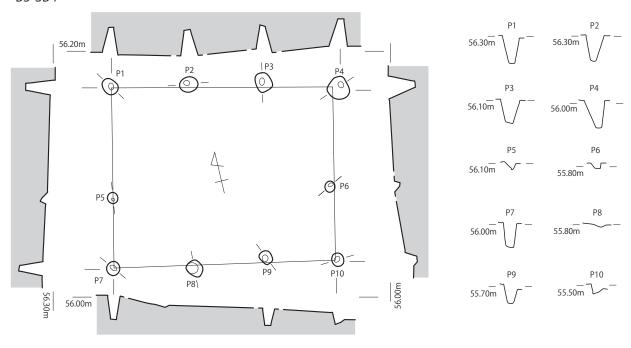




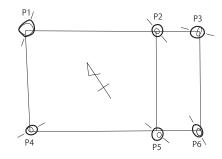


第27図 掘立柱建物跡実測図(4)

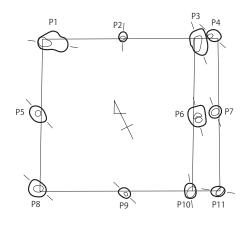
B3-SB4

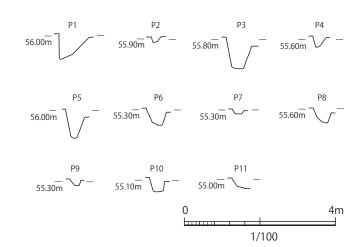


B3-SB6

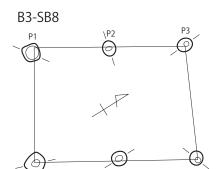


B3-SB7

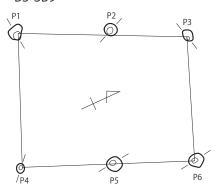




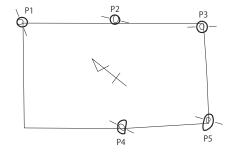
第28図 掘立柱建物跡実測図(5)



B3-SB9

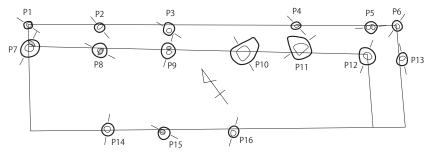


B3-SB15



$$_{56.10\overline{m}}^{P1}$$
 $\stackrel{P2}{\smile}$ - $_{55.70\overline{m}}^{P2}$ $\stackrel{P2}{\smile}$ - $_{55.20\overline{m}}^{P3}$ $\stackrel{P3}{\smile}$ -

B4-SB1



第29図 掘立柱建物跡実測図(6)

遺物 帯曲輪 B3b の第 5 層 (旧表土) の上面において青磁碗 (112)、土師器杯 (587·615) が出土した (第23 図 m-n)。112 は上田 C 2 類に相当し、14 世紀後半~15 世紀前半の年代に比定される。

曲輪の拡張時期 帯曲輪 B3 が埋め戻され曲輪 B3 が拡張されたのは、遺物の年代から 15 世紀前 半以降となる。なお、帯曲輪と建物主軸が揃う掘立 柱建物跡は、⑤群のみであり、帯曲輪との同時性を 想定できる。 (田中達)

曲輪 B4 (第 22 · 23 · 26 · 29 図)

位置と構造 堀切 B4 の西側に位置する。曲輪 B4 と曲輪 B3 との比高差は 12 mと高低差が著しく、 造成時はかなりの土木量であったと推察される。

曲輪 B4 は調査時点では平面半月形の平坦地であったが、その西側下面から 2 段の平坦面が検出された。これらの平坦面を高所から曲輪 B4a・B4b・B4c と区分する。

曲輪 B4a は堀切 B4 の西側に面し、長さ 16.2 m、最大幅 9.2 mの平面直角三角形状である。フラットな平坦面ではなく、丸く盛り上がる。

曲輪 B4b は曲輪 B4a を取り巻くように南北 18.8 m、東西 9.2 mに渡り平坦面が西側へと広がる。

曲輪 B4c は曲輪 B4 北西部の最下段にある狭隘な平坦面である。これは、南西部に連続する曲輪へと接続する施設の可能性があるが、詳細は不明である。 **層位** 曲輪の底面は基本的に岩盤を削り出して形成する。 曲輪 B4b では、中央付近から西側では鬼界アカホヤ火山灰層(第 10 層)と腐食土層(第 9 層)の上に明褐色土(第 7 層)を整地層として平坦面を形成する(第 23 図 o-p)。

さらに、曲輪 B4b、B4c では底面直上に岩盤破砕礫などを密に含む層(第23図o-p第3~6層、qr第3~17層)が厚く堆積していた。堆積土は曲輪B4b•c全体を覆い、曲輪B4aの高さに揃えられて平坦面となす。この堆積土は盛土と考えられる。

岩盤破砕礫主体の盛土によって曲輪 B4b・c が埋め戻されて曲輪 B4a と一体化した平坦面に造成される時期は、後述する AMS 年代測定から少なくとも 14世紀後半よりも後出すると推定される。

遺構 曲輪 B4b・B4c の底面で柱穴が 37 基検出され、掘立柱建物跡 2 棟、柵列 1 条が復元された。

しかし、曲輪 B4b・B4c に盛土した後の平坦面からは、柱穴等の遺構は検出されなかった。

据立柱建物跡 SB1 は東・南側に庇を持つ建物である。その南東隅の柱穴付近では土師器皿 (599) に伴って銭貨 12 枚が数枚ずつ重なった状態 (839~842)、で出土した。銭貨の種類は、開元・元祐・政和・至元通寶等である。SB2 と SB1 は切り合い関係であるが、柱間隔や主軸方位の相異から建て替えとみられる。SB1・2 の身舎内 (第7層上面)で、炭化物や焼土の広がりが確認された。炭化物の AMS 年代測定の結果では、AD1290~1370 の年代が得られている。SB2 の柱穴内より土師器皿 (597) が出土している。

柵列 SR1 は曲輪 B4 北西部に位置し、南西から 北東へ伸びる。北端から東へ屈曲し B4a 裾部へと 至るが、曲輪間移動のための動線を塞ぐ位置に相当 するため門跡の可能性も考えられる。SR1 の柱穴内 より土師器皿 (583) が出土している。

遺物 上記以外にも、曲輪面を覆う表土層(第2層)から銭貨(810)、曲輪 B4b·c を埋める盛土層(第4層)から景徳鎮窯白磁小坏(67)や青磁皿(165)等が出土した。曲輪の盛土層(第23図o-p第3~6層、q-r第3~17層)の出土遺物として、福建広東系白磁皿(68)、景徳鎮窯青花碗、土師器皿(570·598)、鉄製鎹(900)や刀子(904)、団塊6個等がある。

(小船井、田中達)

第4節 曲輪C群

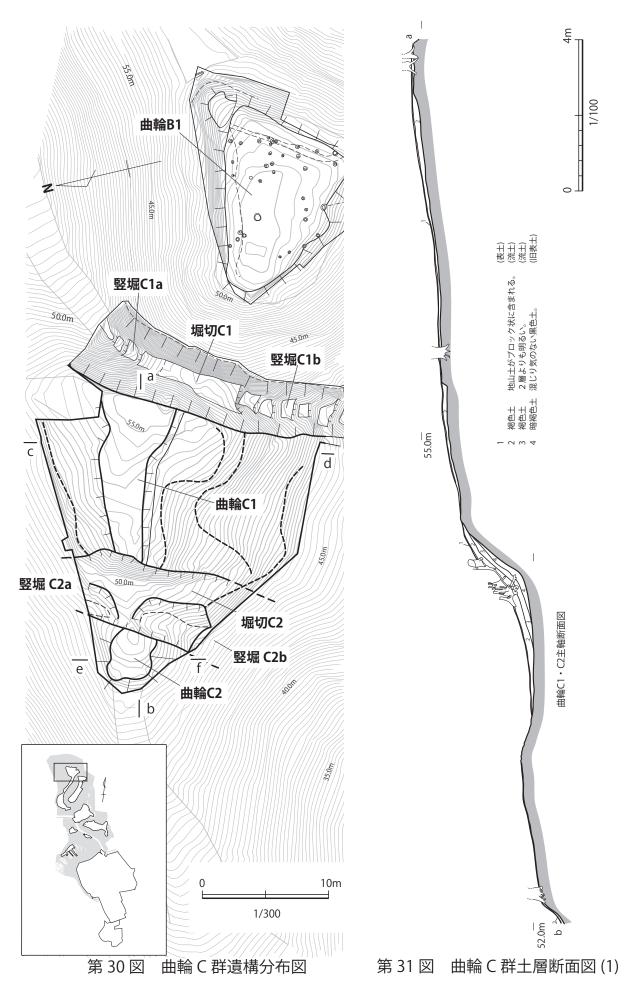
概要 曲輪 C 群は、曲輪 B1 から西に延びる尾根上に位置する。曲輪 2 箇所、堀切 2 条、竪堀 4 条が検出された。曲輪面は最高所より曲輪 C1 ~ C2 とした。曲輪 C 群の曲輪面は、岩盤を削り出して平坦面とするが、他の曲輪に比べて起伏に富み、造作は雑である。また、掘立柱建物跡や柵列の存在は確認されず、遺物の出土も僅少であった点は、他の曲輪群とは異なる様相である。

なお、堀切 C1、竪堀 C1a、C1b については「第 5 節堀群」にて報告を行う。

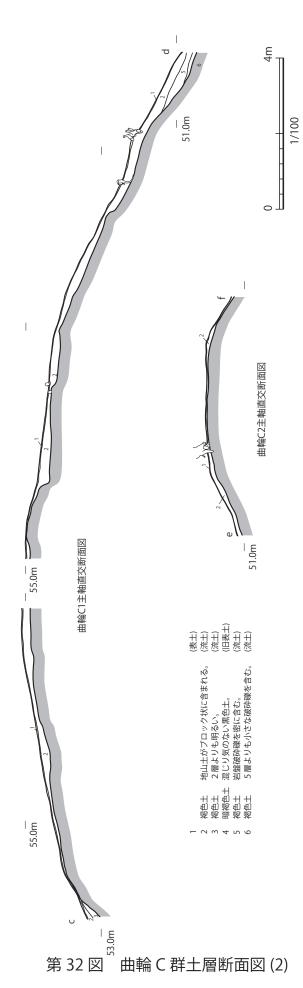
曲輪 **C1** (第30·31·32図)

位置と構造 曲輪 C1 は、堀切 C1 西側に位置し、 頂部の標高は約 55 mで、曲輪の全長は約 13 m、 最大幅約 5 mを測る。曲輪 B1 との比高差は約 7 m で落差があり、造成にあたっては相当な土木量であ ったと推察される。

北側斜面は谷に面した急斜面で、南側斜面は平坦



- 41 -



面際より緩やかに傾斜して中腹付近より急斜面となる。これら北側・南側の急斜面は、一見切岸状を呈するが、斜面の崩落によるものかもしれない。

なお、柱穴等は検出されず、遺物もなかった。

層位 表土および流入土が全体に薄く平坦面直上 に堆積し、斜面部分も流土堆積のみで、盛土等は確 認されなかった (第31図 a-b、第32図 c-d)。

曲輪 C2 (第30·31·32図)

位置と構造 堀切 C2 西側に位置し、標高約 52 m、 曲輪 C1 との比高差は 3 mである。

曲輪面の規模は東西約4m、南北約4mを測る。 曲輪にしては面積が狭く、柱穴や遺物は検出されな かった。曲輪面の南北は急斜面に囲まれる。曲輪の 西側は細尾根が続く地形となる。

層位 曲輪 C1 と同様で表土や流入土が薄く堆積 するのみである (第 31 図 a-b、第 32 図 e-f)。

堀切 C2 (第30·31図)

位置と構造 曲輪 C1、C2 を分断する堀切である。 曲輪 C2 側の肩部には竪堀 C2a・C2b が位置する。

堀切は調査の都合上、全長のうち約10m分のみを精査した。上端幅は約6.5m、底面幅は4mを測る。堀切の断面は浅い皿状で、曲輪C1側の壁面高は2mだが、曲輪C2側は0.3mである。立ち上がりの角度も曲輪C1側が急である。

堀切 C2 は曲輪 A 群にある薬研堀や、後述の堀群の箱堀(第5節参照)とは形状や深さが異なる。

層位 曲輪 C1 側からの流入土 (第2~4層) が堆積 していた (第31図 a-b)。

遺物 堆積土中より砥石 (1201) が出土している。

竪堀 C2a/C2b (第30図)

位置と構造 堀切 C2 の西側肩部に寄った位置にある 2 条の竪堀である。北側を竪堀 C2a、南側を竪堀 C2b とする。竪堀は、堀切 C2 の西側の底面をさらに掘り込む構造である。ただし、竪堀 C2 と堀切 C2 の収束部分の関係は明らかにしえていない。全長は、調査の都合上不明であるが、南北の斜面を等高線に直交する方向に延伸するようである。頂部の辺は、どちらも 1.4 mの長さを測る。なお、遺物は出土していない。

(児玉・田中達)

第5節 堀群

概要 曲輪 B1 ~ B3 と曲輪 B4・曲輪 C 群との間には、堀切・竪堀・横堀といった 6 箇所の堀が列状に連結して尾根筋や斜面部を南北に貫く(第22 図 竪堀 C1a、堀切 C1、竪堀 C1b、横堀、堀切 B4、竪堀 B4)。

竪堀 C1a・b は堀切 C1 の両端に、竪堀 B4 は堀切 B4 の南側に接続し、横堀は竪堀 C1b と堀切 B4 を連結させる構造である。

6箇所の堀は、場所ごとには異なる名称や機能を持つが、互いに連結して堀の集合体をなしているので、本節では「堀群」として報告する(第33図)。

竪堀 C1a (第22·33·34図)

位置と構造 竪堀 C1a は曲輪 C1 北東側にあり、 南端は堀切 C1 に接続する。調査範囲は接続部分のみ に限られた。岩盤を掘削して形成される竪堀である。

竪堀の規模は、全長約4m以上、上幅約6m、下幅1.5mで、壁面の角度は40°で開く箱薬研堀状の竪堀である。底面には、少なくとも2段以上のステップがある。堀切C1方面へ出入り可能にする階段構造であり、堀切C1と一体化した構造でもある。

層位 曲輪 B1 側からの流入土が堆積していた。 第3層部壁面は段状で、第3層下面は水平となる。

このことから、第4層堆積後に箱薬研状に再掘削された可能性を指摘できる(第34図a-b)。

竪堀 C1b (第22·33·34図)

位置と構造 竪堀 C1b は堀切 C1 の南側に位置し、 南端は横堀に接続する箱堀状の空堀である。全長は 23 m、上幅約 4 m、下幅 2 m、曲輪 C1 側の深さは 2 mを測る。東側肩部の検出は、斜面上の堆積土が 崩落する危険性があるため部分的に留めた。

竪堀の底面には、8段のステップの階段がある。 竪堀 C1b の横堀側からの仰角は約50°で、かなり の急傾斜なので階段が設けられたのであろう。

竪堀 C1b は、堀切 C1 と一体化して北側曲輪群 や横堀方向からの往来が可能となる構造である。

竪堀の断面形は逆台形で、北側堀底は狭く、南側堀底は広い。西側は岩盤を削り残した土塁となる(第34図e-f)。

層位 東側斜面からの流入土の堆積が主で、第6 層では岩盤破砕礫を多く含む (第34図g-h)。

遺物 永楽/宣徳通寶の銭貨(818-820)等がある。

堀切 C1 (第22·30·33·34図)

位置と構造 曲輪 C1 の東側に位置する。南北端は竪堀 C1a、C1b に接続する。全長約8 m、上幅約5 m、下幅 1.5 m、曲輪 C1 側の深さは 1.25 mを測る。

断面形は、岩盤面を掘り込んだ逆台形で、壁面の 立ち上がりの角度は50°の箱堀状である。

層位 自然堆積層である (第34図 c-d、e-f)。 遺物 堆積土中より備前焼甕片が出土した。

横堀 (第22•33~35図)

位置と構造 堀群の中央部に位置し、曲輪 B2 の 西側斜面裾を横断する。横堀両端は、竪堀 C1b の 最下段のステップと堀切 B4 の土橋状部分となる。

規模は、全長約 $30 \, \text{m}$ 、上幅は約 $3 \, \text{m}$ 、下幅は $1 \, \text{m}$ m弱である。上幅は南に下ると $2 \, \text{m}$ 程度と狭くなる。断面形は逆台形である。横堀の中央付近では、西側の谷部に向けて緩くカーブする(第 $33 \, \text{図}$ i-j 付近)。この箇所は谷部側への分岐点であろう。深さは $1 \, \text{m}$ と浅めである。この箇所から、竪堀 C1b に向けた仰角は $40^{\circ}\sim45^{\circ}$ で、堀底は北進するにつれ急傾斜となる。

横堀の最深部は、竪堀状の方形掘込み部となり(第33図k-l付近)、堀底は一旦遮断される。方形掘込み部の東辺は長さ2.5mで幅2mの平坦面がつく。

層位 基本的には3cm未満の破砕礫と黄褐色砂質土が互層状に堆積していた。第28·29図の上面を結ぶラインは逆台形状を呈するので再掘削されたものと考えられる(第34図i-j)。

横堀肩部は、主に岩盤掘削で形成されるが、谷部 頂部に面する横堀西側肩部は盛土で形成される(第 34 図 i-j)。旧表土(第 43 層)上に斜め方向に盛土(第 33~42 層)して、立ち上がりが緩やかな壁面とする。 遺物 青磁碗(109)・盤(190)・香炉(195)、景徳鎮 ・漳州窯青花(241・246・252・296)、褐釉陶器壺(329)、 備前焼擂鉢(351・369・380)・甕(426)、瀬戸・美濃焼 四耳壺(476)、土師器坏皿(561・574~576・591・593)、 土師質擂鉢(653)等が出土した。

下層の出土遺物は第 29 ~ 32 層出土の備前焼擂鉢 (351) をはじめ 14 世紀後半~ 15 世紀前半の年代を示すものが多い。中層 (第 28・29 層よりも上位)は 241 や 251 のように 16 世紀中~後半の遺物が多く出土した。

堀切 B4 (第22·33·35図)

位置と構造 曲輪 B4 の東側にある。全長 25 m、 最大幅 4 m、深さは曲輪 B4 側で 2.75 mを測る。

横断面形はV字形で、壁面の立ち上がりの角度は35°の薬研堀である。南端部付近は底面が広くなる。 縦断面形は、堀切中央付近が最高所の下弦形である。

堀切の北端は、地山(岩盤)を土橋状に掘り残す。 この土橋南側では、堀底が平面撥形に開口した空間 となる。降雨による貯水が可能な構造である。この 部分では地輪が1点出土している(第54表)。

層位 基本的には流入土による自然堆積層である。 黄褐〜褐色の上層 (第2~7層) は砂質土に 0.5 ~3 cm 程度の破砕礫が多く混じる。中層 (第8~10層) は炭化物を局所的に含む。暗褐色の下層 (第11~14層) は微細な破砕礫が主体である。

遺物 邵武四都窯白磁皿 (24)、福建・広東窯系白磁皿 (74)、青磁碗・皿 (84・103・116・157・168)、景徳鎮窯青花碗 (213・216)、褐釉陶器四耳壺 (314)、瓦 (695) 等が出土した。なお、整理作業における注記ミスで竪堀 B4 出土遺物と混在してしまった。

曲輪 B4a との関係 曲輪 B4a と堀切 B4 の位置 関係は、曲輪 A1 と堀切 A1 の関係に類似し、その 曲輪 B4a の縦横断面形は丸く盛り上がっていた。

曲輪 B4a は本来、岩盤削り出し土塁であったが、 曲輪 B4b・c を埋め戻して新たな平坦面が造成される 際に削平されたものと考えられる (第 26・23 図 o-p)。

竪堀 B4 (第22·33·35図)

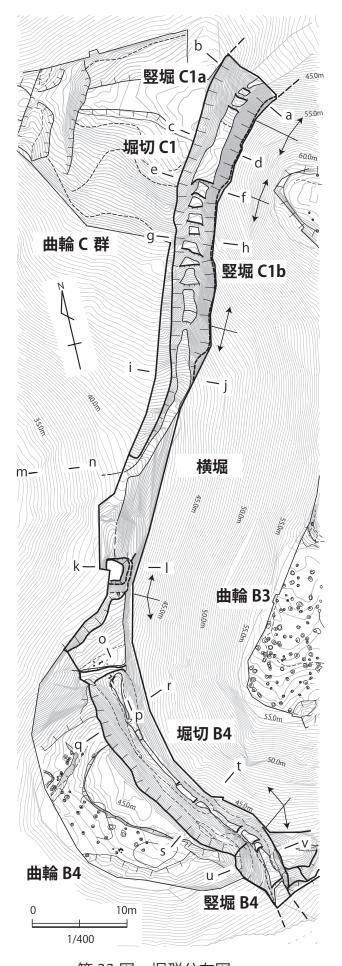
位置と構造 堀切 B4 の南側に接続する。現存長は8m、最大幅3m、深さ 1.5 mである。断面は逆台形で壁面立ち上がりの角度は 35°の箱堀を呈す。南端に向けては、次第に掘り込みが浅くなる。

堀底は、岩盤を掘削したやや幅広の溝状で、堀切 B4 との接続部分は階段状となる。

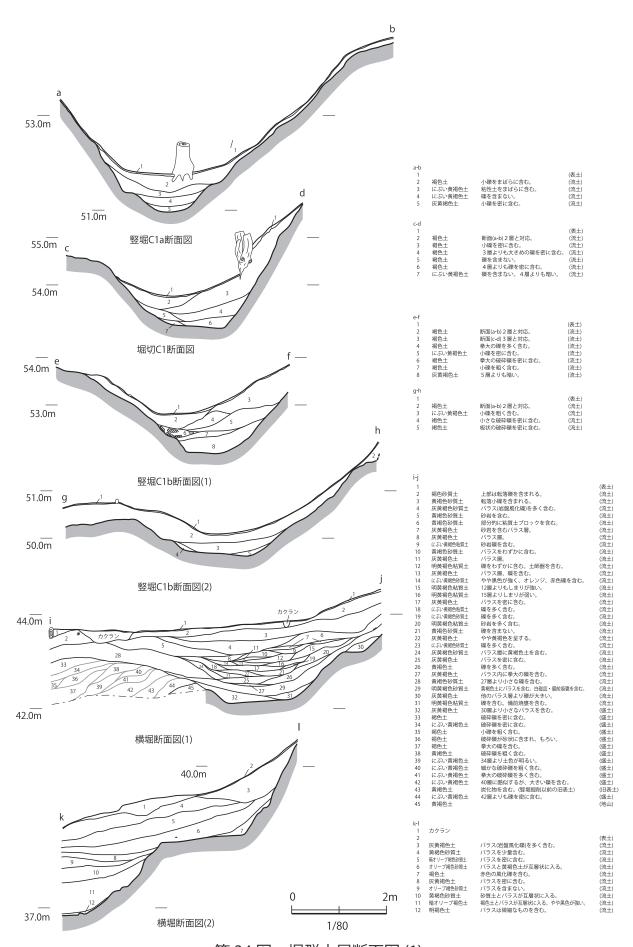
層位 竪堀北側は堀切 B4 と同様の堆積状況で、第3・4層上面の東側壁面は段状となる。このため 竪堀の北側付近は、堀切 B4 と同様に箱堀状に再掘 削された可能性が考えられる (第35 図 u-v)。

遺物 遺物への注記ミスにより、堀切 B4 出土分と混在してしまっている。

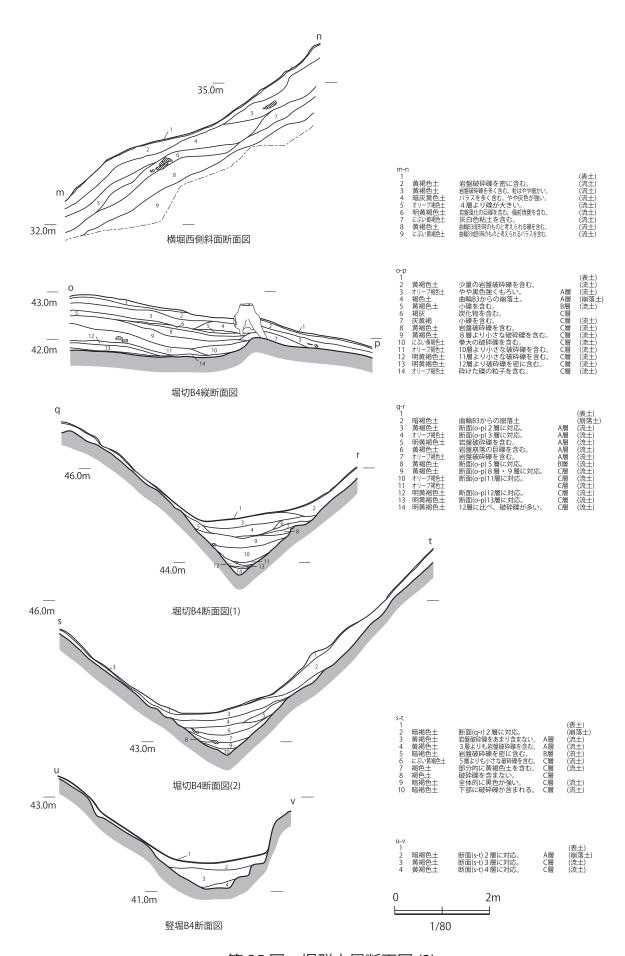
(小船井・田中達)



第 33 図 堀群分布図



第34図 堀群土層断面図(1)



第35図 堀群土層断面図(2)

第6節 水の手曲輪 (第36~60図)

1 調査の概要

曲輪の位置と遺構 水の手曲輪は、主郭部へと大きく入り込む谷地形の最深部に位置し、三方を曲輪 A群・主郭部・曲輪 B群に囲まれる。水の手曲輪と主郭部最高点との比高差は約32 mで、西側の沖積地面とは約30 m、曲輪 A群・B群とではそれぞれ約10 m、22 mを測る(第4図)。

遺構は、石積遺構 (SS) 2 基・井戸跡 (SF) 1 基、 窪地状遺構 1 箇所、炉跡 3 箇所、溝状遺構 (SE) 3 条、 掘立柱建物跡 (SB) 20 棟、柵列 (SR) 16 条と切 岸 3 箇所である (第 37・42 図)。

なお、調査対象地のうち一部は今回の調査から外れている。詳細は巻末の「補記」を参照されたい。

調査時は梅雨と夏季の時期にあたり、降雨後は遺構の水没や断ち割り断面の土層から滲出する地下水の激しさに悩まされた。炎天下になると土は固結してコンクリート様となり、精査に苦労した。(堀口)遺構面の認識 調査の結果、表土下約2mから始まる自然堆積と上層の盛土の交互層が把握され、遺構の検出面(遺構面)が5面確認された(第36・37・42図)。

調査区東端に位置する井戸(SF1)は、井戸枠に付属する石敷部を伴う遺構であるが、この石敷部は層位を違えて2面検出された。さらに井戸に接続する溝状遺構(SE)は遺構面毎に3条検出された。

この井戸枠石積みには、石積み手法と使用石材の 差が読み取れる横方向目地が2箇所確認され、この 部分の標高は各遺構面と対応するので、都合2回の 嵩上げが行われたと判断される(第36·45 図)。

遺構面と遺構の関係 水の手曲輪で確認された5 面の遺構検出面のうち、最も古い検出面を第 I 期面 とし、最も新しい面を第 V 期面とした。また、遺構 に時期的な変遷のある場合は、「期」に区分した。

遺構面と遺構の関係は以下に整理されるが、遺構の番号は第V期面より順に割り振った。

各遺構面と検出された遺構との関係

第 I 期面··窪地状遺構(A 期)

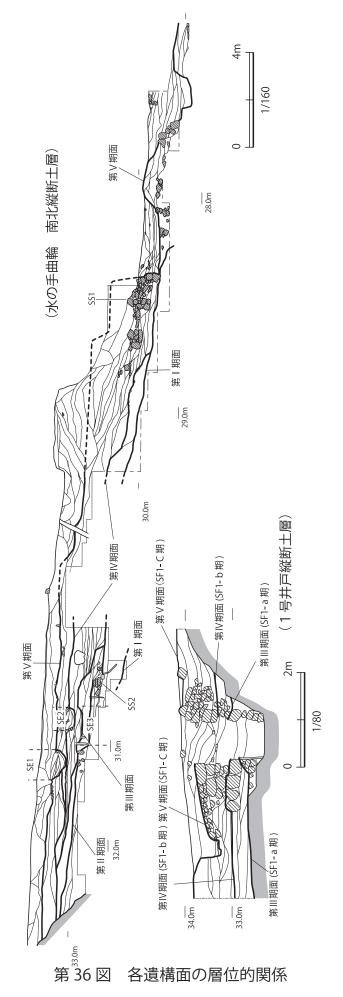
第II期面··窪地状遺構(B期)とSS2

第Ⅲ期面··窪地状遺構(C期)、SF1(a期)とSE3

第Ⅳ期面··SF1(b 期)と SE2

第V期面··SF1 (c期)、SS1 (i·ii期)、SE1、

SB1~15、SR1~17、切岸1~3、1~3号炉跡



2 第 | 期面 (第 37 ~ 39 図)

(1) 遺構面の状況

第 I 期面では、北から南に傾斜する平面形の歪な遺構が検出された。これを窪地状遺構とする。遺構の性格は谷部の最奥部にあたる自然遺構と考えられ、時期的な変遷から A~C 期に区分して報告する。

調査は期間や掘削深度の関係から、窪地状遺構の中央部は面的な精査、周辺はトレンチ掘削で進めた。 遺物の取り上げ 窪地状遺構の中心部分を平面的 に I・II・II区に分割し、層位的に上・中・下層の 三区分した上で遺物を取り上げた(第38図)。

(2) 窪地状遺構 (A期)

堆積層と遺構の画期 無遺物層である緑灰色の固結した砂質土層 (第39図第46層) より上層が窪地状遺構の堆積土層である。窪地状遺構中央部の底面は、標高31.0 m前後で、現地表下2mにあたる。

この遺構内堆積層の東側付近では、木杭(1006)付近から斜めに土層を切り込む、不(非)整合面が認められる(第39図)。この不整合面から続く第24層の直上に2号石積遺構(SS2)が構築される(第38図a-b)。この堆積層の不整合はSS2構築時に窪地状遺構内を再掘削(浚渫)した結果と考えられる。

窪地状遺構A期 (SS2 構築前)の堆積層を、SS2 構築面直下の層 (第38 図の第24 層=第39 図の第45 層=第44 図第87 層)から第39 図の木杭1006 や1010の打ち込み面 (第9・11 層)以下の層とする。I区やⅢ区東側の堆積層の中層付近は、砂質土と粘土層の交互層となる (第39 図第13~21 層)。また、炭化物層 (第22 層)や焼土層 (第23 層)も検出された。この第22 層出土炭化物の AMS 年代は、355 ± 20 年 BP (AD1450~1530、1550~1640 年)である (第Ⅶ章)。

なお、窪地状遺構B・C期はSS2構築後と区分する。 **A期の遺物** A期に伴う遺物は、I区の中・下層(第 39 図第9層より下)を中心にⅡ・Ⅲ区の最下層出土品 も含まれ、備前焼甕(410)等が出土した。また、窪地 状遺構の最下層(第45層)と対応するSF1地山層(第 45 図第37層)からは備前焼擂鉢(358)や青磁碗(108) 等が出土している。

木製品は、I区中層付近から漆器椀(937)・折敷(950) ・曲物の側板(963)・糸巻き(976)や木杭12本等が 出土した。動植物遺存体は、I区中・下層より動物骨の 管骨、桃や梅の種実が数点出土した。

3 第 || 期面 (第 37 ~ 40 図)

(1) 遺構面の状況

第Ⅲ期面で検出された遺構は、2号石積遺構 (SS2) とその前面に広がる窪地状遺構 (B期) である。第Ⅲ期面は、表土下約2m、第Ⅲ期面より約1m下面にある。調査に際しては、遺構面の西半部は、トレンチによる部分的掘り下げに留めた。

SS2 より北東側 (主郭側) の遺構面 (第37図) は、岩盤面から続く2段構成のテラス状の平坦面 (第44図の第65a~67層の上面)となり、SS2 に接続する。SS2 より南側は緩やかな傾斜面の谷地形となる。

第65~68層は盛土層と考えられ、SS2を軸線として曲輪面の北半分は埋め立てられて平坦面にされる。

第66層の段落ち部分では $0.2 \sim 0.5$ m程の川原石が密に入っている。これは土留めを意図していると思われる。

(2) 窪地状遺構 (B期)

構造 窪地状遺構の北縁に護岸壁として SS2 が構築され、その周辺に杭列が配される時期を B期とする。

窪地状遺構は、A期より埋没が進んで調査区の南半部に偏在する。その頂点付近は、テラス状の平坦面を一段有しており、それより南西側に向けて大きく直線的に広がる。底面はゆるやかな平坦面が続くが部分的にスリバチ状に深くなる(第37~39図)。 木杭列 木杭列は平面的には、窪地状遺構の最東端部分とテラス状平坦面の上端に3条検出された。

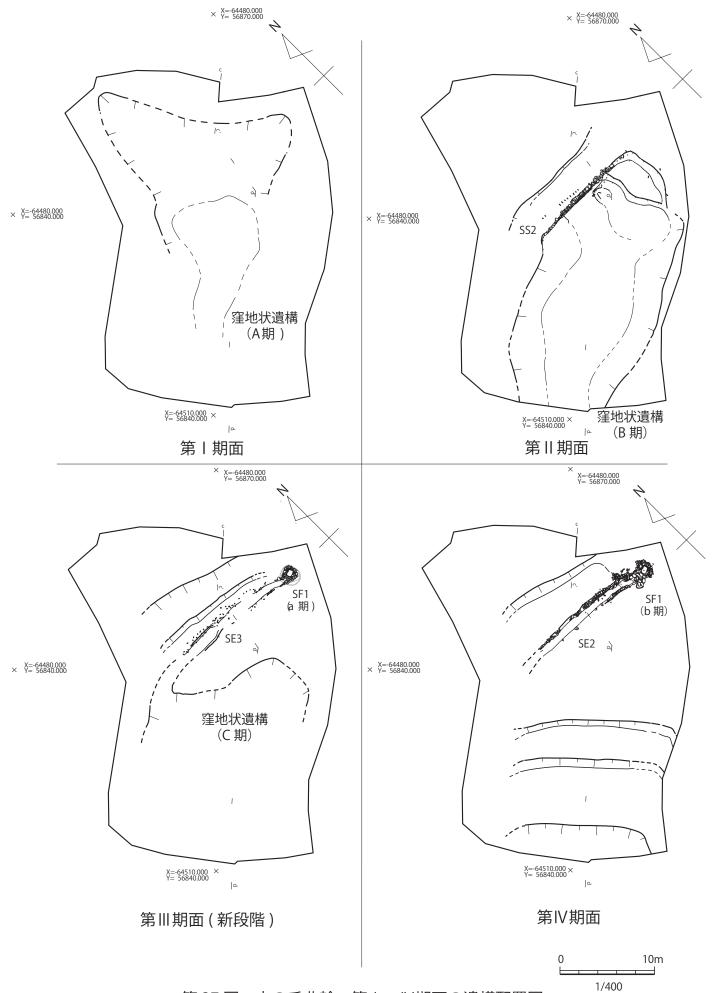
木杭は、層位的に第9~11層(第39図)及び第67層(第44図)の上層から打ち込まれる。

SS2 の北側背面にも 1 条認められる (第 38·39 図)。

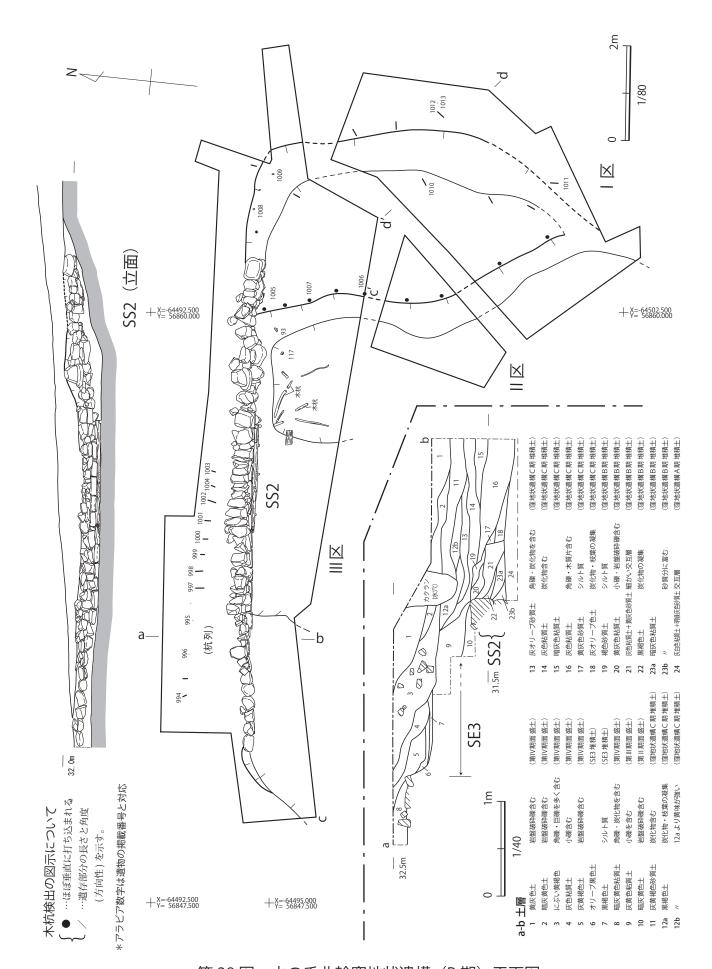
窪地状遺構を囲む木杭列と SS2 背面の木杭列は、平面的位置関係や層位的にもセット関係とみなされ、窪地状遺構の最東端(谷頭)を三角形に取り囲む。これら木杭間の距離は窪地状遺構側で約 0.5 ~ 0.8 m、SS2 側で 0.3 mと粗密がある。

木杭の残存(遺存)長は、平均して28.9cmである。残存部は土中遺存した部分なので、しっかりと打ち込まれていたようである。なお、先端部以外は特に加工は施されず、樹皮が付いたままの木杭がほとんどである。木杭の直径は平均して4.9cmと細く、城域内に自生する低木類の樹幹と変わらない。

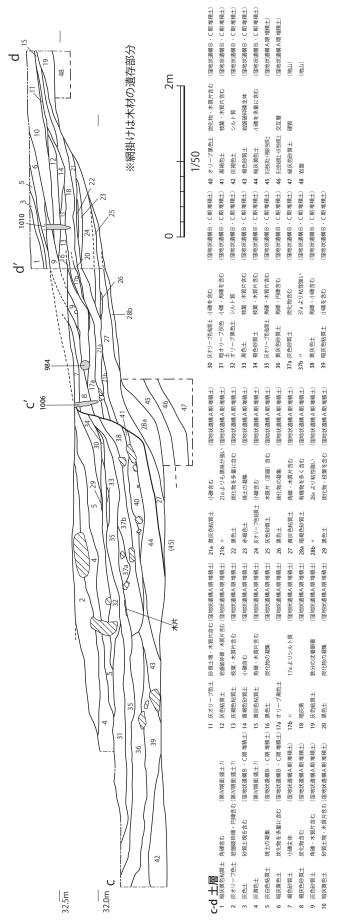
これらの木杭列は、防御的な意味の柵列と理解されるが、地盤の強化や土砂や枯葉などの流入を防ぐ維持管理の機能も担っていたと考えられる。



第37図 水の手曲輪 第Ⅰ~Ⅳ期面の遺構配置図



第38図 水の手曲輪窪地状遺構(B期)平面図



第39図 水の手曲輪 窪地状遺構土層断面図

(3) 2号石積遺構(SS2)

規**模と構造** SS2 は窪地状遺構の北縁辺に護岸壁 として位置する。全長 10.4 m、最大幅 0.75 mを測る。

SS2の軸線は、ほぼ東西方向を指向する。SS2の埋没後に構築される井戸跡 (SF1) や溝状遺構 (SE1 ~3)の方向性はSS2の軸線に並行しており、わずかに位置を違えるのみである。SS2の軸線は第Ⅲ期面以降、遺構構築の位置決定に大きく影響している。

石積み SS2 中央部分は地輪や火輪の部材を底石 (基底面) にして、その上に2段に0.2~0.5 m大の 川原石を積み上げる。一方、東西端部分は1段ないし2段の川原石を積み上げるが、小さい石の上に大きな石が積まれるなどバランス性はない。

中央部の石積みは平面的・立体的に直線的で面を 揃えた意図を感じるが、東西端部分は蛇行して孕み が生じる粗雑な工法である(第40図)。

胴木(横木)構造 SS2 中央付近の基底面には胴木(横木)構造が確認された。長さ約2.6 mに揃えられた三本の丸木を並べた上に石積みされる(第40図)。SS2 前面側の胴木(993)は他2本(991・992)と異なり、柱材の転用で重量感があり剛性も高い。

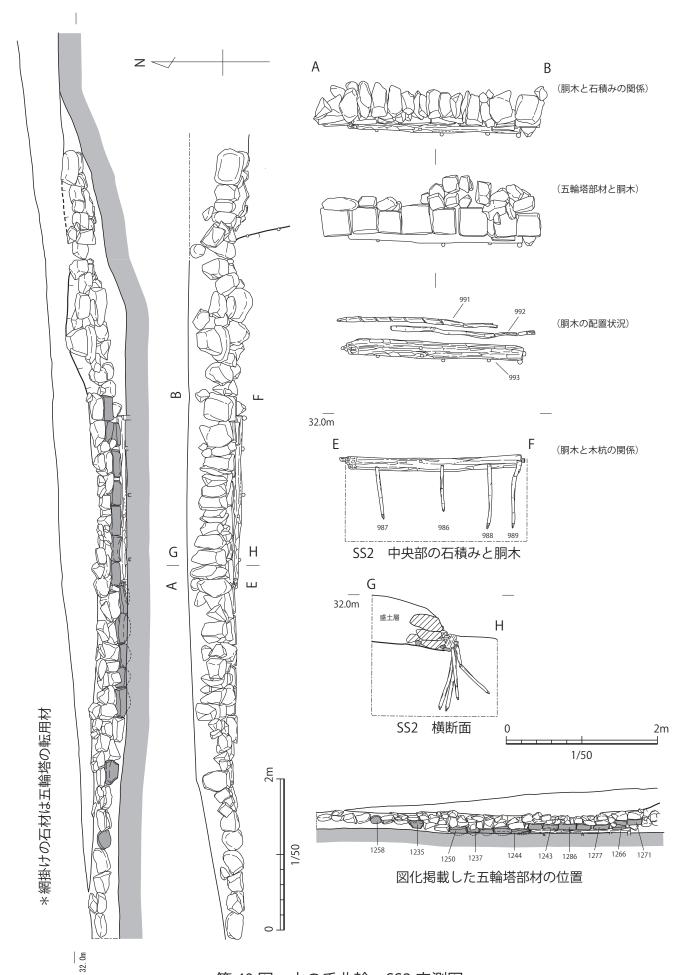
石積みの順序は、胴木の上には大きさの不揃いな 地輪5枚と、屋根部を平坦に削り取られた逆位の火 輪1枚が並べられた後に、細長い河原石を胴木に対 して縦位方向に揃えた2段の石積みとなる。

胴木(993)の前面には4本の木杭(986~989)が垂直方向に打ち込まれており、胴木全体が迫り出さないようストッパーの機能を果たす。木杭の端部は、胴木の中程付近の高さに揃えられている。

胴木構造の箇所は、SS2の中央部かつ谷地形の最深部である。SS2背面からの土圧や地下水圧による 石積みの崩壊や、石積み自体の不等沈下を防ぐ目的 で胴木構造が採用されたと考えられる。

五輪塔の転用 胴木構造の西側部分にも火輪 5 枚を逆位にして基底面とする。屋根部分は地山面に沈みこんでいる。このように、五輪塔の部材が石積みの基底石に転用されるのは SS2 の中央部のみである。石積部の背面 控え積みの石(第 40 図)と盛土(第 38 図第 10 層、第 44 図第 67・68 層)が確認された。盛土の上面は第Ⅱ期面のテラス面となる。

第69層(第44図)は黒褐色土で、有機物が凝集する層である。原形は留めていないが、横木との関係から敷葉がなされていた可能性がある。



第40図 水の手曲輪 SS2実測図

炭化物層と焼土層 木杭 (1010) の上面には、焼土層 (第5層) と炭化物の凝集層 (第6層) が堆積する (第39図)。この第6層出土炭化物の AMS 年代は305±20年 BP (AD1490~1650年、AD1520~1580年)の測定結果が出た (第Ⅵ章)。この第6層より上位の堆積層は、間層 (第3層)を挟んで第Ⅳ期面の盛土層 (第1・2・4層) となる。第Ⅲ期面ないし第Ⅳ期面の造成時には火災などにより杭列としての機能を終えていたようである。

(4) 窪地状遺構と SS2 の出土遺物

遺物とその年代 窪地状遺構(B期)に伴う堆積層はⅡ・Ⅲ区の下層(SS2側)にあたる。Ⅱ区下層出土の備前焼甕(418)は15世紀中頃~16世紀初頭、鳶口壺(456)は16世紀初頭~17世紀初頭となる。

木製品も多く出土した。動植物の遺存体は、SS2 前面の床面より巻貝やマツカサ、Ⅱ区中・下層で巻 貝と二枚貝、Ⅲ・Ⅲ区の下層で管骨、Ⅲ区中・下層 で肩甲骨や巻貝と二枚貝がある。また、Ⅲ・Ⅲ区を 通じて茅や笹竹の根や広葉樹の枝葉等も出土した。

SS2 前面の床面出土の青磁碗(93)は 15 世紀後半~16 世紀前半の年代観を示す。

SS2 本体の遺物は胴木 (991 ~ 993) と木杭 (986 ~ 989) 及び五輪塔の部材がある。991 は蔦の絡まった跡が明瞭に残る木杭の転用である。長さは2.15 mと長い。993 は柱材の転用である。ホゾの反対側の小口部分は既に腐朽した状態で転用されたようである。986 ~ 989の長さは0.7~1 mを測る。986~989・992・993 の法量から、1~2 mクラスの木杭の存在が伺える。

なお、五輪塔部材の詳細は第VI章を参照されたい。 **SS2の構築時期** 窪地状遺構(B期)を含めた SS2の構築時期や木杭列の時期は、青磁碗(93)や 備前焼甕(418)・鳶口壺(456)の年代観が検討材 料となるが、遺構内混入の時期も考慮する必要がある。

現時点においては、出土遺物の年代的下限である 16世紀初頭段階の時期を充てておきたい。

窪地状遺構(A期)の時期 前項にて窪地状遺構 (A期)の次段階であるB期の始まりは、16世紀初頭段階と導かれた。前述のようにA期に伴う出土遺物の年代観は概ね14世紀前半~15世紀前半代を示し、第22層(第39図)出土炭化物のAMS年代は第6層よりも約50年程古い測定結果が得られている。

このことから、窪地状遺構(A期)の存続幅は 14世紀代~15世紀後半代とみなされる。

4 第Ⅲ期面 (第37·41 図)

(1) 遺構面の状況

この遺構面は、表土下約 1.4 m、第Ⅱ期面より約 0.6 m上の位置にある。窪地状遺構(C~D期)、1 号井戸跡(SF1)、3 号溝状遺構(SE3)が検出されたが、掘立柱建物跡等は確認されない。第Ⅲ期面の南半部についてはトレンチによる精査を進めた(第 37 図)。遺構面の構造 SS2 上位面には、砂礫交じりの灰色・黄灰色の粘質土層(第 38 図第 9層、第 44 図第 59~61 層)が厚く堆積し、SE3 の構築面となる。

SE3 の北側は幅 0.8 mのテラス面が接続し、さら に北側の主郭部方向に向けて緩い上り勾配の傾斜面 となる(第 44 図第 58 層上面)。

窪地状遺構の護岸 SE3の構築面は、窪地状遺構側では第70層上面(SS2中央部分)へと続く。この第70層は灰色粘質土で、それより SS2側の第71・72層といった粘質土と砂質土が縞状に堆積する層とは異なる。第70層より上位は水平堆積、窪地状遺構側(南側)はレンズ状堆積をなしていた。

さらに、第59~61・70層の縦断面形は階段状を呈することから、窪地状遺構の北岸(縁)は盛土造成(生活面の嵩上げ)に伴ってSS2から階段状の護岸に改修されたものと判断される。なお、SS2の南側部分は自然堆積土を段状に削り取って(第38図第19~21層)、新たな護岸面に作り変えられる。

つまり、第III期面は SS2 の埋没時点(第 38 図第 19 ~ 21 層、第 44 図第 71・72 層)において、第II 期面のテラス部(SS2 上面部分)を埋め立てて平坦面を広げ、窪地状遺構の北岸を階段状の護岸(窪地状遺構 C期)とする生活面である。護岸面の平面的な検出は、部分的に留まざるをえなかった(第 37 図)。

(2) 窪地状遺構(C期)

土層堆積と木杭列 SS2 から階段状の護岸面に改修された以降は、基本的に砂質土と粘質土の交互堆積による自然埋没が進む。つまり、滞水と流水作用を繰り返しながら埋没したと考えられる(第39図第11~18層及び第44図第75~81・83~86層)。

これらの堆積土はヘドロ化し、卵の腐ったような激しい臭いがあり、枝葉の凝集して堆積する層もあった。また、窪地状遺構 C 期に新たに打ち込まれた木杭列は確認されなかった。B 期に伴う木杭(第39回の1010)より上面の土層堆積状況から、窪地状遺構 C 期には木杭列の役割は終えていたと考えられる。

また、木杭の上に堆積する炭化物・焼土層の存在 は窪地状遺構B期からC期のある時点で、周辺で火 災や火を用いた何らかの作業がなされたことを示す。

C期の遺物 C期の堆積土層はⅡ・Ⅲ区の下層(階段状の護岸面より南側) とⅡ・Ⅲ区の中・上層に対応する。遺物は後者の土層から出土した。これらの出土遺物は、改修後に混入したものと捉えられる。

遺物は、福建広東窯系白磁碗や邵武四都窯系白磁皿、漳州窯青花盤(297)、景徳鎮系白磁、備前焼擂鉢(391)・甕、陶磁器類や土錘(798)、木製品は曲物の側板(971・972)等あり、木杭も16本出土した。391は16世紀中頃~17世紀初頭の年代が付与される。

動植物の遺存体は、II区上層で巻貝、III区上層で 二枚貝や桃・梅の種実等があり、広葉樹の枝葉、茅 ・竹類の茎や根が砂質土層に混入していた。

改修の時期 窪地状遺構 C 期、つまり窪地状遺構 の北岸が階段状の護岸面に改修される段階は、備前 焼擂鉢 (391) が窪地状遺構内に混入する時期より 以前であるので、16世紀前半頃と考えられる。

(3) 1号井戸跡(SF1- a 期、窪地状遺構 D 期) 位置と規模 曲輪面の東奥隅に位置し、後背面は 曲輪 A 群の裾部に接する。SF1 の井戸枠は 2 回の嵩 上げが確認された(第41 図)。構築時の井戸跡を a 期、 嵩上げ後を b・c 期として区分し、本項では a 期(第 Ⅲ期面)の調査結果を記載する。

SF1-a 期の井戸枠は、平面方形で一辺 1.5 mを測る。井戸上端の高さは標高 33.0 m、主軸方向は N-60°-Wで、上端からの深さは 0.75 mを測る。井戸枠の西側は天端より 0.3 m低くなって開けた空間となり、SE3 と接続する。この空間は大人一人が入れるスペースである。井戸枠との接続部分の SE3両側壁は、石積みによる護岸となる。

井戸掘り方 井戸掘り方の平面形は歪な隅丸方形で、長軸 2.2 m・短軸 1.9 mを測る (第 41 図)。断面形は底広の逆台形状を基調とする (第 45 図)。地山面 (第 37 層) から掘り込まれ、第 38 層の上面を底面としている。西側の掘り込みは浅く、さらに段状に掘削されてテラス面となる(第 45 図第 36 層部分)。井戸枠の構築 井戸枠は木枠と石積みが併用される。木枠 (983) はクスノキの樹幹を刳り抜いたもので、外径・高さとも約 55cm、厚みは7cmである。上下端はやや内湾する。腐朽により壁面の半周分が

欠損しているが、後述のように石積みとの関係から そのままの状態で井戸枠に使われたと判断される。

木枠の壁面で井戸枠とする部分(西~南側)と井戸掘り方との間隙は、拳大や人頭大の礫や砂利、土でつき固めて埋め戻される(第45図第36·72層)。この第72層の南側に広がる窪みは、第70·71層によって水平に埋め戻されている。

他方、東~北側部分は石積みによる壁面となる。 北側部分は、木枠と井戸掘り方の間に4段の石積み 後、木枠のわずかな壁面の上に拳大の塊石を押し込 むように積み上げて壁体に仕上げる(a-b第20層)。

井戸枠の石積み部分は、約5~30cm大の割石や川原石を5段ほど乱石積みする構造である。使用石材には地輪も転用される(第41図の網掛け部分)。

地表面(天端)付近は、SE3との接続部(西側)を除いて石積み一段の壁体となる。石は井戸内側へ突出させて積まれ、木枠の上端を押えつけている。その背後は栗石による控え積みがなされる。この控え積みは埋め戻されて曲輪面の高さに揃えられる(第45図第42・67~69層)。井戸枠の構築と連動して井戸跡周囲の曲輪面も盛土で嵩上げされている。

(4) 3号溝状遺構 (SE3、窪地状遺構 D期)

位置と規模 SF1 (a期) に接続する溝状遺構である。SS2 上面の盛土面(第 38 図第 9 層・第 44 図第 59・61 層)の上面から掘削される素掘りの溝である。 井戸枠から溢れ出す水や曲輪内の雨水を窪地状遺構側へ集・排水する機能を持つ。

規模は全長約 $13.3 \text{m} + \alpha$ 、上幅の最大幅は約 1.5 m、底面の幅は $0.6 \sim 1 \text{ m}$ 、深さ $0.2 \sim 0.3 \text{ m}$ を測る。断面形は皿状をなす。上幅は SF1 から約 9 m付近で両側壁が大きく広がる。また、SE3 内には木杭列が認められた。平均の残存長 30 cm、直径 3.4 cm である。なお、溝の肩部や壁面は崩落や第 \mathbb{N} 期面の盛土造成で大きく損なわれる箇所が多い。

窪地状遺構(C期)との関係 SE3 の終東部分は 窪地状遺構に接続する(第 37 図)。SE3 から窪地状 遺構へと排水される構造となる。だだし、掘削深度 の関係で平面的な把握に留めざるを得なかった。

この SE3 と接続する窪地状遺構の北岸は、窪地状 遺構 C 期のそれよりも南側に移動した位置となる。 層位的関係からは SE3・SF1 と窪地状遺構 C 期は同時 存在と捉えることも可能であるが、上記の平面的な 関係性から、SE3 及び SF1 (a期) は窪地状遺構 C 期に伴う階段状の護岸面の埋没がかなり進んだ段階 (D期) で掘削・構築されたものである (第44 図)。

つまり、SF1(a期)とSE3は、窪地状遺構C期より埋没が進行(D期)して排水機能を喪失したために、清浄な水の確保と地下水や雨水を排出する必要性から設けられた遺構とみなされる。

護岸施設 SE3の両側壁には、乱杭状に木杭が打たれていた。つまり SE3は、いわゆる「しがらみ」を護岸施設とする溝である。なお、SF1(a期)との接続部分のみは石組みの護岸となる。

護岸施設に伴う木杭は、打ち込まれた部分のみ 遺存していたが、その上端部には火を受けて焦げた ような痕跡を示す場合があった。特に、その痕跡は SF1付近に多い。さらに、SE3 西端部分では炭化し た木杭も認められた(写真図版 65 参照)。

堆積土の状況 SE3 内の堆積土は大きく 4 層である。第 38 図床面付近の第 $6 \sim 7$ 層が SE3 機能時の自然流入土であり、それより上位層(第 $3 \sim 5$ 層)は、後述する第IV期面造成時の盛土と判断される。

出土遺物 第 45 図第 35 層中より 15 世紀代の 備前焼甕片や桶 (946)・折敷等が出土している。

(5) 木杭列

SE3 北側壁の背面には、溝に平行して幾列にも木杭が打ち込まれて帯状となる。杭間距離は $0.3\sim0.5\,\mathrm{m}$ 、平均の残存長 $31.7\,\mathrm{cm}$ 、直径 $5.1\,\mathrm{cm}$ である。

これらの木杭列は、窪地状遺構A期やSS2に伴う木 杭列と同様に、防御的な意味の柵列と理解されると伴 に、打ち込むことで盛土を補強したとも考えられる。

(6) 第Ⅲ期面の変遷

前項で検討したように、窪地状遺構の北岸は16世紀前半頃に階段状の護岸面に改修される。その後、窪地状遺構の自然埋没が進んで、SF1やSE3が新たに構築される。窪地状遺構は、堆積土層から出土した遺物の年代から16世紀中頃にはかなり埋没が進んでいたようである。16世紀中頃かそれ以降の時期にSF1とSE3が構築された可能性が高い。このSF1構築時はその周辺で盛土による嵩上げも行われた。

従って、第Ⅲ期面は、古段階(曲輪面の造成と護 岸面の改修:窪地状遺構C期)と新段階(SF1·SE3の 構築と埋没が進んだ窪地状遺構D期)に細分される。

5 第Ⅳ期面 (第37·41·44 図)

(1) 遺構面の状況

遺構 第Ⅳ期面に伴う遺構は、1号井戸跡(SF1-b期)、2号溝状遺構(SE2)である。表土下約1 m、第Ⅲ期面より約0.4 m上にある。調査区の東半部は面的に、西半部はトレンチ主体の調査を進めた。

調査区の東隅にある SF1 からは SE2 が延びるが、 平面的には SE3 とほぼ変わらない。窪地状遺構は、 盛土により埋め立てられ、階段状の土塁となる。

なお、第 I ~Ⅲ期面と同じく掘立柱建物跡や柱穴 等は検出されなかった(第 37 図)。

(2) 遺構面の構造

遺構面の広がり 第IV期の遺構面は、第 44 図の 第 29・46・45・49・50・97・96 層の上面となる。テラ ス面と土塁で形成された遺構面である。

テラス面と盛土 SE3 の北側は2段に広がる。SE3 側のテラス面は幅4mを測り、SE2 の石積護岸壁(北側壁)を土留め擁壁に第45~48 層等が盛土されて形成される。SE2 構築と盛土造成は一体化している。

窪地状遺構は、自然堆積土(第75·76層)の上に礫を多く含む暗灰黄色系統の盛土で埋め戻される(第49·50·52層等)。この窪地状遺構を埋める際は、SE3の肩部を掘り崩して流しこむように埋め立てた状況も確認された(第38図第3~5層)。

土塁とその構造 土塁は、SE2 から遺構面の南半部に向けて緩やかな下り勾配の斜面が続くその南端部に構築される。(第37図)。

土塁の断面形状は階段状で、段落ち部分を境に 上段と下段の2段で構成される。(第44図第89・96・97層、第52図c-d第5・15・22の上面)。土塁上 段の天端の標高は31.7 mを測る。上段と下段の境目 は、標高31.0 m付近となる。下段は水平もしくは緩 やかな勾配の平坦面が3.4~3.6 m続き、さらに傾斜 変換して谷底に到る。この下段の平坦面上には角礫や 岩盤破砕礫を用いて貼石状とする(第44図第96層)。

土塁の基底面は硬質な緑灰色砂質土(第44図第89層・第52図c-d第22層)となるので、土塁構築時においては、軟弱な地盤を避けるために窪地状遺構内の堆積土を削平したものと考えられる。

土塁と SE2 と土塁との関係は、その接続部の検出に失敗したために不明だが、SE2 は土塁の北側と曲輪 B群の裾部の間を通る構造と想定される。

(3) 1号井戸跡 (SF1-b期)

規模 井戸上端は標高 33.4 mである。井戸枠と SE2 との接続部分は台形状の石敷部となる (第 41 図)。

井戸枠の構造 井戸枠は、a期のものに2~4段石を 積み足して 0.4 m程嵩上げされる。地輪も転用材に使 用される。この井戸枠をb期とする。井戸水の通常の汀 線は石敷部の上端で、オーバーフローはしない。

井戸枠の平面形はa期と同じ方形であるが、控え積み部分は扇形に開く(第 41 図)。石積み一段目はa期の天端面より 5 \sim 10cm ほど奥まった位置から積まれる。控え積みは第IV期面の盛土造成に連動して埋め戻される(第 45 図 α -b 第 α -b 18・19・61 α -63 層)。

石敷部の構造 規模は井戸側の辺 1.1 m、SE2 側の辺 1.75 m、井戸主軸方向の長さ1mを測る。0.5 m大の楕円 形の巨礫 (川原石) と1m大の角柱状の石が使用される。井戸や溝の石積みよりも大きい石が選択される。敷石は井戸と SE2 の間を充填するように3列にわたって並べられる。石敷面は平坦となるよう、石の上面は揃えられる。

出入り口部 石敷部の南側縁には平面扇形の浅い掘り込みあり、石敷部への出入り口部と考えられる。

井戸主軸に対して反対側にも石敷部から SE2 内へ引き込まれる平坦面(第 41 図の網掛けされた石周辺)があり、これも出入り口部となる。つまり、SF1(b期)には南北2方向から出入り口が設けられる。

出土遺物 備前焼甕・擂鉢(404)と景徳鎮窯系白 磁碗(第45図第18層出土)、石敷部の検出面から出 土した備前焼甕、瓦質土器擂鉢(410)等がある。

(4) 2号溝状遺構 (SE2)

位置と規模 SF1 (b期) に接続する溝状遺構である。 現存長は、台形状の石敷部との境から約12 m、上幅 1.2 m、下幅0.45 ~ 0.65 mを測る。SE2 南側壁部分は、 第V期面造成により大きく損なわれていた。

石積護岸 SE2の両側壁は石積みによる護岸壁となる。断面形は逆台形で、壁面の立ち上がりは約60°である。石積護岸は4段の石積みで、高さは約0.5 mである。使用石材は割石や川原石で、その色は白色・赤色・灰色・緑灰色・黒色と多彩であった。

石積技法 まず、長方形の石の長辺を溝側に向けて一段目(基底部)として据える。石の大きさは $0.3\sim0.5~\mathrm{m}\times0.1~\mathrm{m}$ と大ぶりである。 2段目以降は $0.2\sim0.3~\mathrm{m}\times0.1~\mathrm{m}$ 大と、小ぶりな石が使用される。

2・3段目は長辺を、4段目は短辺の平坦な側面を溝内部に向けて積まれるので石積み面は揃う。

石積みには煉瓦積み技法や重箱積み技法が混用され、五輪塔の地輪を立位に据える箇所もある。北側壁部分には拳大の栗石を集中的に充填した箇所があり、補修や地盤強化の一環等によるものであろう。

井戸との接続部 SF1 (b期)の石敷部とSE2とは、 石敷部の北縁にSE2の北側壁が、石敷部西縁中央部分 に南側壁が接続する関係となる。この石敷部とSE2北 側壁との接続部は、五輪塔の地輪を置いて幅狭の足掛 け面となり、石敷部への出入り口になる。

木杭の遺存 木杭は、井戸石敷部から 3.5 m西側の 北側壁側付近に2箇所 (第 41 図の 1088・1089)、その 反対側でも2箇所 (1090 と抜き穴)検出された。杭間 距離は幅 0.5 ~ 0.6 m、長さ 0.8 ~ 0.9 mで、SE2 の壁 際から 0.2m離れた位置で、床面から約 0.2 ~ 0.3 mの 深さに打ち込まれる。木杭の直径は 11cm と、他の木杭 と比べて2~3倍太い。杭の上端部は既に腐朽するが、 先端部は2方向ら面取りされて錐状となる。

なお、木杭は護岸壁側に倒れかかる形に図化されている。これは先端部まで掘り下げた結果、自重により倒れてしまったためである。検出当初は垂直に打ち込まれていたのを確認している(第 41 図)。

これら4本の木杭は、直径とSE2内で矩形に配置される状況から、溝を横断する橋脚と考えられる。

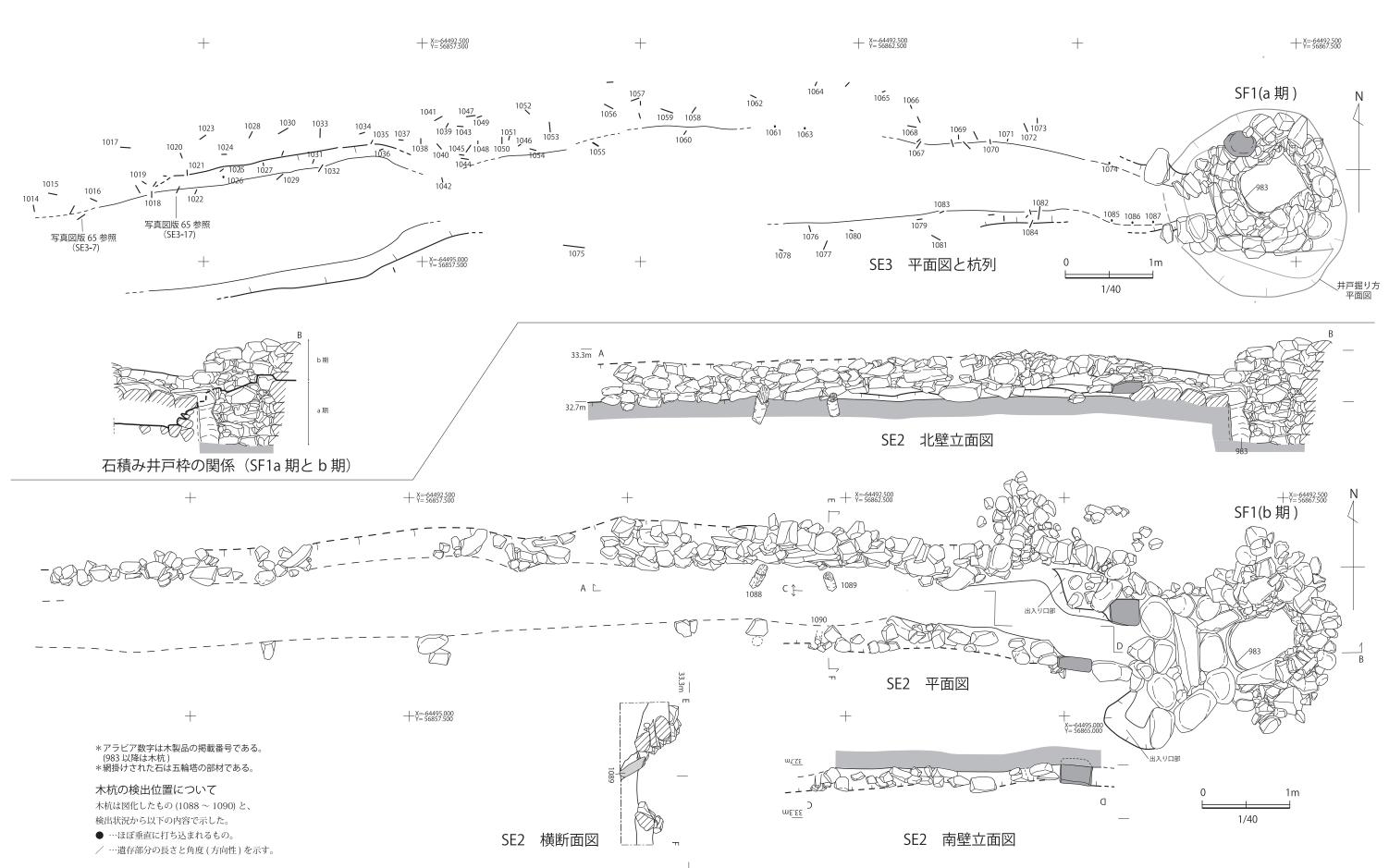
堆積土の状況 (第43 図) 堆積土は上・中層 (第 11・37・38 層) と下層 (第39・40 層) に区分される。下 層は黒褐色・灰褐色の砂質土主体で、上・中層は黄白 色・灰褐色粘質土で硬質であった。

調査時点では、この上・中層も SE2 内への自然堆積 土としていたが、硬質で堅緻なので第V期面造成に伴う 盛土と判断した。なお、上層出土の土師器皿(618)は SF1 第 27 層(第 45 図)と接合関係にある。

出土遺物 SE2内の堆積土層(下層)からは陶磁器類や木製品等が出土した。陶磁器や土器類は漳州窯系青花碗、景徳鎮窯系青花碗や皿、景徳鎮窯系白磁、褐釉陶器天目碗(300)・四耳壺(311)、備前焼甕・壺・擂鉢、土錘(794・795)等がある。遺物の年代は、14~16世紀代と幅がある。金属製品は銅製笄(860)がある。木製品は、紡織具の一つである桛(977)等がある。一方、SE2の床面付近では、獣(猪か?)の牙や管骨といった、動物遺存体が得られている。

(5) 第Ⅳ遺構面の時期

時期を推定する遺物に乏しいが、第Ⅲ期面と第V期面の間に位置する時期、すなわち16世紀後半と捉えておきたい。 (今塩屋)



第 41 図 水の手曲輪 SF1(a 期) -SE3、SF1(b 期)-SE2 実測図

6 第V期面 (第42~60図)

(1) 遺構面の状況

遺構 第V期面で検出された遺構は、掘立柱建物跡(SB)18棟、柵列(SR)16条、切岸3箇所、1号井戸跡(SF1:c期)、1号溝状遺構(SE1)、1号石積遺構(SS1:i/ii期)と炉跡3基である。

後世のゴミ穴や撹乱穴が数多く点在するために、 掘立柱建物跡や柵列の柱穴が失う箇所が多い。曲輪 A群の裾部付近も部分的に削平を受けていた。

遺構の位置関係 SF1 は曲輪面の東端に位置し、 この SF1 と曲輪面の南西側に位置する SS1 を SE1 が連結している。この SS1 は、谷地形の狭隘部分 を東西に塞ぐ位置にある。

曲輪面の西側縁には、切岸とそれに伴う柵列が曲輪 B 群の斜面裾に沿って巡るように構築される。その反対側(曲輪 A 群)では切岸や柵列等の施設は未検出であるが、SF1の背面にあたる曲輪面の東端部分では、平坦面が一段検出された。この平坦面は、SF1上面より0.5m高い箇所に位置し、幅1m弱の犬走り状となる。検出の状況から調査区外に向けて数段の平坦面が続くとみられる。

SE1 と SS1 の中間には、方形に巡るテラス面が位置する。幅 1m の平坦面を介して 0.7m と 0.3m の段差がつく (第 44 図 18・19 層下面)。

掘立柱建物跡は、SE1と切岸 1・2 および SE1と SS1 で囲まれた空間に集中して建てられる。(堀口)

(2)遺構面の構造

盛土の状況 第V期面は、北側から(第44図) 第26·25·34·33·90 層上面を結ぶ遺構面である。 第IV期面までと比して広大な造成面となる。

遺構面の盛土は青灰色や灰色の粘質土や岩盤破砕 礫混じりの褐色粘質土を主体とする。

この盛土は、調査区東側では層厚約 0.6 mを測るが、SS1 の位置する部分は、約 1.6 mとかなり厚い。また、巨礫や礫を含む盛土が堀や土塁の基盤面となる(第 44 図第 116 層)。SE2 上に盛土する際は扁平な巨礫を敷き込んでいた(第 43 図3~5層)。これは軟弱土層の安定を狙う工夫と考えられる。

盛土の工法は、高所から低所へ流し込む手法を観察できるが、SE1 周辺部では土堤状または三角形状に盛土する(第 44 図第 30 \sim 32•34•36•37 層)。

第V期面は南側の谷部を埋め立て、SS1を構築する大規模な一連の造成工事で形成された曲輪面とい

える。このSS1の構築方法については後述する。

盛土中の遺物 盛土中の遺物には、SE2の上層として取り上げたものも含まれる(第 43 図第 11・37 層第 44 図第 55 層)。陶磁器や土器類は、漳州窯系青花皿(290)、青磁皿(169)や碗、白磁皿、景徳鎮窯系白磁小坏や青花、褐釉陶器、瀬戸美濃焼四耳壺(475)、備前焼甕・壺(459)・擂鉢(357・373)、瓦質土器羽釜(620)、土師器皿(577・579・584・618)、土錘(791)等がある。402 は畿内河内産とみられる。

木製品は SE2 の上・中層として取り上げたもので、桶の蓋 (939 \sim 945) や曲物の底板・側板 (953 \cdot 956 \cdot 957 \cdot 964 \cdot 965 \cdot 970)等がある。直径 $0.4\,\mathrm{m}$ 、長さ $1\,\mathrm{m}$ 程で、上下が切断された杉丸太も出土した。

(3) 1号井戸跡(SF1-c期)

土層図の作成 井戸跡の検出時は平面形を円形と 認識した関係で、その主軸と直交する方向の土層断面 図を図化記録した(第 45 図 a-b、c-d)。しかし、実際 は井戸中心と出入り口部を結ぶ線が本来の主軸方向と 判明したので遺構断面・立面図はこの主軸方向と直交 する方向で作成している(第 46 図 m-n、o-p)。

規模 井戸跡は長辺 3.5 m、短辺 2.5 mの平面長 方形の区画内に井戸本体と石敷部、排水溝さらにス テップが備わる構造を有する。これを SF1-c 期とする。

井戸上端の高さは標高 34.0 mで、井戸水の汀線 は満水時で標高 33.6 m付近にある。夏季に井戸水 を全て汲み上げても一晩で回復する湧水量を誇る。

井戸に伴う柱穴 井戸跡周囲には柱穴が十数か所 検出された。井戸跡を方形に囲うように四隅とその 延長線上に柱穴も認められる。井戸屋形(覆屋)の 柱穴の可能性もあるが、柵列(SR3)としておく(第 42 図)。跳ね釣瓶の柱穴も存在した可能性もある。

区画の構造 列石による区画は内区と外区にわかれる。内区は井戸本体側では列石、石敷部周辺は掘り込みラインを区画線とする。各隅部は直角に整う。

外区は内区の北側から東側にあり、逆L字形に置き石された直線的な区画線である。この外区と内区の間は幅 0.5 m程の空間帯が設けられる。この外区の北辺は SE1 北側壁の延長上へと連なる(第45 図)。 井戸枠の構造 井戸枠は、b期のものに石を3~6段積み足して 0.6~0.8 mほど嵩上げされる。井戸枠の平面形は主軸方向に長い楕円形となる。

石積みは東壁から南壁・西壁側にかけては垂直 で、北壁は仰角 70°とやや開き気味である。面を揃